

平成25年度  
共同公開講座報告書

平成26年3月  
大学ネットワーク静岡

## 目次

1. 下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録…………… 1
2. 地域活性化－商学連携による大学とまちのつながりの創出…………… 15
3. 静岡県における農の6次産業化と地域活性化…………… 53
4. 第2回「静岡2.0」フォーラム2014  
今私たちができる「地域」づくり…………… 79
5. 富士山講座とネイチャークラフト…………… 91

本報告書は、静岡県委託事業「平成25年度大学間の連携による共同公開講座開催業務」を受けて、大学ネットワーク静岡が開催した「共同公開講座」の記録を取りまとめたものです。

# 下田市と南伊豆町の大地に残された 地震の記録

## 実 施 事 業 の 概 要

1 共同公開講座の名称：  
大学ネットワーク静岡共同公開講座  
「下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録」

2 開催日時：  
平成 25 年 11 月 17 日（日）10:00～12:00

3 開催場所：  
下田市立朝日小学校（下田市吉佐美 544 番地）

4 事業の概要と成果：

### （1）概要

東北地方太平洋沖地震に伴う大災害を教訓に、静岡県では第 4 次地震被害想定を策定している。その一環として、静岡大学と静岡県は、津波堆積物の調査が行われていない下田市と南伊豆町で、津波堆積物の調査を行っている。これまでの調査で、津波堆積物は見つかっていないが、「地震に伴う大地の隆起」の証拠と考えられる「フジツボなどの海洋生物の化石」が確認された。この調査の結果を、講演と野外観察を通じて分かりやすいように解説した。

### （2）参加者

地域防災関係者、一般県民など 53 名

### （3）プログラム

- ・講 演：静岡大学理学研究科教授 北村晃寿
- ・野外観察：吉佐美の海食洞の隆起貝層で地震性隆起についての現地説明  
（助手：静岡大学理学部 学生 4 人）

**【共催：静岡大学、下田市】**

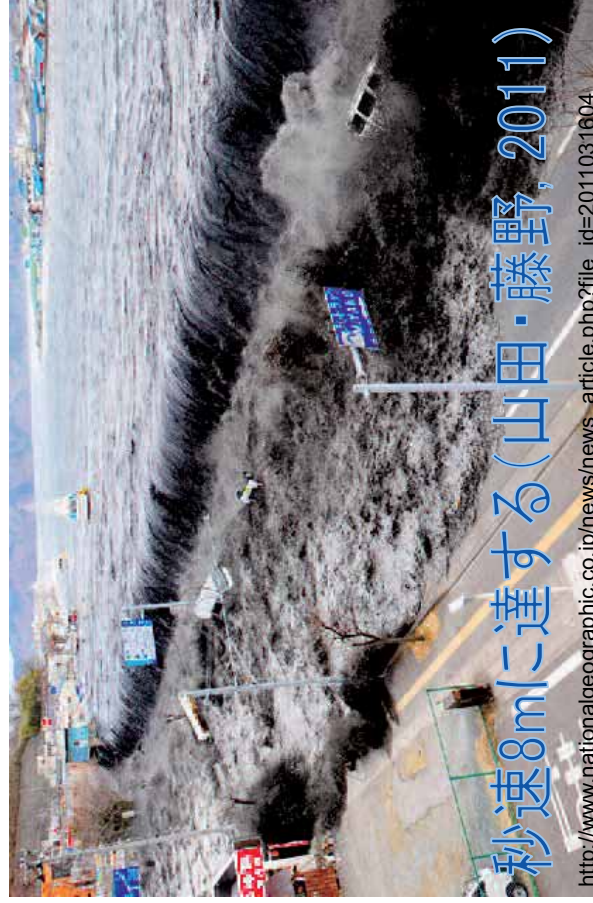
# 下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録

北村晃寿 (静岡大学理学研究科・防災総合センター, 教授)

## 話の順番

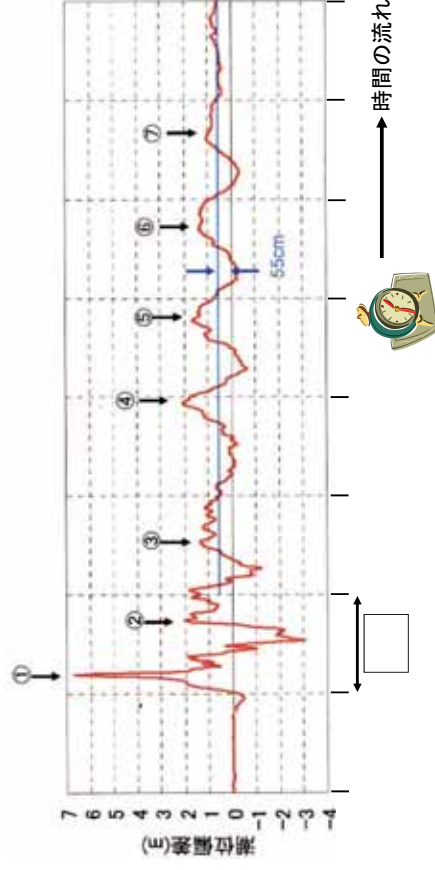
1. 2011年3月11日に発生した巨大津波と貞観津波の津波堆積物
2. 南海トラフの地震活動の長期評価(第二版) 平成25年5月公表
3. 下田・南伊豆周辺の津波堆積物・古地震調査の結果

## 宮古市を襲った大津波



## 東北地方太平洋沖地震に伴う津波

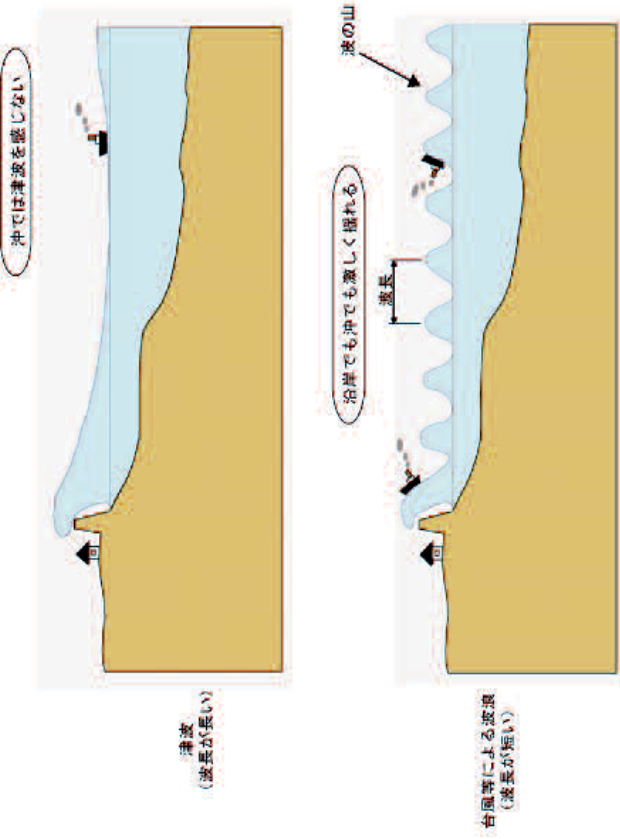
釜石沖GPS波浪計で観測された海面変動



# 津波の威力



引き伸ばされた電柱  
仙台平野



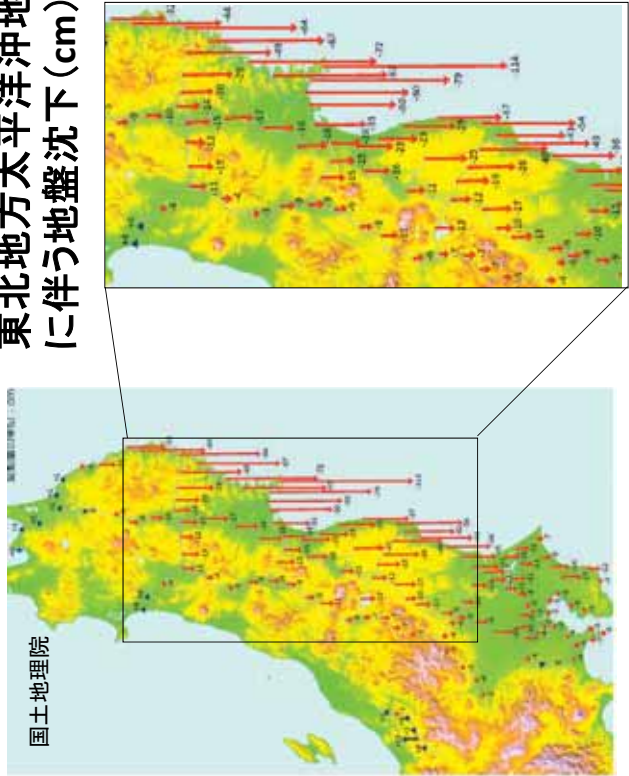
<http://www.skr.mlit.go.jp/bosai/jishin/tounannkai/kisochishiki/tunamikanke/douchigauno/douchigauno.html>

## 東北地方太平洋沖地震に伴う巨大津波と津波堆積物

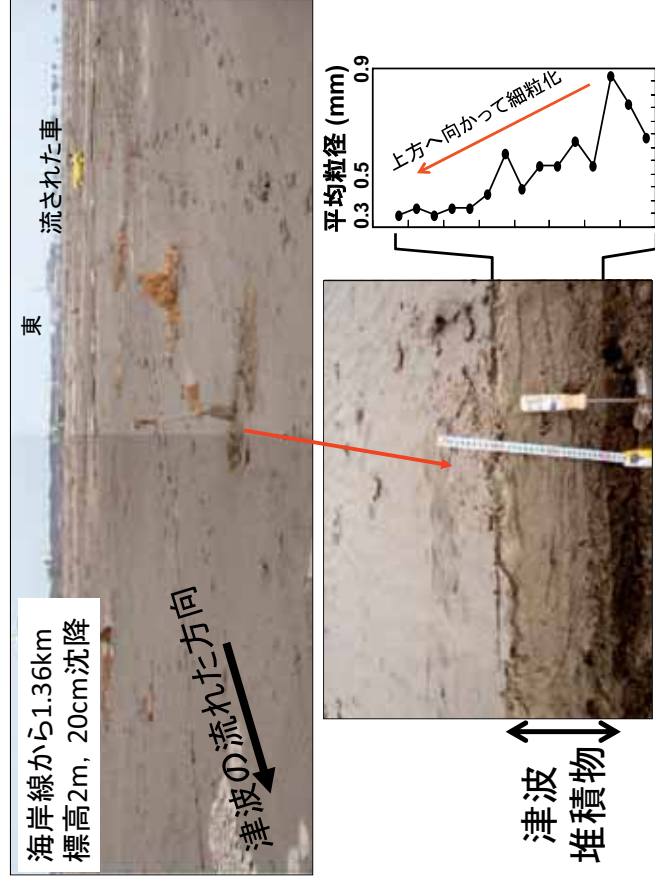


白線はTakashimizu et al. (2012)による東北日本太平洋沖地震に伴う津波の浸水深。

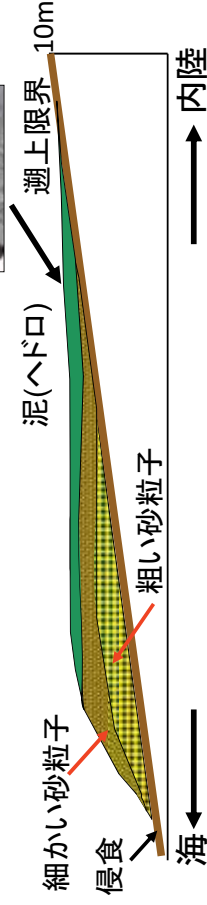
## 東北地方太平洋沖地震に伴う地盤沈下



<http://www.gsi.go.jp/common/000062923.pdf>



# 最も単純な津波堆積物の断面図



- ・側方変化: 内陸へ向かって薄層化・細粒化
- ・基底面は一般的に侵食面
- ・垂直変化: 上方へ向かって細粒化
- ・一方向流からの堆積を示す構造が発達

**貞観津波に関する三代実録の記述内容**  
 陸奥で城郭・倉庫崩れ落ち、民家倒潰するもの多数。ついで津波来襲し、海水城下にいたり、財産や田の稲すべて流失、溺死約1,000人。岩沼の千貫山付近(10m以上)まで波が来たといわれる。  
 また、福島県相馬郡で高所に津波が這い上がってきたという伝承がある。

## 貞観津波で形成された津波堆積物の発見

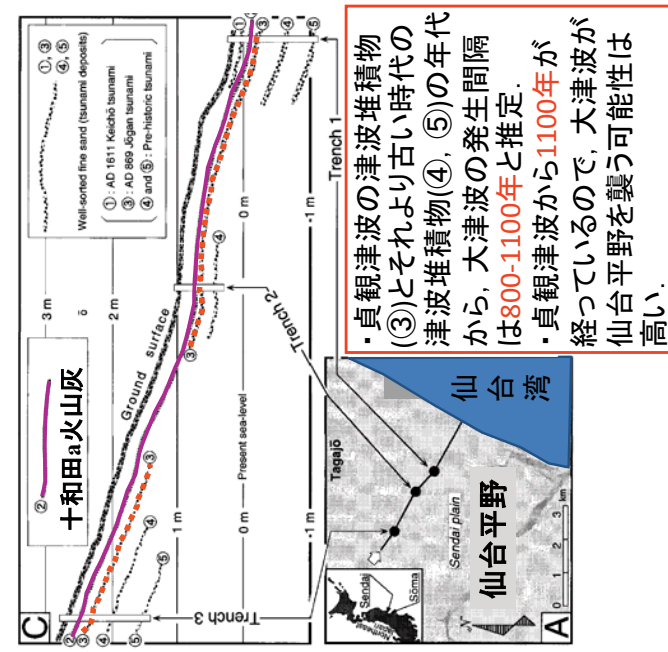
東北日本の太平洋沿岸における869年の貞観津波堆積物と大津波の再現間隔 (Minoura et al., 2001)

## 2011年と869年の津波堆積物(仙台平野)

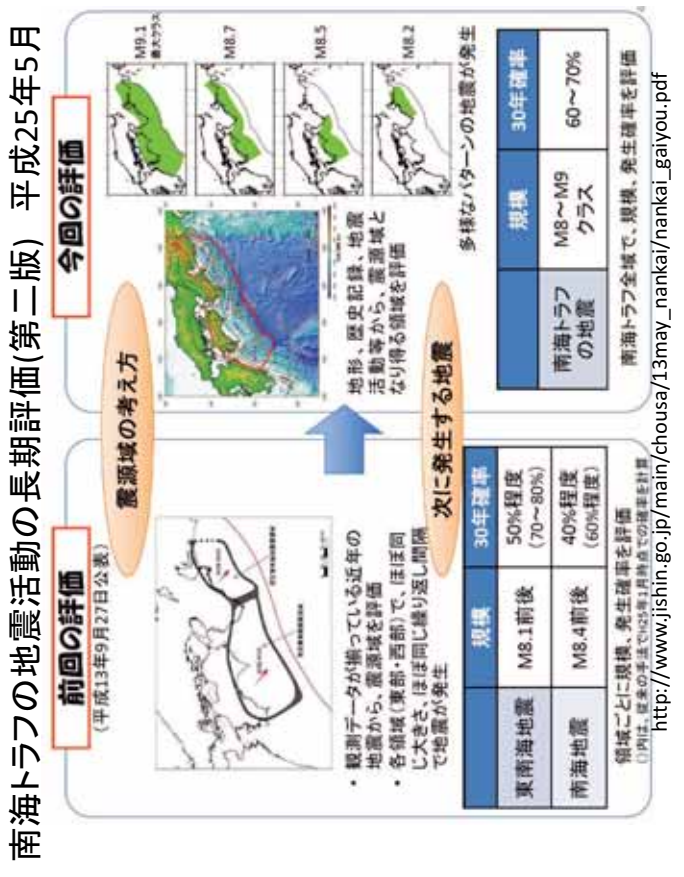


③869年の貞観津波の堆積物。仙台平野では内陸4.5kmまで分布。内陸に向かって薄層化・細粒化→砂は海から内陸へ運搬された。

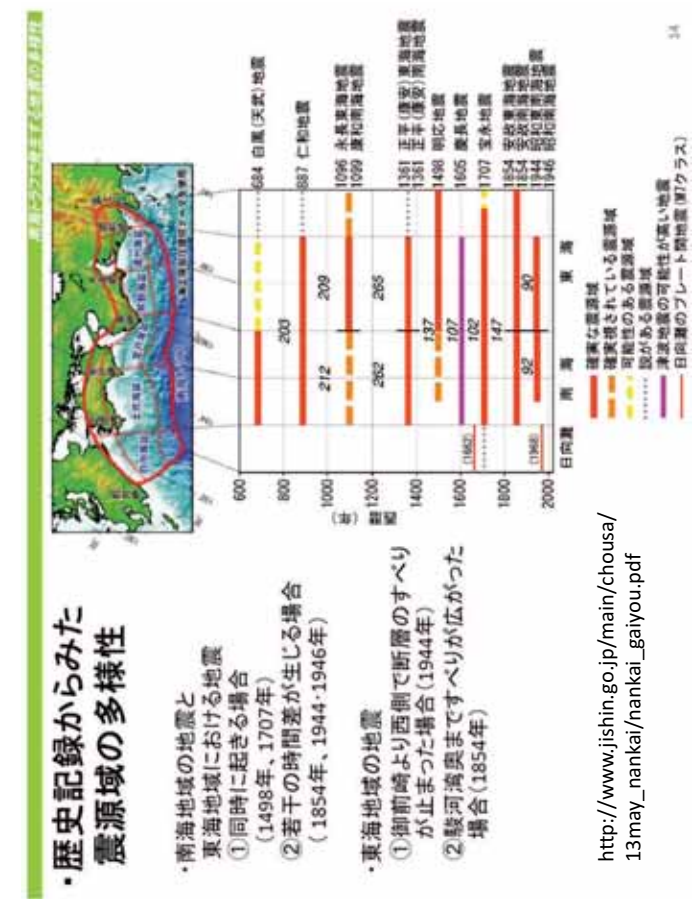
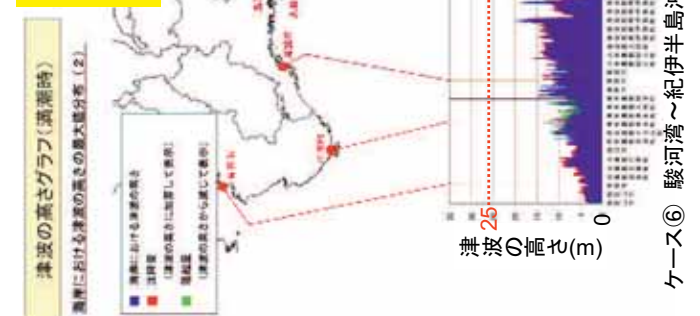
(Minoura et al., 2001)



・貞観津波の津波堆積物(③)とそれより古い時代の津波堆積物(④、⑤)の年代から、大津波の発生間隔は800-1100年と推定。  
・貞観津波から1100年が経っているので、大津波が仙台平野を襲う可能性は高い。



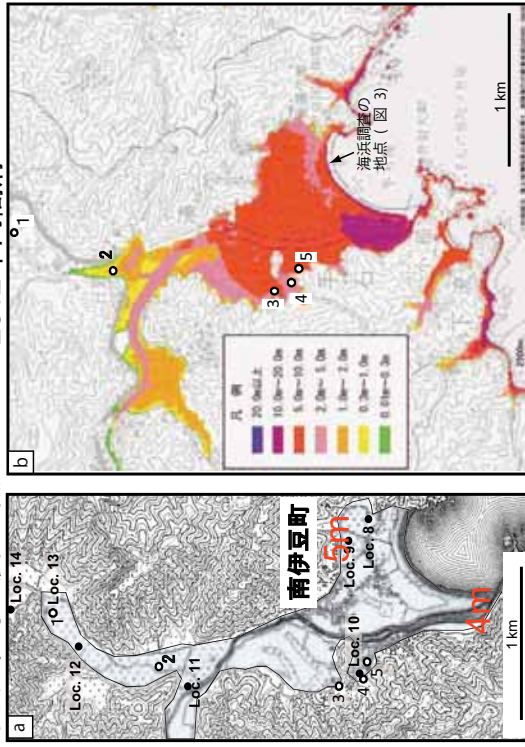
2012年、国は南海トラフにおけるあらゆる可能性を考慮した最大クラスの大津波の津波の波高を発表





# 南伊豆町

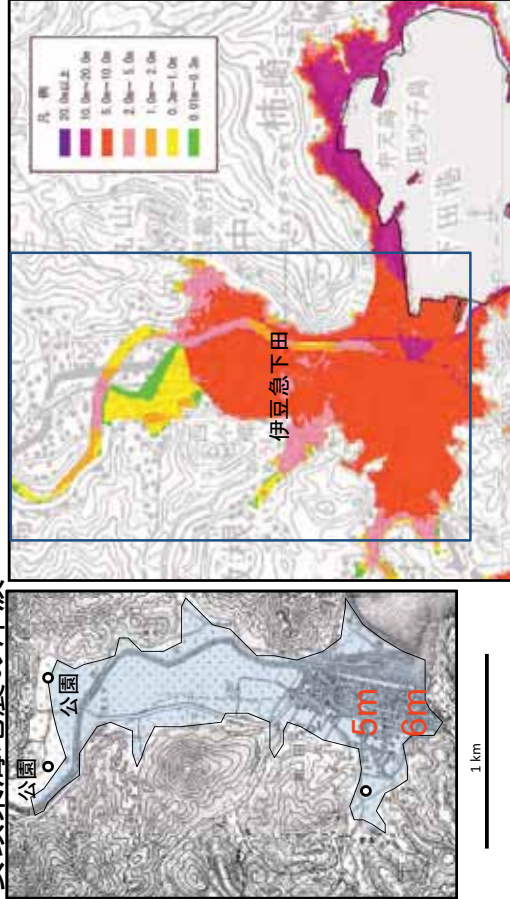
レベル1 安政東海地震の津波  
レベル2 2012年内閣府



羽鳥, 1977; 太田ほか, 1986

# 下田市街地

レベル1 安政東海地震の津波  
レベル2 2012年内閣府



## 津波堆積物の調査

静岡県と静岡大学の共同調査



## 堆積相の記載

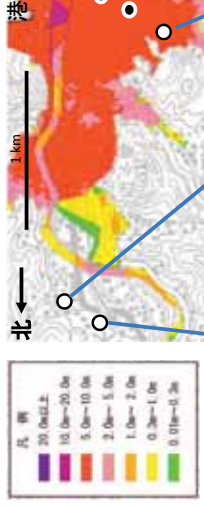
コアを半裁・記載し、柱状図を作成



## 貝化石の同定

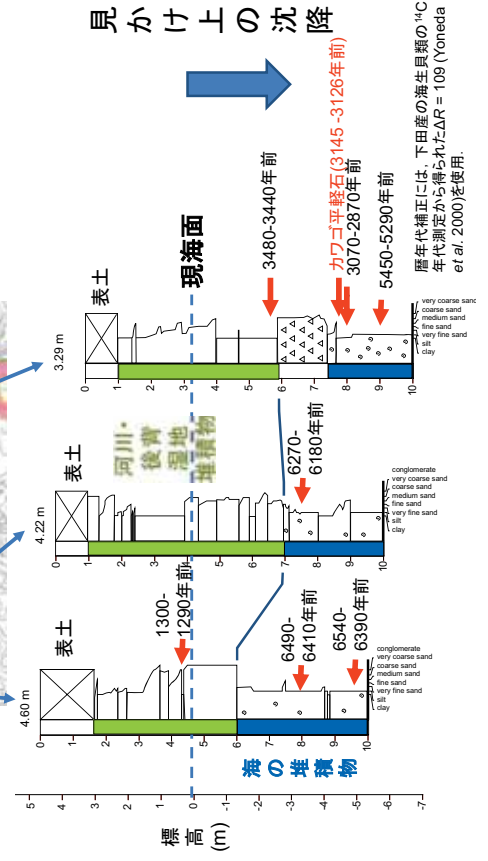


保存の良い貝化石・木片の<sup>14</sup>C年代測定

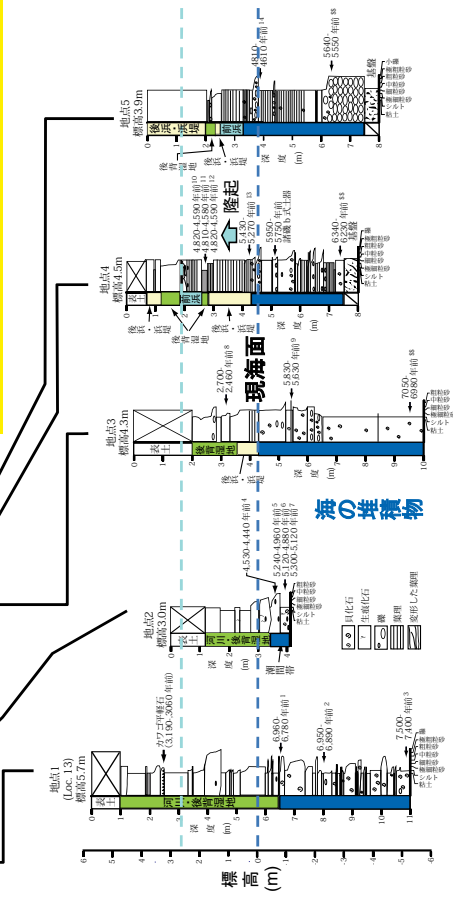
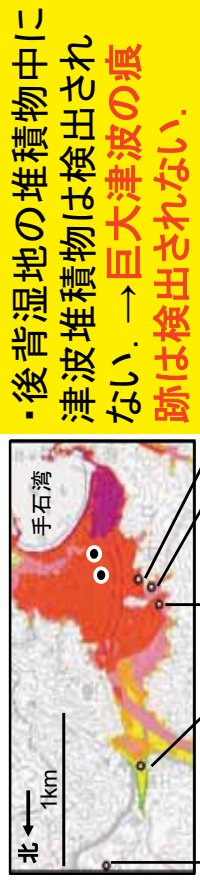


## 下田市街地

津波堆積物は見られない。



暦年代補正には、下田産の海生貝類の<sup>14</sup>C年代測定から得られた $\Delta R = 109$  (Yoneda et al., 2000) を使用。



下田市, 南伊豆町の海岸低地では、津波堆積物は検出されない。

北村晃寿・板坂孝司・小倉一輝・大橋陽子・斉藤亜妃・内田絢也・奈良正和, 2013. 静岡県南伊豆の海岸低地における津波堆積物の調査(速報). 静岡大学地球科学研究報告, 40, 1-12.

### 伊豆半島南端の古地震



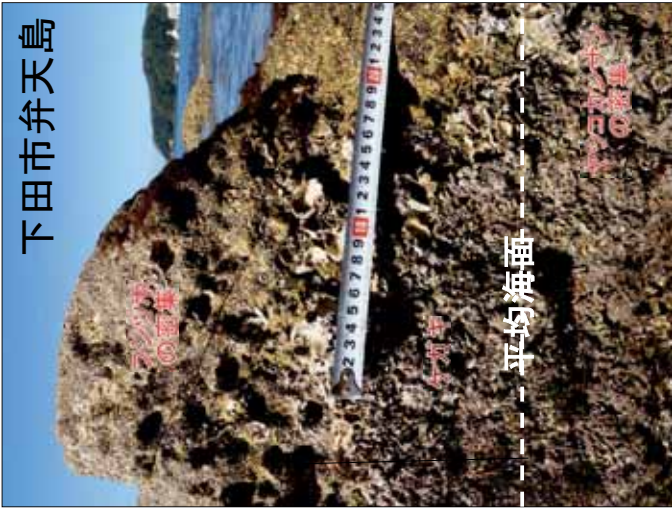
弁天島 1280±75 yBP(太田ほか, 1986)



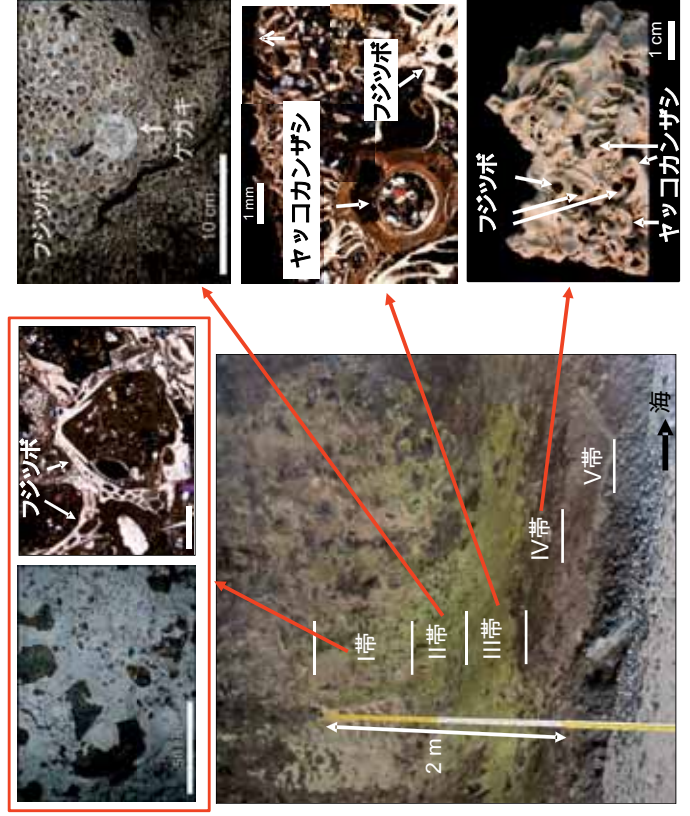
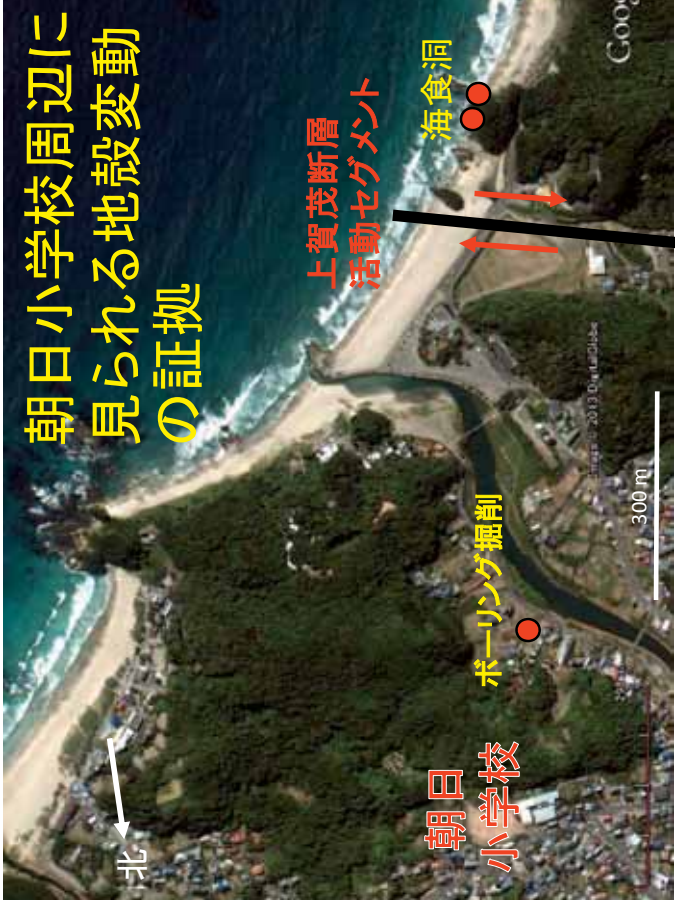
第 2 図 伊豆半島南端の海岸低地に於ける土壌試料の調査結果を示す。  
(左) 北村 晃 氏 氏 による 1729 年 上 賀 茂 断 層 (横 断 層) の 遺 跡  
(右) 太田 ほか 氏 による 1974 年 伊 豆 半 島 沖 地 震 の 遺 跡 (福富 1934)

現在では、このケガキ遺骸群は見られない。

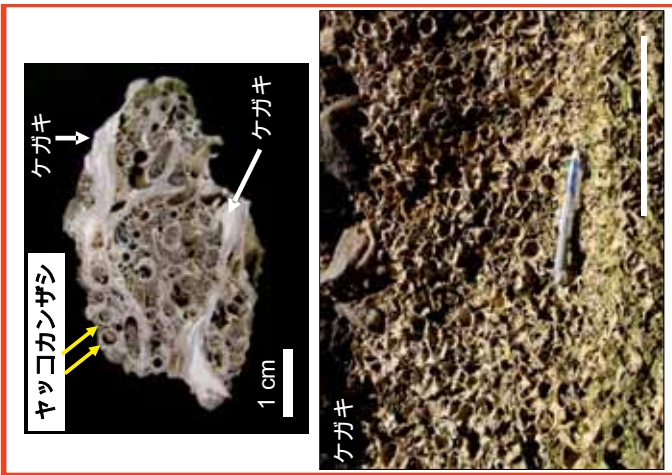
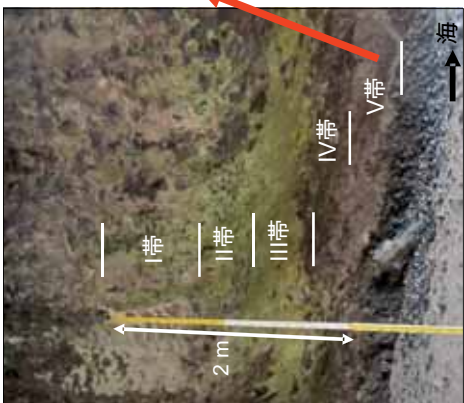
下田市弁天島



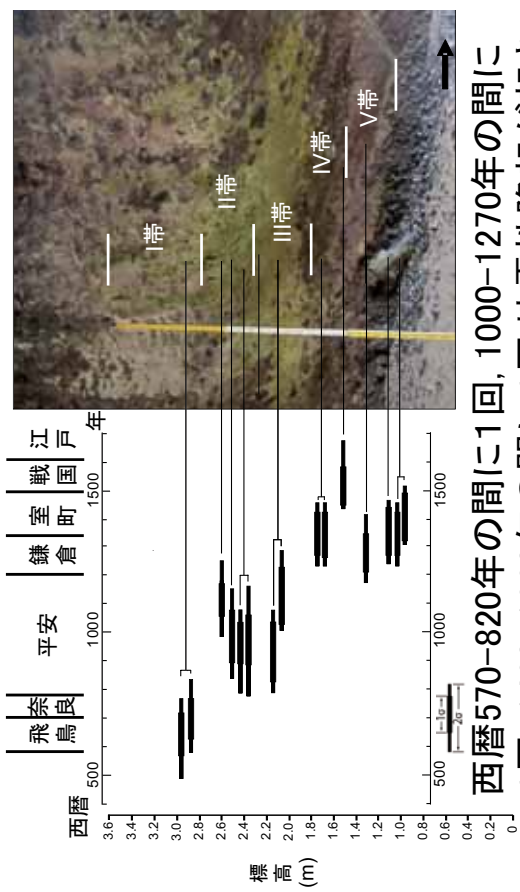
# 現生の潮間帯の固着動物の帯状分布



高い位置にある化石ほとんど、保存状態が悪い。



## 隆起貝層の年代測定の結果



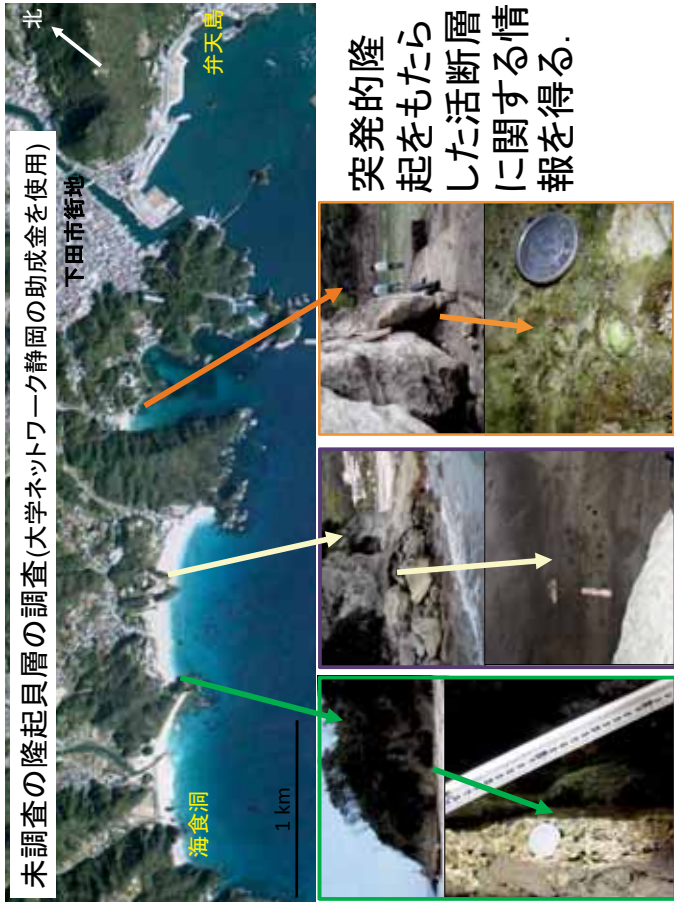
西暦570-820年の間に1回, 1000-1270年の間に1回, 1430-1660年の間に1回,地震性隆起が起き,最後の地震の隆起量は1.9~2.2mと推定.

## まとめ

1. 現在までに, 巨大津波の痕跡は見つかっていない。
2. 1500年前以降, 3回の地震性隆起があり, 最後の事象から500年経過している。
3. 最新の地震性隆起量は1.9~2.2m.

今後の調査 大海食洞の調査 (大学ネットワーク静岡の助成金を使用)





未調査の隆起貝層の調査(大学ネットワーク静岡の助成金を使用)

突発的隆起をもたらした活断層に関する情報を得る。

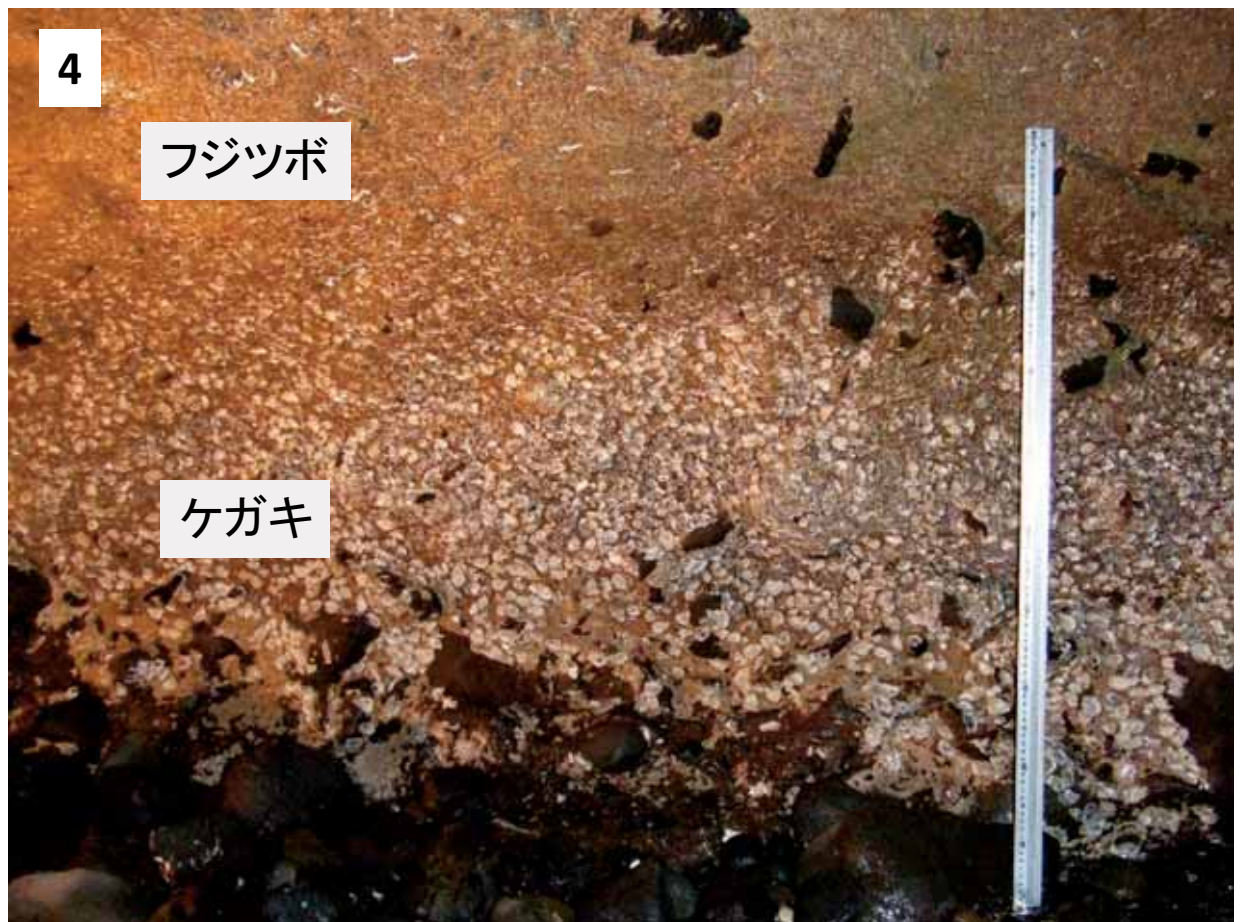
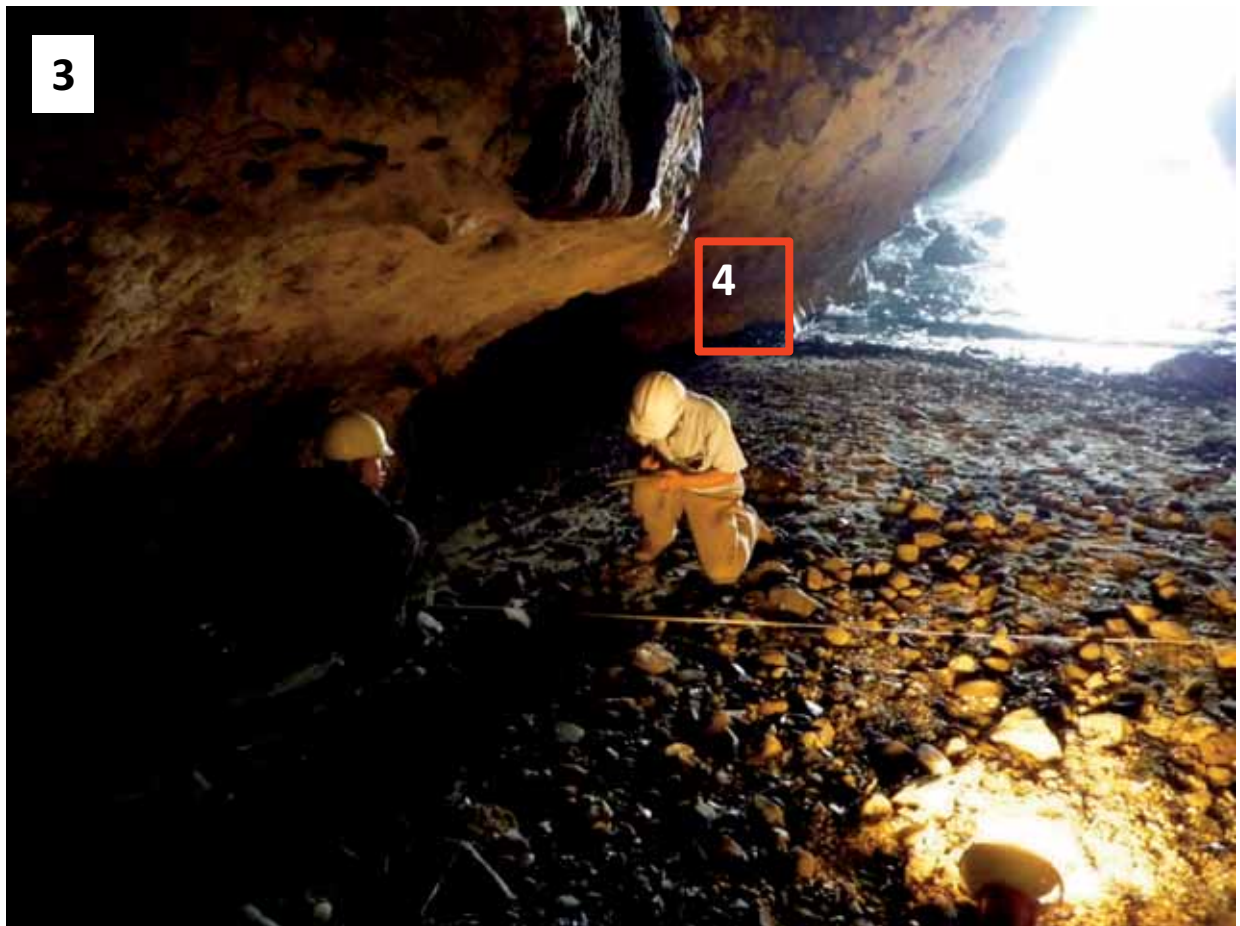


# 下田市と南伊豆町の大地に 残された地震の記録

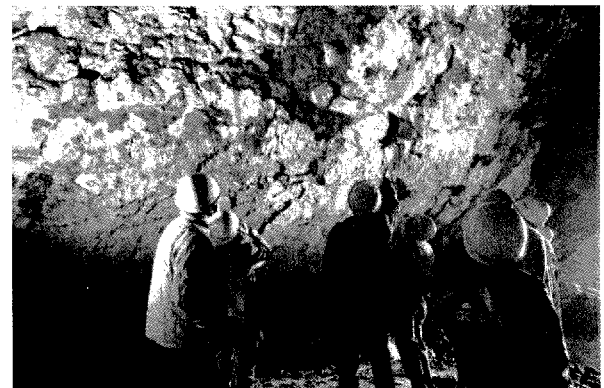
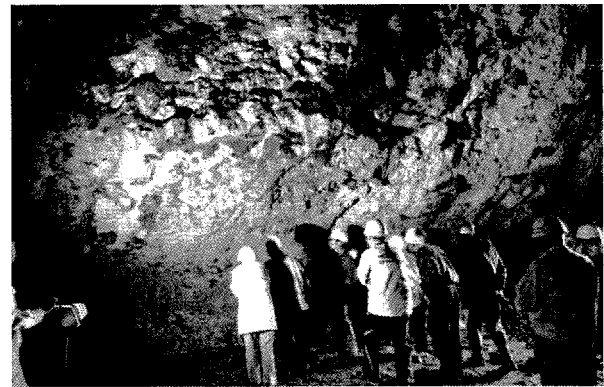
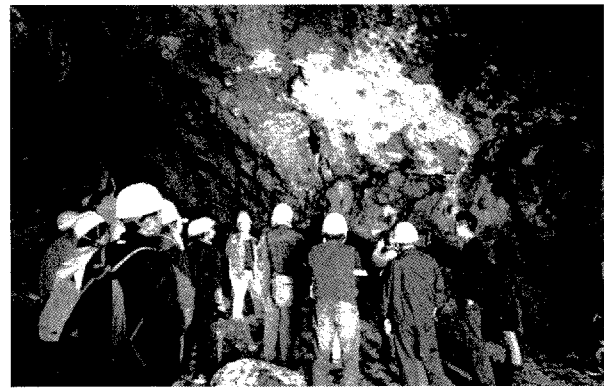
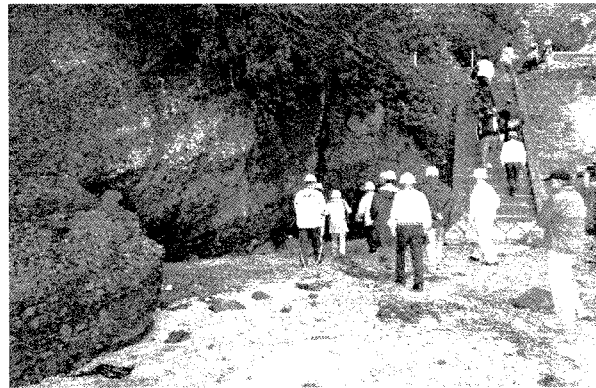
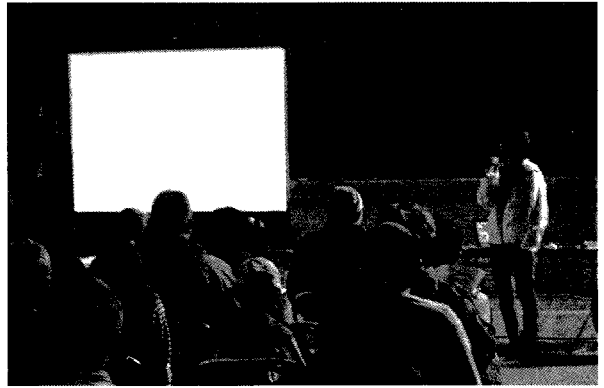


観察会資料 2013年11月17日





講座写真「下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録」





地域活性化—商学連携による大学と  
まちのつながりの創出

## 実 施 事 業 の 概 要

- 1 共同公開講座の名称：  
大学ネットワーク静岡共同公開講座  
「地域活性化-商学連携による大学とまちのつながりの創出」第1回
  - 2 開催日時：平成25年12月7日(土)14:00～17:00
  - 3 開催場所：常葉大学水落校舎 203 教室  
(静岡市葵区水落町1-30)
  - 4 事業の概要と成果：
    - (1) 概要  
県内外で商学連携を研究・実践している教員・学生による講演、パネルディスカッションを行う。地域活性化について大学や学生がどのように関わるかを、参加者と共に考え、講座を通じて地域の方へ日頃の活動の成果を伝える。
    - (2) 参加者  
商店街関係者、行政関係者、学生、一般県民など50名
    - (3) プログラム  
「まちの価値を高めよう！」  
開会・趣旨説明：常葉大学法学部 准教授 柴由花  
大学ネットワーク静岡事務局長 斉藤民夫  
常葉大学地域法政策・実践センター教授 林成蔚  
第一部：港の活性化と学生の関わりーミナトブンカサイの意義  
コーディネーター：黒瀬武史(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教)  
発表(東京大学工学部大学院生)  
第二部：学生から見た静岡県の商店街  
コーディネーター：柴由花(常葉大学法学部准教授)  
発表(常葉大学法学部学部生)  
第三部：パネルディスカッション・意見交換  
「学生・大人にとっての魅力的な場所とは」  
司会：常葉大学法学部 准教授 柴由花  
静岡県清水港管理局局長 原隆一  
横浜国立大学地域実践教育研究センター 准教授 志村真紀  
東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 助教 黒瀬武史  
茨城大学工学部都市システム工学科 助教 一ノ瀬彩  
御伝鷹まちづくり株式会社代表 関川清明  
東京大学大学院新領域創成科学研究所 望月美希  
閉 会：常葉大学 地域法政策研究・実践センター長 八木保夫
- 【共催：常葉大学地域法政策研究実践センター】  
【運営協力：静岡市まちづくり公社】

## 実施事業の概要

- 1 共同公開講座の名称：  
大学ネットワーク静岡共同公開講座  
「地域活性化-商学連携による大学とまちのつながりの創出」第2回
- 2 開催日時：平成26年1月22日(水)17:00～20:30
- 3 開催場所：ミライエ呉服町  
(静岡市葵区呉服町1丁目6-5)
- 4 事業の概要と成果：
  - (1) 概要  
県内外で商学連携を研究・実践している教員・学生による講演、パネルディスカッションを行う。地域活性化について大学や学生がどのように関わるかを、参加者と共に考え、講座を通じて地域の方へ日頃の活動の成果を伝える。
  - (2) 参加者  
商店街関係者、行政関係者、学生、一般県民など60名
  - (3) プログラム  
「まちをアート・デザインで彩ろう！」  
開 会：静岡市まちづくり公社 堀川渉
    1. 公開ワークショップ「まち遺産とまちのデザイン」  
コーディネーター：土屋和男（常葉大学造形学部造形学科准教授）  
一ノ瀬彩（茨城大学工学部都市システム工学科助教）  
コメンテーター：黒瀬武史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教）  
志村真紀（横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）  
事例研究発表：静岡モダン遺産山崎絵莉（常葉大学造形学部造形学科4年）  
ミニレクチャー：七間町映画館跡地の再生に向けて 今川俊一（静岡市都市計画課）  
参考事例発表：松本なわて通り水辺プロジェクトなわぎぶ2013  
木村明日香（茨城大学大学院理工学研究科都市システム工学専攻1年）  
グループディスカッション：街の魅力を探してみよう（ファシリテーター：一ノ瀬）
    2. パネルディスカッション「アートの力とまちのリノベーション」  
パネリスト：大石剛靖（アトサキ7実行委員会）  
野田亨（アトサキ7実行委員会）  
松井陽介（静岡市まちづくり公社）  
たたらなおき（造形作家、絵本作家）  
あまる（大道芸人、しずおか大道芸のまちをつくる会）  
一ノ瀬彩（茨城大学工学部助教）司会：土屋和男（常葉大学造形学部准教授）  
閉 会：大学ネットワーク静岡事務局長 斉藤民夫  
常葉学園常務理事 木宮岳志

【共催：常葉大学地域法政策研究実践センター】

【運営協力：静岡市まちづくり公社】

## 実 施 事 業 の 概 要

- 1 共同公開講座の名称：  
大学ネットワーク静岡共同公開講座  
「地域活性化-商学連携による大学とまちのつながりの創出」第3回
  - 2 開催日時：平成26年2月24日(月)17:00～19:30
  - 3 開催場所：常葉大学水落校舎 403 教室  
(静岡市葵区水落町1-30)
  - 4 事業の概要と成果：
    - (1) 概要  
県内外で商学連携を研究・実践している教員・学生による講演、パネルディスカッションを行う。地域活性化について大学や学生がどのように関わるかを、参加者と共に考え、講座を通じて地域の方へ日頃の活動の成果を伝える。
    - (2) 参加者  
商店街関係者、行政関係者、学生、一般県民など70名
    - (3) プログラム  
「まちの美味しさを伝えよう！」  
開 会：大学ネットワーク静岡事務局長 斉藤民生  
常葉大学地域法政策研究・実践センター長 八木保夫
1. お弁当がつなぐ大学と商店街  
タウンマネジメント協議会による長期的な取り組み  
コーディネーター：志村真紀(横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授)  
発表：岸本しおり(横浜国立大学大学院都市イノベーション学府修士2年)  
阿部なつみ(同修士1年)
  2. 金沢市の学生の取り組みとクーポンの効果  
仁志出憲聖(KAKUMA NO HIROBA(カクマノヒロバ)代表)
  3. パネルディスカッション「大学のあるまちでできること」18:40-19:20  
パネリスト：仁志出憲聖(KAKUMA NO HIROBA(カクマノヒロバ)代表)  
沼田千晴(静岡おまちバル実行委員会委員長)  
山本洋平(草薙商店会会長)  
松浦高之(静岡市経済局商工部商業労政課課長)  
一ノ瀬彩(茨城大学工学部都市システム工学科助教)  
司会：志村真紀(横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授)  
まとめ黒瀬武史(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教) 19:20- 19:30  
全体まとめ：常葉大学法学部 准教授 柴由花  
閉 会：木宮岳志(常葉学園理事)

【共催：常葉大学地域法政策研究実践センター】

【運営協力：静岡市まちづくり公社】

**第1回： まちの価値を高めよう！**

12月7日（土）14：00～17：00（常葉大学水落校舎403 参加者50名）

開会の辞 総合司会 常葉大学法学部 柴由花准教授 14：00～14：05

大学ネットワーク静岡 斉藤 民夫事務局長

常葉大学 地域法政策・実践センター 林成蔚教授

**1. 港の活性化と学生の関わりーミナトブンカサイの意義** 14：05～14：40

コーディネーター：黒瀬 武史（東京大学助教）

東京大学大学院・遠藤 友里恵

東京大学大学院・道喜 開視

**2. 学生から見た静岡県の商店街** 14：40～15：15

コーディネーター：柴 由花（常葉大学法学部准教授）

常葉大学法学部・木藤 好香 山下 和也 曳野 彩音 望月 克真

休憩（質問表配布） 15：15～15：25

**3. パネルディスカッション・意見交換** 15：25～16：55

「学生・大人にとっての魅力的な場所とは」 司会：常葉・柴

静岡県清水港管理局局長・原 隆一氏

横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授・志村 真紀

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教・黒瀬 武史

茨城大学工学部都市システム工学科助教・一ノ瀬 彩

御伝鷹まちづくり委員会会長・関川 清明

閉会の辞

常葉大学 地域法政策研究・実践センター長 八木保夫 16：55～17：00

## 目的

本講座では、まちの価値を高めるために、どのような取り組みがなされているかを紹介しつつ、地域の活性化における学生の必要性、地域のあり方について考える。第Ⅰ部では、東京大学大学院デザイン研究室が地域の活性化や清水港の活性化にどのように関わってきたか、これまでの経緯と今後の予定について報告をする。第Ⅱ部では、常葉大学法学部柴研究室が、地域の活性化に学生が必要とされている理由や、静岡県の商店街の現況について報告を行う。第Ⅲ部パネル・ディスカッションでは、静岡と清水を中心に、学生・大人にとっての魅力的な場所とは何かについても考える。

### I 港の活性化と学生の関わりーミナトブンカサイの意義

#### 1. 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教・黒瀬 武史

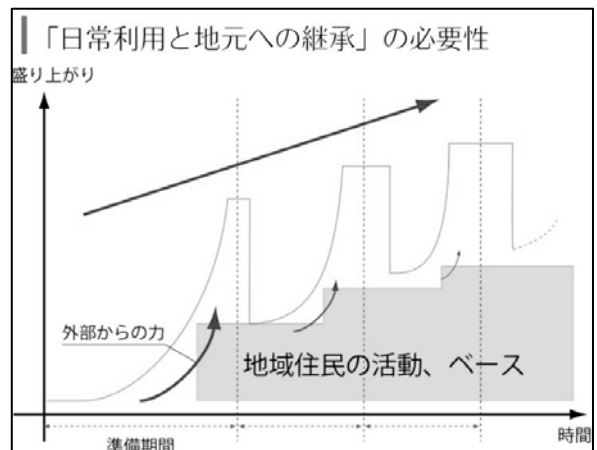
学生は不完全であることが重要である。学生が地域と関わることで、地域の声を吸い出すことが可能とある。地域の活性化のためには、学生の居場所を作ることが必要である。

清水港の倉庫地域で、ミナトブンカサイを2012年、2013年に企画し、東京大学、常葉大学造形学部、法学部（2013年から）の学生が中心となってイベントを企画し、賑わいを創出した。

#### 2. 「日常利用と地元への継承」東京大学大学院・遠藤 友里恵

イベントから持続的なまちづくりへの転換には、以下のプロセスを経ることが重要。

- ① 学生の提案を学生と地域で実施する
- ② 地域だけで実施できるような体制（組織・手法）を整える
- ③ 大学が段々手を引いていく
- ④ 地域でまちづくりの方針を考える
- ⑤ その方針にもとづいた取り組みを開催する



#### 3. 「清水プロジェクトの経緯」東京大学大学院・道喜 開視

東京大学工学部都市工学科都市デザイン研究室の取り組み

##### ① 2011年

静岡市より清水港の魅力を生かした港湾再生に向けた調査依頼を受けたことが本プロジェクトの始まり。まずは清水港の資源や魅力を調査、研究、整理し、市民に発信することを試みた。川湊によって栄

えた江戸期の歴史的資源や近代港として発展した明治期や昭和期の産業的遺産などが清水には存在する。そうした資源の価値を時代や用途などで整理することで魅力を発見した。そうした中で、こうした清水港周辺の魅力に気づいていない市民が多いことがわかり、清水港の魅力を市民に発信するためにマップの作成や街歩きツアーなどを行った。

清水港の資源や魅力を研究・整理する  
清水港の魅力を発信する

**市民に発信する**

市民が自分のまちに興味を持ち、  
魅力を高めようとするきっかけづくり

- ・ WALK&CYCLE マップの作成
- ・ まち歩きツアーの実施

港の魅力に気づいていない市民が多い



## ② 2012 年


2011年に続き、清水港周辺の資源を調査しながらも未だ清水港の魅力に気づいていない市民が多いということで、より多くの市民に魅力を伝えるために子供向け WS やミナトブンカサイという社会実験を実施した。子供向け WS では街歩きとレクチャーにクイズを加え、楽しみながらみなどを学ぶことのできるものとし、その後の清水港の模型づくりでは清水港にほしいものを子供達に自由に作成してもらい、清水港について考える機会を作った。また、ミナトブンカサイでは日の出埠頭倉庫群の前面道路を利用してマルシェやライブ、アート展示などを行い、多くの市民に港の魅力を感じてもらい、同時に港湾の大空間の利用可能性を示した。ここでは常葉大学などの地元団体に参加にしてもらうことによって港の利用可能性について考えてもらうきっかけとした。

周辺市街地の暮らしや空間との関係を考える  
港の魅力に気づいていない市民が多い  
実際の空間の使い方の検討・提案

**市民への発信**

多くの市民に魅力を伝えるイベントの実施

- ・ 子供向け WS
  - みなどを歩きとレクチャー
  - 清水の港にほしいものを考え表現
- ・ ミナトブンカサイ
  - 市民に魅力を伝え、関心を高める
  - 港湾の大空間を利用し可能性を示す
  - 地元団体の参加を促進



### ③ 2013年

清水港線跡地遊歩道の活用提案を静岡商工会議所と共に実施する中で JR 清水駅周辺から三保までを含めた広域的な港の魅力を、交通など港と周辺市街地との繋がり の提案により示した。また、社会実験として「清水みなと散歩」を実施し、スタンプラリーで港周辺を回ることにより広域的で連続的な港の魅力を市民に発信した。この社会実験の一環として 2012 年に実施したミナトブンカサイを実施し、前年より港らしい空間を味わえ、楽しめる場とした。また、開催にあたり地元団体の役割が増えること、イベントに参加する団体をより増やすことで、地元主導へ徐々にシフトし、地元団体同士のネットワーク形成のきっかけともなった。

<p><b>交通など、港と周辺市街地との繋がり の提案</b> 日常的な利用提案に向けた土台作り 市民が中心となった取り組みの必要性</p> <p><b>清水みなと散歩の実施</b> 港と市街地の回遊実験 ミナトブンカサイの実施での市民への発信 地元主導へのシフト</p>	
--	--

### ④ 今後

日常的な利用に向けた実験的取り組み  
地元主導の活動を増やしていく（連携を高めていく）

## 4. フロアからの質疑

Q どのようにしたら継続が可能か。

A 学生の居場所を作ることが一つの方法。予備的にカフェ等が創出することもある。

## II 学生から見た静岡県の商店街

### 1. 商店街活性化のための施策

地域活性化のための法律として、商店街振興組合法・地域商店街活性化法があり、商店会等の組織化や地域とのコミュニティづくりを促進することで、補助金を交付している。他に、静岡県、静岡市の条例等によって、商店街に補助金を交付している。浜松市では、中心市街地の建物の新築に対して固定資産税の減免を行い、インセンティブを付与している。

もともと、こうした国、県、市の施策は主として補助金を活用するもので、補助金を活用したイベントについては継続性の問題があるし、補助金によるアーケード等の撤去には合意形成の問題がある。補助金による活性化策によって、人口減は解決できない。

### 2. 静岡県の商店街の特徴

山下和也（常葉大学法学部 1 年）



浜松市では、商店街で事業を行う全ての事業者が商店会へ加入し、市民と連携しながら、商店街の活性化に向けた取り組みに参加協力することで、事業者、市民等が連携したまちづくりの形成と、商店街の活性化を図ることを目的とした「浜松市商店街の活性化に関する条例」(H20)が策定されている。また、中心市街地における業務機能と賑わいのある街づくりを進めるため、店舗等を含む新築増築の建物に係る固定資産税を軽減する制度がある。浜松商店界連盟は、1948年(昭和23年)、浜松商店界連盟市内18町1地域の商店会(街)が集まって結成された。最近では、浜松まちなかにぎわい協議会が結成されている。

木藤好香(常葉大学法学部1年)

藤枝宿上伝馬商店街振興組合は、商店街活性化事業計画を立案、国に申請し、「藤枝のお茶を活用した地域高齢者に優しいコミュニティ型宿場町の創造・活性化事業」や、既存アーケードの撤去と新しい街路灯の建設を行っている。振興組合の方々が想定していた金額よりも、少ない金額しか補助されなかった。振興組合は借金を抱えており、これからのイベントにかかる経費も削減せざるを得ない状態となった。老朽化したアーケードを取り外したことによって、崩れ落ちる危険性や古びた感もなくなって、開放的となり、以前より明かりが確保でき、各店舗の見通しがよくなった。

曳野彩音(常葉大学法学部1年)

地域商店街活性化法に基づく地域中小商業支援事業は、地域商店街等のコミュニティ機能再生によって地域の生き活きとした商店街等が再生されることを目的とした支援である。2013年2月、静岡県としては藤枝市と静岡市長谷通り2箇所支援を受けた。長谷通り商店街はLED電灯導入で、エコに優しく明るい商店街になった。商店街の方にヒアリングしたところ、近代的な店、とくに若者をターゲットとしたお店がもっと増えてほしい、フラッと立ち寄れるお店があることによって、お客さんが店の前を通り過ぎるだけでも嬉しいといった声が聞かれた。

望月克真(常葉大学法学部1年)

清水銀座はかつての東海道江尻宿が商店街として発展した。清水銀座、駅前銀座ともに「ちびまる子ちゃん」の舞台としても知られ、作中には実在の店舗も登場する。商店街の特徴としては、上層階が歩道にせり出したセットバック方式とよばれる建物が挙げられ、これはアーケードとしての機能と、住居スペースの確保を狙ったものである。活性化策として、駐車場の拡充や無料開放、無料駐車券の提供、道路幅の拡張や歩行者に配慮し、バリアフリー化、ベンチの設置をしている。

(静岡県の商店街の特徴)

土地区画整理事業を伴う商店街の再開発が少ない。旧東海道沿いには、古い道なりの商店街が多いため、駐車場の問題がある。名古屋市の大曾根商店街、大須商店街に比較してみると、大須的な要素があり、発展の可能性はある。

静岡市では、「規制緩和」が合い言葉だったバブル時代に「静岡方式」と呼ばれる出店規制を行い、郊外の大規模商業施設の出店に抵抗した。

少子高齢化による客足の減少や後継者不足に悩んでいる商店が少なくない。他方、スーパーと個店と

の共存によって客足の確保している商店街がある。

商店街活性化のための各種のイベントが各地で行われており、商店街への人の呼び込みやイメージ向上などを図っている。

### 3. 商店街活性化と学生

金沢では、「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」を制定し、学生と商店街との交流を行政が支援している。郊外の大学から、大学生を街中に集めるため、市の中心部に交流館を建設した。そこでは、学生サークルがイベントの企画等を行い、商店街等でイベント等を行っている。

横浜国立大学地域実践教育研究センターは様々な「地域課題プロジェクト」等に取り組んでおり、和田町商店街では、大学とまちのつながりを創り出す試みがなされている。横浜国大の学生は和田町商店街の Wit Wada (旧町内会館) をリノベーションして活動の場所を確保している。ワダヨコプロジェクトは、空間デザイン系の取り組み、和田町駅前開発計画、和田町ショップデザイン、和田べっぴんマーケット等の企画を行ってきた。ワダヨコプロジェクトの主な活動は、商店街における週に1度の寺子屋で、勉強したい子供やお兄さんと遊びたい10人~20人くらいの児童が集まる。商店街では、キャンドルナイト、スイカ割ならぬボール割など、様々な企画を行っている。建築学部の学生は、実際に、商店街の建物のトイレの施工を行うなど、学びを実践したり、活動に参加することで単位が取得できる(初年度のみ)。初年度以降もボランティアで活動を継続する学生も多い。ワダヨコの企画は「和田町タウンマネジメント協議会」で検討される。この会は、和田町を中心とする地域の更なる活性化を目指して毎月1回、和田町で活動する人で集まり意見交換をおこなう組織である。

静岡市では、I LOVE しずおか協議会が学生のインターンシップに取り組み、イベントの企画等で商店街との連携を図っている。

**III 商店街活性化と学生**

1. 「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」(H22)  
地域社会が可能性豊かな学生を育み、学生と市民との相互の交流や学生と金沢のまちとの関係を深めながら、学生のまちとしての金沢の個性と魅力をさらに磨き高めていく

金沢学生のまち市民交流館



http://www4.city.kanazawa.lg.jp/22050/shiminkouryukan/index.html

28

**2. ワダヨコ 和田町商店街×横浜国大**

地域実践教育研究センター

(寺子屋) Wit Wada (旧町内会館)



http://artsite.yafjp.org/2012/project2012/2012-p

### Ⅲ パネルディスカッション・意見交換

「学生・大人にとっての魅力的な場所とは」司会：常葉大学法学部 柴 由花 准教授

#### 1. 各団体の取組みとそれに対するコメント

##### ・静岡県清水港管理局局長 原 隆一

清水港は国際拠点港湾。海辺はソーラス条約によってフェンスが張られているため、現在は、近寄ることができない。倉庫群については、解体よりも維持していくことが必要。東大等のミナトブンカサイは港を活性化する上で、重要であり、民間企業にもその意義を伝えていく必要がある。活性化のためのまちづくりにおいて、納得のいくまで議論をすることも必要。

##### ・御伝鷹まちづくり株式会社代表 関川 清明

伝馬町は徳川時代から自治を与えられてきた。再開発による大型店の出店に際して、話合いによって共存してきた。専門学校との連携によりファッションショーなどで活性化を図っている。

##### ・東京大学大学院・望月 美希

高校まで清水で暮らしてきた。あまり地域を盛り上げる活動が行われていないと思っていたが、大学院で清水プロジェクトに関わり、様々な団体が活動しており、驚いた。2月の清水みなとさんぽでも各団体に協力してもらう予定。静岡や清水は外にあまり発信しない傾向があるのが残念。

#### 大学が地域と連携する場合の注意点

・大学の教員として、地域の政策提案に関わることが多いが、一つの専門分野で解決できないことが増えている。地域との関わりでは、その地域の自立性を高めることが大事。大学が手を引くタイミングが問題。地域に関わる際には、大学教員の専門性を活用したほうが、より魅力的なまちづくりとして発信することが可能（志村）。

・茨城の駅前に比べ、静岡の駅前は活気がある。地域がしっかりとビジョンを持っていれば、それに対する支援がし易い（一ノ瀬）。

・倉庫群の活性化については、学生が直感的に取り組みたいと思った。学生はモチベーションが上がっているときはよいが、やる気がなくなったときは大変（黒瀬）。

#### 2. 質疑応答・意見交換

①商店街の閉店時間を遅くすることはできないか。

・横浜の松原商店街は、年に1、2度ナイト・バザーをやることで、普段、商店街に来れない人を集客している（志村）。

住み分けが必要で、無理に閉店時間を遅くする必要がないのでは（関川）。

## ②太田町商店街の取組みと効果

太田町商店街では、夜店市を年に1回行っている。地域の高校、幼稚園にお願いしてチアリーダーや和太鼓演奏をしてもらう。それによって、親だけでなく祖父母も商店街に来てくれる。

## ③静岡市から見た商店街

エリアごとに商店街の方々ががんばって、活性化に取り組んでいる。

## ④静岡から見た清水、清水から見た静岡。今後は、両地域はどのようにあるべきか？

- ・地域からの発信は、まず、県内に発信することが必要。地域の方は、自分からは語らないので、学生との対話によって、語りを引き出すことが可能（原）。
- ・清水のシンボルとしてはドリプラくらい。魅力的なイベントがあると、静岡から清水に遊びに行ってみようと思う人がいる（例、たきびカフェ）（一ノ瀬）。
- ・買い物は静岡、景観は清水といった棲み分け（志村）。
- ・清水は海があることが大きな要因。商店街については、景気の低迷などで、ある意味底となったとき、今までやれなかったことに挑戦してみようという機運が生まれる可能性がある（黒瀬）。

## IV まとめ

清水は、港湾として重要なだけでなく、優れた景観を有している点において、静岡市の中心市街地と異なる魅力を有している。港エリアの活性化のために、県内外の大学の研究室が、地域の大学や行政、商工会議所と連携してイベントや土地利用を企画している。他方、静岡市の中心市街地は買い物という点では魅力がある。I LOVE しずおか協議会は学生のインターンシップを取り入れ、活性化に力を入れている。静岡県の商店街の多くは、旧東海道沿いに存在しており、少子高齢化による客足の減少や後継者不足といった問題を抱えている。歴史を活かした商店街の活性化などが行われている。商店街と地域の連携は、補助金等によって、誘導されているが、補助金によって、少子高齢化の問題を解決することは難しく、むしろ地域の学生と連携することで、可能性を見出すことができる。その+ためには、空家を利用した学生の居場所を作るなどの試みが必要。今後は、学生の活力を生かした地域の活性化が望まれるが、学生団体等の連携も必要になる。



パネルディスカッション

## 第2回 アート・デザインで街を彩ろう！

1月22日（水） 17:00-20:30（ミライエ呉服町 参加者 60名）

開会の辞 堀川渉（静岡市まちづくり公社）

### 1. 公開ワークショップ「まち遺産とまちのデザイン」17:05-18:45

コーディネーター：土屋和男（常葉大学造形学部造形学科准教授）

一ノ瀬彩（茨城大学工学部都市システム工学科助教）

コメンテーター：黒瀬武史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教）

志村真紀（横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）

趣旨説明、本日の流れ（土屋）

事例研究発表：静岡モダン遺産 山寄絵莉（常葉大学造形学部造形学科4年）

ミニレクチャー：七間町映画館跡地の再生に向けて 今川俊一（静岡市都市計画課）

参考事例発表：松本なわて通り水辺プロジェクト なわぎぶ 2013

木村明日香（茨城大学大学院理工学研究科都市システム工学専攻1年）

グループディスカッション：街の魅力を探してみよう（ファシリテーター：一ノ瀬）

### 2. パネルディスカッション「アートの力とまちのリノベーション」19:00-20:30

パネリスト：大石 剛靖（アトサキ7実行委員会）

野田 亨（アトサキ7実行委員会）

松井 陽介（静岡市まちづくり公社）

たたらなおき（造形作家、絵本作家）

あまる（大道芸人、しずおか大道芸のまちをつくる会）

一ノ瀬 彩（茨城大学工学部助教）

司会： 土屋 和男（常葉大学造形学部准教授）

閉会の辞 斉藤民夫（大学ネットワーク静岡事務局長）

木宮岳志（常葉学園理事）

## 目的

都市計画、建築計画において、ストック活用型の提案が求められる今日、市民が見過ごしている潜在的なまちの価値を発見することが重要である。そのとき有効な手段となるのがアート・デザインである。まちをキャンバスや舞台として、アート・デザインの現場ととらえ直すことで、普段気づかなかったような価値を創出したり、忘れていた遺物を遺産に変えることができる。このプロセスは、地方都市における商店街の活性化プログラムとしても重なるところが大きい。

今回は静岡市内中心部の最も古い商店街のひとつである七間町に焦点を当て、かつて映画館街として知られた同所が、2011（平成 23）年の主要映画館撤退後、歩んできた試みを中心に内容を構成した。約 2 年間にわたり映画館跡地を「アトサキ 7」と名付け、さまざまなまちづくり活動が行われてきたが、ここでそれらを振り返り、今後の中心市街地活性化の展望を得ることを目的とした。

### 1. 公開ワークショップ「まち遺産とまちのデザイン」

第 1 部はワークショップ形式とし、まず議論の糸口として、学生による発表、市の担当者による七間町におけるまちづくりの経緯説明、長野県松本市におけるデザインによる活性化事例の発表が行われ、その後、学生と市民が意見を交換するグループディスカッションが行われた。

#### (1) 静岡モダン遺産～七間町からシビックプライドの輪を広げる取り組み 山寄絵莉（常葉大学造形学部造形学科 4 年）

静岡市中における歴史的遺産を活かし、それを市民に知ってもらうことを通して、シビックプライド向上のきっかけをつくろうという提案。静岡市中は 1940（昭和 15）年の大火、1945（昭和 20）年の戦災で多くの古い建築物が失われたが、それでも今なお、江戸期以来の街割り（呉服町と七間町、旧東海道等）やいくつかの著名建築物（静岡市役所、静岡県庁、静岡銀行、矢澤レンガ蔵）が残っている。また、大火と戦災から復興する過程で形成された道や建物（青葉通り、背割り道路等）もある。江戸期の建築物（東照宮、浅間神社）に比べると遺産としての認識が少ない、街割りや近代の建築物を、古い写真と説明とともにパネル化し「アトサキ 7」で展示させてもらった。

この作品制作の過程で、「アトサキ 7 会議」で説明したり、古い写真を探したりと、地元のみなさんとの交流があったことはもとより、展示において来訪者と直接やりとりできたことが、ささやかなまちづくり活動につながっていると考える。

#### <質問>

「どうやって市民の方とやりとりしたのか?」「まちについてどんな提案がでてきたのか?」  
—「アトサキ 7」で意見をうかがい「静岡は道が似ていて道に迷いやすい」「道の名前の由来がわかるとよい」という意見から、江戸期以来の通りの名称を活かしたマンホールの提案を行った。迷いやすい碁盤の目街区（徳川家康による城下）も歴史的な遺産のひとつととらえる。

(2) 七間町映画館跡地の再生に向けて—行政の視点から 今川俊一（静岡市都市計画課）

2009（平成 21）年、七間町の主要な映画館であった 3 棟の建物が閉館することが報道され、「七間町の明日を考える会」を中心に議論を重ねた。地元では危機感と不安が多く、映画館なきあと、この地域をどのように魅力あるまちとするかが課題となった。

2011 年、映画館の解体と同時期に、跡地の開発主体が見えてきた。オリオン座跡には、市の水道局が移転し、合わせて調理専門学校が入る。向かいの敷地は地元ディベロッパーによる高層マンションが決定。地元の議論のなかで「歴史・文化・下町力」がキーワードとして挙がり、これをもとにまちなみ空間づくりの構想が進んだ。

2012～13 年、次の建物ができるまでの跡地にコンテナを置き、「アトサキ 7」として、静岡市まちづくり公社の管理下で拠点として活用。ここでさまざまなアーティストによる活動が行われてきた。

<質問>

「アーティストがかかわるきっかけは？」

—拠点があることが大きい。まちづくり公社のスタッフが常駐しているところに提案があり、「それがいいね」という流れで始まったことが多い。自然の流れのきっかけを探るのが今後のヒントになるかもしれない。

(3) 松本なわて通り水辺プロジェクト なわぎぶ 2013 木村明日香（茨城大学大学院理工学研究科都市システム工学専攻 1 年）

地方都市でのデザインによる商店街活性化の事例として、長野県松本市のナワテ通りでの取り組みを紹介。女鳥羽川沿いの立地を活かし、水辺とまちをつなぐツールとして「なわぎぶ」を開発し、ここから展開してさまざまなまちづくりを提案している。駅と松本城の中間という立地も、静岡の参考になる。

「なわぎぶ」とは「なわてぎぶとん」。水辺の利用を促すために、「水辺のおもてなし道具」として、発泡スチロールにテープや布などを巻いた座布団をつくった。これを展開させてディスプレイ、おもちゃ、かまくら、ベンチ等として利用するほか、「なわぎぶワークショップ」を行い、「なわぎぶろーち」等なわぎぶアイテムの開発が進む。「水辺のマルシェ」「ナイトバザール」等、朝と夜それぞれのイベントを企画し、時間に応じた場所の使い方を提案している。

<質問>

「なわぎぶはもともと松本に由来があったものなのか？」

—新規に開発。商店街側からはストリートファニチャーの要望があったが、可変的なものの方が良いのではないかと提案。水辺から浮き輪のイメージ。持ち運びができるもの、ということで座布団に。

「茨城大学がなぜ松本で？」

—ノ瀬先生がもともと松本のデザインやまちづくりに関わっていたが、これを教育の場とした。

「昼の企画と夜の企画について、出店業者は？」

—昼は農家など、クオリティが高いところを。夜はパフォーマーやアーティストに焦点。「なわて呑み」企画

では、商店街の飲食店と協力。

「実際の商店街の人の反応は？」

一夜はもともと人が歩いていないところだが「ナイトバザール」には、多数の人が来て雰囲気も変わる。3年継続しているという点からもある程度の収益が望めたのではないかと。

#### (4) グループディスカッション：街の魅力を探してみよう

学生と商店街や近隣の市民が複合した3グループに分かれて、静岡の市民性やまちづくりポイントなどについて意見を出し合った。

<まちの面白いこと、モノー静岡市のまちなかの魅力はなんだろう？>

グループ A・飲み屋やおでん屋・城下町の名残をとどめる地域名、町名・古いものと新しいものの混在

グループ B・山の景観とまちの近さ・銀座は駿府から初まった等の歴史・専門店が多い商店街

グループ C・山海に囲まれてまちの機能が集中・味のある場所がかくれたところに・青葉通りなどのオブジェ

<町の魅力を引き出すアイデアーキャッチフレーズを考えよう！>

グループ A「二番煎じでお・も・て・な・し」...理念のキーワード：新規性にこだわらず、これまでうまくいった活動を応用、継続していくことがのんびりした静岡人のメンタリティにあっているのではないだろうか。

グループ B「老若男女の集うまちかど」...場所のキーワード：江戸期以来の街割りを残す基盤の目の街区にはたくさんの「まちかど」がある。ここをいかにデザインするか。

グループ C「七ブラ」...活動のキーワード：七間町に映画館が軒を連ねた頃、映画の前後に「おまち」をブラブラするのが「七ブラ」。この幸せな時間の回遊性を大切にしたい。

## 2. パネルディスカッション「アートのかとまちのリノベーション」

「アトサキ7」では、さまざまなまちづくり活動が行われてきたが、なかでも主要なイベントが、アーティストによる活動であった。ここでは「アトサキ7」を設立、運営した商店主、まちづくり公社の方々と、そこを拠点として活動したアーティストを招き、双方から、2013年2月で終了する「アトサキ7」とは何だったのかを考え、今後の期待について語ってもらった。

### 大石 剛靖（アトサキ7実行委員会）

主要映画館の撤退表明後、まちの回遊性と文化の継承を軸にまちづくりを考え、専門学校を誘致。かつて劇場、映画館街という大衆娯楽文化の拠点であったことから、「歴史・文化・下町力」がコンセプトとなった。



### 野田 亨（アトサキ7実行委員会）

次の事業が着工するまで更地の状態ではいけないと考え、エリア検討委員会が発足した。七間町の今後（アトサキ）を考えるとという意味で命名。5 町内から有志をつのり、町内の枠組みを超えて、周辺エリアを活性化しようという試みが始まった。

### 松井 陽介（静岡市まちづくり公社）

各種活動の報告。「グルーム静岡」（里山を守る団体）による竹のオブジェの制作から、たたらさんとのさまざまな取り組みが始まった。ハロウィンやクリスマスには子供たちが仮装できるスペースを作るなどした。

### たたらなおき（造形作家、絵本作家）

七間町のイメージは、映画館があり、華やかな「おまち」。竹のオブジェ（バンブージム）をつくり、里山における放置竹林の伐採と同時に、まちなかに子供たちの遊びの場を創出した。ハロウィンでは七間町名店街まで拡大し、合言葉を言うとお店からお菓子がもらえる「おまち de ハロウィン」となった。大人もこれまで入りづらかったお店にも立ち寄りやすくなる。アートというのは、作品を見るだけではなく、遊んだり、体験したりできるものであると思う。これをまちなかで実現できたのは個人的にも満足している。

### あまる（大道芸人、しずおか大道芸のまちをつくる会）

毎週「アトサキ大道芸人ミーティング」を行ってきた。大道芸の練習会ではあるが、一般の人が参加できるように、大道芸の道具をさわってもらいながらコミュニケーションをとる場とした。必ず毎週誰かがいることが大切。

### <質問>

「静岡の商店街では、今まで複数のエリアが連携して何かをするということはあったのか？映画館の撤退がきっかけか？」一ノ瀬 彩（茨城大学工学部助教）

—（野田）七間町は2つの商店街の会がある。「映画館」というキーワードをもとにそれぞれ動きはあったが、今までは共通のことがらを2つの会で話すことはなかった。「アトサキ7」をきっかけに話合うようになった。映画館がなくなったことでプラスになった面もある。あまるさん、たたらさんとの出会いもそう。里山の放置竹林の問題では、自ら竹を切りにいくようにもなった。「アトサキ7」ができて人との繋がりが生まれ、それがエリアを支えている。

「歴史・文化・下町力」というキーワードを市民が共有することができた経緯は？」

—（大石）「歴史・文化・下町力」は「明日を考える会」から。その前、少子化のためこの地区の青葉小学校が統合され閉校になるときに、この地区の特徴を考え、共有する機会があった。

—（たたら）「お父さんとダンボールハウスを作ろう！」のように低予算でもできる企画は下町の強み。

－（あまる）口上のような大道芸は下町の文化そのもの。

<フロアとの討論>

「セノバでのアート展示は地域の祭りなどと結びついていないが、大道芸の場合は相性が良さそう。芸術と芸能の違いか？」

－（たたら）「顔出しパネル」のように「参加」することで完成するものは相性がよい。

「アトサキ7」という場がなくなったあとどのように活動を展開させていくか？」

－（野田）水道局がきても土日は人が来ない。商店街の通りや確保できるスペースを活用して活動を継続したい。イベント誘致のみが目的ではなかったなので、専門学校との関わりや商店街内でのまちづくりを積極的に行いたい。

「マンションに新しく住む人に下町力を浸透させていくのは重要（盆ダンス等）。今後どのように？」

－（大石）マンションに住む人のなかには地域と関わりたくないという場合もあるが、分譲なので積極的に関わっていききたい。

<最後に一言>

（大石）今までやってきたイベントはアトサキに集中していたが、水道局前のピロティやまちづくり公社のホールなどの場所に散って面的に活動を継続させていきたい。

（野田）より多くの人を巻き込みたい。学生や外部の声を聴きながら勉強して、（新しい建物が完成する）2年後に向けてがんばりたい。

（松井）水道局が建った後も青空市を続けていきたい。新たにできるコミュニティスペースで、アトサキで培ったものを継続していきたい。

（たたら）静岡でアートをやっている人を結集して、商店街で何かをしてみたい。

（あまる）新しいマンション住民も含め地域の人が主役になれる、居場所がある、ということを考えてイベントづくりの手伝いをやっていきたい。

まとめ

今回の第2部のタイトルにある「リノベーション」とは、一般に古い建築物を改修し、現代の生活や機能に合うように、新しく手を加えることを指す。その場合、古い部分と新しい部分が、ひとつの空間に共存し、ときには予期せざるような調和や対比を見せる。これは新築の建物では決して得られない、リノベーションならではの価値である。この語を、まちのレベルに応用し、歴史と伝統のある商店街の賦活を考えてみたのが今回の企画であった。新旧の調和と対比は、まちの建物だけではなく、若い人とお年寄り、新住民と既存商店などについても考えられることが明らかとなった。

全体のタイトルに掲げた「アート・デザイン」は広い意味でとらえ、大道芸なども視野に入れたが、まち

を舞台ととらえた場合、「参加」「体験」がキーワードになると思われる。「アート・デザイン」に「参加」し、「体験」することを通して、誰もがまちづくりに関わり、そうした人が歩き回ることがまちを彩る。まちに「参加」させ、まちを「体験」させるツールが「アート・デザイン」と言い換えてもよい。

七間町において見いだされた「下町力」は、歴史と文化のあるまちがコミュニティに裏付けられていることを示すものであり、活性化だけでなく、地域防災等にも役立つキーワードである。

町内会や商店街の方々の参加も多数得て、のべ60名を超える参加者があり、盛況のうちに終了した。



パネルディスカッション

# 七間町映画館跡地の再生に向けて！ これまで・これから

●平成21年 「映画館のある街」はどこへ向かう？

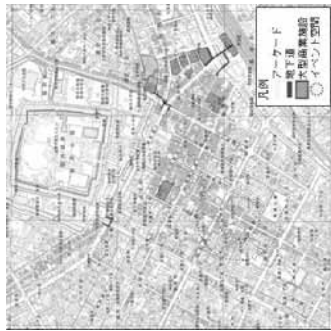


ありし日のオリオン座



映画館跡地のまちづくり関係主体

●平成23年 目指すこと ～ 「エリアに価値あり」、「歴史・下町・文化力」

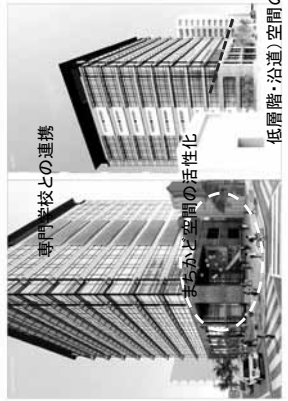


中心市街地の中の七間町のポジション



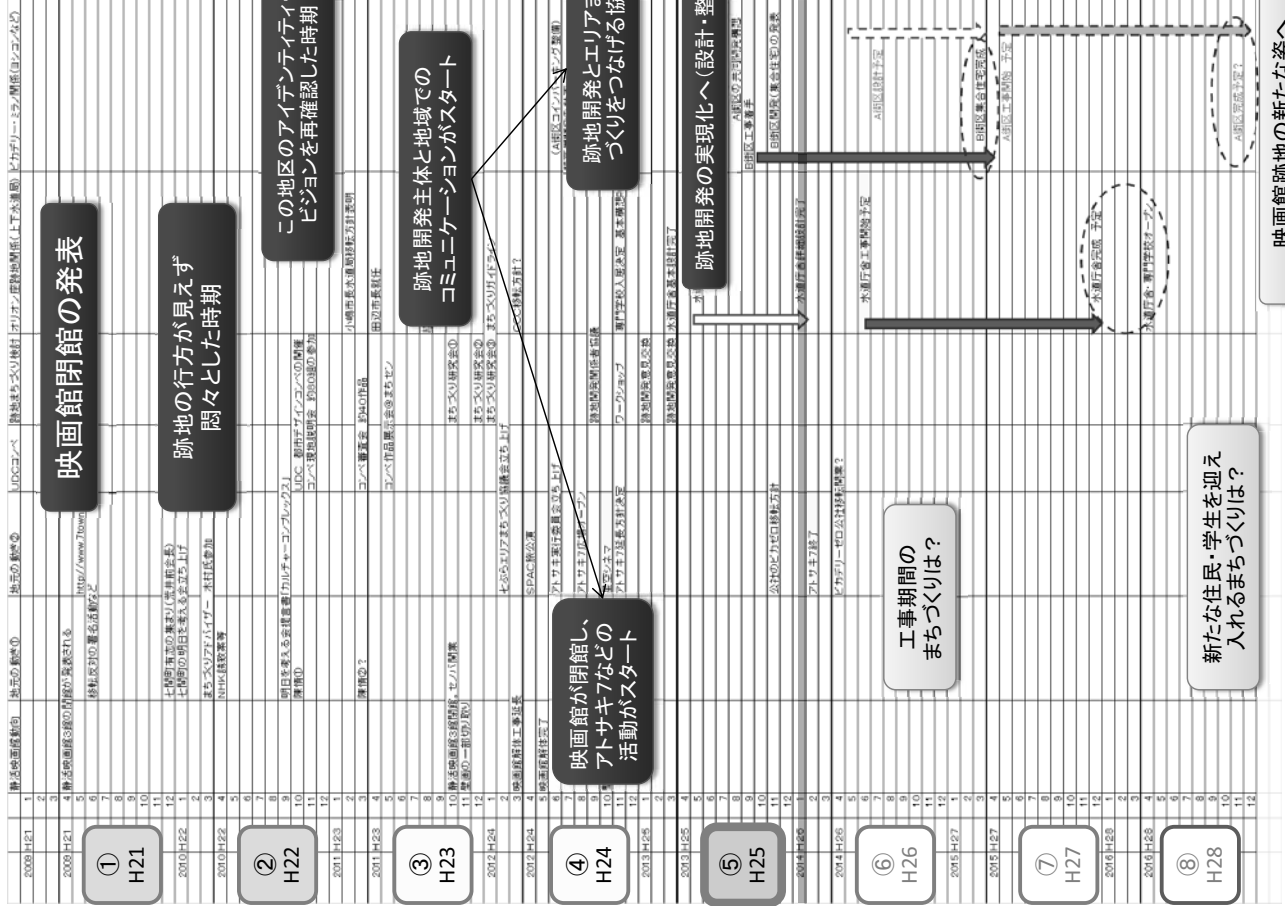
映画館跡地開発を通じた街並み・空間づくり (まちづくりガイドライン)

●平成25年 新たなまちの姿へ ～ 取り組みはこれからも



七間町に訪れたくなる・暮らしたくなる 動機(コト)づくり

上下水道局庁舎(基本設計時点イメージ) 低層階・沿道)空間の充実



映画館閉館の発表

跡地の行方が見えず 悶々とした時期

この地区のアイデンティティ・ビジョンを再確認した時期

跡地開発主体と地域での コミュニケーションがスタート

映画館が閉館し、 アトサキアなどの 活動がスタート

跡地開発とエリアまち づくりをつなげる協議

跡地開発の実現化へ(設計・整備)

工事期間の まちづくりは？

新たな住民・学生を迎え 入れるまちづくりは？

映画館跡地の新たな姿へ

### 第3回 まちの美味しさを伝えよう！

2月24日（月） 17:00-19:20（常葉大学静岡キャンパス水落校舎 403 70名）

開会の辞 大学ネットワーク静岡事務局長 斉藤民生

常葉大学 地域法政策研究・実践センター長 八木 保夫

#### 1. お弁当がつなぐ大学と商店街

タウンマネジメント協議会による長期的な取り組み 17:25～18:00

コーディネーター：志村真紀（横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）

発表：岸本しおり（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府修士2年）

阿部なつみ（同修士1年）

#### 2. 金沢市の学生の取り組みとクーポンの効果 18:00-18:35

：仁志出憲聖（KAKUMA NO HIROBA（カクマノヒロバ）代表）

#### 3. パネルディスカッション「大学のあるまちでできること」 18:40-19:20

パネリスト：仁志出憲聖（KAKUMA NO HIROBA（カクマノヒロバ）代表）

沼田千晴（静岡おまちバル実行委員会委員長）

山本洋平（草薙商店会会長）

松浦高之（静岡市経済局商工部商業労政課課長）

一ノ瀬彩（茨城大学工学部都市システム工学科助教）

司会：志村真紀（横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）

まとめ 黒瀬武史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教） 19:20-19:30

閉会の辞 木宮岳志（常葉学園理事）

## 目的

大学が近隣に立地している市街地や商店街にとって、そこに通う学生はまちに賑いや活気をもたらす上で重要な存在となりうるが、実際には大学とまちが十分な接点を持つことが出来ず、学生の力を活かしきれていない地域が多く存在する。そこで今回は、「まちの美味しさを伝える」という切り口で、まちと大学、そしてそこに通う学生の繋がりについて考えていく。

今回は、横浜市和田町、および金沢市における事例を紹介し、学生への「まちの美味しさ」の伝え方を考えるが、「まちの美味しさ」としては飲食のみではなく、広義に歴史や賑い、空間などの視点も含めて、まちと大学の繋がりから生まれる新たな可能性について考えていくことを目的とした。

第1部では、横浜国立大学・大学院生より、横浜市保土ヶ谷区和田町における、お弁当を通じたまちづくり事例の発表が行われた。和田町は近隣の丘の上に横浜国立大学が立地しており、60,70年代に団地が開発され、高齢化が進んでいるという点においても静岡県立大学と草薙の関係に近く、共通の課題として、大学生が地域の飲食店を利用せず、横浜や静岡の繁華街に出て飲食してしまうことが挙げられる。

第2部では、全国で初めて「学生のまち推進条例」を制定した金沢市で、学生活動のコーディネーターを行っている仁志出憲聖氏より取り組みの様子について発表が行われた。

パネルディスカッションでは、複数の大学を有する静岡市において、これらの事例から見えてくる大学とまちとの関わり方の可能性や課題について、商店会、行政、大学教員等それぞれの立場から自身の活動の紹介を交えつつ意見を頂いた。

## 1. お弁当がつなぐ大学と商店街 タウンマネジメント協議会による長期的な取り組み

学生発表 岸本しおり（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府修士2年）・阿部なつみ（同1年）

和田町では、2001年から行われたいきいきPJを引き継ぐ形で、2005年に商店街をはじめ、地元企業、横浜国立大（以下横国大）など、和田町で活動を行う団体が和田町TM協議会を組織した。月に一度、会議を行い、各団体のネットワークを形成することで地域課題の解決や地域活性化を目指している。

TM協議会と連携し、和田町では横国大のさまざまな学生団体がまちづくり活動を行っている。その中で、「和田べんPJ」、「公共デザインPJ」、「ワダヨコPJ」の3つを紹介する。

### (1) 和田べんPJ（2005年～）

和田町で作られたお弁当を媒体として、まちと大学を繋ぐことが目的。具体的な活動としては、商店による大学構内での「和田べん」の販売支援として、お弁当アンケート、新商品の提案、POPづくり、売り場の改善を行っている。また、地域のイベントで「和田べん」を販売し、その広報や子供のお弁当販売体験を行うことで、地域の方との交流している。さらにWANWYビジネスとして、建設会社とコラボした商品開発、イベントや大学祭などで販売している。また、TM協議会においても議事録の作成、協議会ニュースの作成、HPの運営、Facebookページの運営なども行い、街づくり活動のコーディネートを行うことを目指している。

### (2) 公共空間デザインPJ

和田町商店街を中心として、商店街を活性化するために、外部空間の活用調査を行いイベントでの提案・実践などを行っている。べっぴんマーケットというイベントでは、空き空間でのストリートライブ、OP カフェ、子供向け WS 古本 PJ (図書館) などを行っている。

### (3) ワダヨコ PJ (2010 年～)

横国大と地域の交流が少ないという課題を解決するために交流スペースを通して交流のきっかけを作ることを目的としている。貸し教室などとして利用される旧町内会館を空き時間に学生に提供している。活動は、建築系の学生を中心としたリノベーションから始まり、教育学部を中心とした学生が学習塾に通えない小中学生の先生となる寺子屋や、合同美術展などの地域住民と大学サークルの合同イベントが実施され、現在は地域住民が主体となって、交流スペースでのイベントの実施まで発展している。

学生らは、これらの活動の成果を評価するために、商店街がどう変化したかを商店街店主と地域住民へのアンケートを行った。2001 年から 2013 年の間に商店街にはサービス業・飲食店中心が増加し、また、40 歳代の店主が増加し、経営年数 10 年未満の店が増えるなど世代交代が起こっている。自店の将来について前向きな店舗は微増加した一方、商店街全体は不調であるという店舗が多い。

住民の商店街利用回数は減少しているが、活気が出てきたという意見もある。また、サービスを明らかにすることで、地域住民との関わりを取り戻すことを目指したイベントであるべっぴんマーケットに関わる評価は、もちつきやストリートライブなど、地域住民が参加できる企画を中心に高く活性化には繋がっている一方で、店頭販売など商店街主体の企画は評価が低く、うまく商店のアピールの場にはなっていないと言える。現在商店街では若手などの新しい担い手が増えており、イベントと協議会が揃っていることが強みで、協議会への若手店主の参加が今後の活動の展開につながっていくと考えられる。

### 〈質疑〉

「和田べん PJ は 2005 年からの活動ということで、OB・OG らの関わりはないのか。」

「たくさんいるが、卒業すると関わりがなくなってしまう。先輩からは活動の広がりがあるのかを聞かれてしまう。先輩が作った活動の基盤をひろげていくことが課題で WANEY ビジネスなどを行っている。」

「和田べん PJ の中で、学食との関係などの障壁をどのようにクリアしたのか。また、10 年も活動を続けていくことが出来た理由は何なのか。」

「正直、初めのことはよくわからない。大学には 2 つの食堂があるが、その間の講義棟で販売している。学食までいけない学生や学食を利用しにくい先生方が利用している。また、学生は 4～6 年しか活動できないと頭にいれることが重要だと考えている。新しく入った学生は主体的に出来ない事が多いため組織を出来るだけシステム化、活動に関わる情報をマニュアル化し、後輩に伝えることが重要。」

## 2. 金沢市の学生の取り組みとクーポンの効果

### 仁志出憲聖（KAKUMA NO HIROBA（カクマノヒロバ）代表）

金沢市は、学生のまちとしても有名で、全国ではじめて「学生のまち推進条例」を作った。そこで学生の活動のコーディネーターなどを行っている。

#### （1）学生のまち・金沢の取り組み

金沢市は金沢大をはじめ、美大や工科大などが立地し、石川県は人口当たり高等教育機関数3位で、学都ランキング3位とされている。かつて繁華街周辺に多く大学が立地したが、近年になり郊外への移転が起こり、学生が町中からいなくなった。そこで、平成22年に「学生のまち推進条例」を制定し、中心市街である片町に学生のたまり場（学びの場・交流の場）を作ることを目指し、町家を改修、2012年9月に、金沢学生の街市民交流館を開館した。交流館には、交流サロン、交流ホールなどがあり、インカレ団体の会議などが行われている。また、団体を集めた学生団体総会やまちづくり交流会を実施し、活動の報告などを行っている。交流館には、地域との接点を重要視し、コーディネーターが3名いることが特徴となっている。

#### （2）学生クーポンについて

自身が市内の学生であったころのものづくり実践PJ等の実施し、企業の支援や新商品の開発支援、学生への情報発信と企画の実施を行った。さらに、2010年に飲食店やお祭り、サークルの情報をまとめて、それだけでなくクーポンも作成し、学生に特化して発信した。

学生クーポンは、平日の流動性の高さといった学生らしい特徴や学部や時間割等の大学ごとの特徴を地域とマッチングすることを意識して情報を整理し発信した。クーポン自体に力を入れずに学生がメニューを作ったり、学生へのコミュニケーションから商店へのフィードバックを行うなどした。この時、学生に特化した店舗でないと効果はあまり見られず、学生のニーズを無視したクーポンは学生に届かないといえる。また、学生のものでないだけの付き合いだけで行くと価格破壊や学生の評価が低下するなどの課題もあることを意識することが必要。重要なのは、商売として真剣に行うこと、商店と学生がディスカッションパートナーあるいは企画マンになること、細く長く続けることであると考えている。

#### （3）繁華街での学生の場の創出

平成18年に実施した雪かきボランティアから始まり、中心市街の飲み屋街をまちなか学生交流街に設定した。まちなか学生交流街地域連携事業として、学生団体による祭りの実施、まちなか学生交流街MAP作成を行っている。近年には、まちが主催の祭りにも学生が参加、ゴミ拾い運営の手伝いなどを地道に実施することで、町会長や商店主と学生の交流が起こっている。学生による挨拶やゴミ拾いなどの地道な付き合い、信頼と話題から交流が始まっていると考える。



#### (4) 学生専門コーディネーターとして

学生のできる分野はマーケティング、商品開発、デザイン、企画、広報、コミュニケーションであり、そうしたことを引き出すことが重要。また、一番大事なのは元気や笑顔で、学生との接点をきっかけに、地域住民が自分たちもやる気になることである。また、学生だから安く見積もったりするのは良くない。学生はチャレンジすることが仕事であり、学生と付き合っていくならば、手間暇をかけ楽しく挑戦することが重要だと考える。

#### 〈会場から感想・質疑〉

**質問** 「草薙の商店会では大学と活動を行って、一人の方に任せたことでチェック機能が働かずあまりうまくいかなかったが、これらの事例は多くの方がコーディネーターとなったのは良いと思った。また、学生が参加する活動、沢山の人を集める活動ではリスク管理を行うことが重要だと思う。」

**志村** 「和田町の事例では教員が3名ほど必ず参加しているが、金沢ではどうか。」

**仁志出** 「市役所職員が数名、コーディネーターも参加しているので、リスク管理を行えていると思う。また、関わりのある学生団体にはメンターを2人以上つけるようにしている。一人の先生が行う場合は、専門性が高まる一方で、偏りがでることがあり、通常は良くない。リスク管理と併せて、学生のモチベーション管理を行っていくことが重要だと思う。」

**質問** 「行政がまちなかに学生を呼ぼうと考えたようだが、商店の方々の当初の反応はどうだったのか、結果として入ってきて、商売としてどう思ったのか。」

**仁志出** 「交流館を作る前にも同様のことを行っていたが、その際は運営も学生が行っていて、地域との関わりが少なかったのが問題だったので、商店街の方はそこを懸念されてコーディネーターを入れた。今は、学生は単価が小さいが、安くしてもいいのもっと多くの学生に来てほしいと考えているようだ。」

### 3. パネルディスカッション「大学のあるまちでできること」

司会：志村真紀（横浜国立大学地域実践教育研究センター准教授）

#### 山本 洋平（草薙商店会会長）

県立大の最寄りで大学生も多く通行するというメリットがあるが、これまでの商店会には逆にあまり頑張らない傾向があった。また、多くの地域が抱える最大の課題はコミュニケーション不足だと考えているが、その中で学生がいる地域では、いい意味で均衡を壊してくれていると思う。商店会側は学生がワクワクして経験値を獲得してくれればと思いながら、彼らにとにかくお願いをしている。今は、そうしたところから繋がりができ始めていると思っている。

### 沼田 千晴（静岡おまちバル実行委員会委員長）

おまちバルは、お客さんが5枚綴りのチケットを購入し、まちなかの飲食店ではしご酒をしてもらうイベント。普段行かないお店に直接行き、その雰囲気や味を知ってもらい、リピーターを作り、さらにまちなかを好きになってもらうことを目標にしている。学生に対しては、彼らが普段行くようなチェーン店以外の穴場なお店や町中に興味を持ってもらえるようになると思う。また、1年程前からは、学生の実行委員も参加し、SNSやブログなどを中心に手伝ってもらっている。

### 松浦 高之（静岡市経済局商工部商業労政課課長）

課では、商業振興とまちなか活性化を行っている。静岡と清水の中心市街地はともに歩く人が減っているのが課題である。I LOVE しずおか協議会によるクリスマスイベントにインターンシップとして企画から学生に入ってもらい、学生にとっては静岡の企業を知る機会にもなったのではないかと。また清水では、情報発信等を行うまちづくり会社ができる予定だが、ここに学生が参加していただければと思う。

### 一ノ瀬 彩（茨城大学工学部都市システム工学科助教）

昨日のイベント（2月23日／清水みなと散歩DX）でも学生が活躍してくれた。ここ10年くらいで学生が地域に出て行く活動増えたと思うが、金沢市の事例は学生とまちを繋ぐ仕組みや計画の仕組みが出てきたことが新しく、次の段階が見えてきたと思った。コーディネーターという仕事はボランティアであったが生業になりつつあるのではないかと。今後は育成方法や雇用確保が重要。また、教員としては地域の受け皿を見極め、学生が能力を活かし活躍できるセッティングを行うことが重要だと考える。

**志村** 活動の継続や繋ぐ仕組みが重要だが、仁志出さんはそれを生業にしている。その経緯は？

**仁志出** 今は顔を見て分かるようなネットワークができています。OB・OGの力が重要だと思う。企業のリーダーなどを含めてつながっていく仕組みを考えたい。最初はボランティアであったが、売上の半分は企業、半分は自治体で構成されている。商店街ではなく、個人の商店や企業とやっていることが多いし、そのほうがスピード感もある。

**志村** 味を知ってもらった次のステップは「行きつけ化」だと思うがそれに向けた取り組み等があれば。

**沼田** 前回のバルは11月だったので、バルで初めて来店したお店でその場で忘年会の予約をして頂けるお客様もあった。学生にとっては値段的な制約もあるのでなかなか厳しいので、課題として、まずは実行委員になってもらうのがいいと思う。

**松浦** フューチャーセンター(FC)では、市内の酒屋さんが静大の学生さんにワインセミナーを行っている。学生が街場の課題を改善する方法をFCという形で持っているのは大きいと思う。

**仁志出** 裏技として、学生はおごってもらえる（笑）。経営者の方などにつれて行ってもらえるとかがある

とそれが代々で繋がってくことがあると思う。

**志村** 金沢にはOB・OGのつながりといった文化がある。学生にとって行きつけになりやすいのは。

**岸本（横国大院生）** 学生が行きやすいのは、安い・遅くまでやっている・騒いでもいいということ。和田べんPJでは地域の飲食店を使って、マップにして他の学生に紹介していきたいと思っている。

**志村** 学生に限らず、近隣の人が利用しやすいのはリッチな美味しさではなく、日常的に食べられることや気楽さも重要だと思う。おでん等の名物があるが、求めている味はシンプルなものかもしれない。

〈会場との質疑〉

**質問**「仁志出さんに質問だが、学生として地域と関わりたいと思ったきっかけは何なのか」

**仁志出**「学生時代、自分のアイデアが具現化出来ずにいたところ、経営者のイベントに参加した。そこでは学生が必要とされ世界が広がった。また、地域の経営者がかっこいいと思ったことも原動力。」

**質問**「草薙では学生が地域の方にかわいがってもらい、感心している。今後の方向性を教えてほしい。」

**山本** 「学生や自治体に来てもらって、朝活などで人は集まっているが、商店会の方がなかなか熱くならない。そんな中でも学生がとても頑張っていて、その頑張りを商店にお伝えしている。以前は学生の参加に否定的だったが、段階的にプラスになっている。今後は老舗や新店舗が熱く盛り上がっていければ。」

**小林（県立大学生）** 「3年前から、広報誌の作成や、学生向けの食い倒れ祭りなどをおまちバルを参考に行っていた。沢山のお店の方と仲良くなったが、まだまだ繋がりが薄いので今後の課題だと思う。」

**まとめ 黒瀬 武史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教）**

第1、2回の公開講座では、例えば地域にあるものにアートを取り込むことで、地域にある資源にも変化するように、まちの資源に着目し、まちの価値の高め方について考えてきたが、活動の継続性や繋がりの方針に課題を感じた。

今回は「まちの美味しさ」に着目したわけだが、「活動の継続の仕組み」や「まちと大学の繋がり」の重要性に関する報告や議論があった。和田町、金沢の事例は、学生に対して商店街やまちなかの魅力を如何に伝えるかを考える上で、先進的な取り組みであり、また、こうした大学とまちが交流する活動を如何に継続に発展させていくかという課題に対しても示唆に富んでいたと言える。金沢でコーディネーターが介入することによって可能となる丁寧な繋がりや、和田町の事例における事後評価などが重要であると考えられる。

学生は活動を通じて地域に対してどのような貢献ができたのか、地域は学生から何を得たのか、そして学生の力を借りた後にそのように自分たちの地域が変化していくことができるかという点について、それぞれが考えることが重要だと考えられる。

最後に大学ネットワーク静岡のみなさま、常葉大学の先生方に感謝申し上げるとともに、静岡・清水のこれからの期待していきたい。



パネルディスカッション

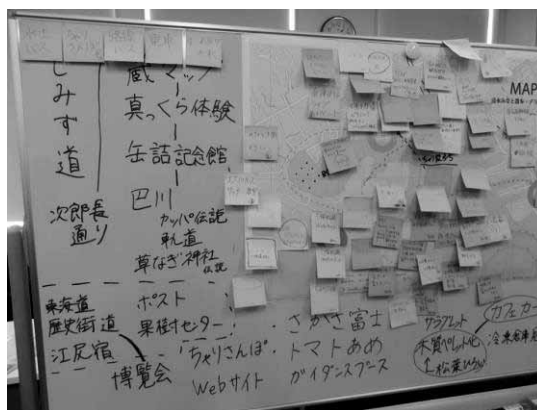
## I 経緯・計画

清水港周辺地域のまちづくりに関する社会実験として、静岡市商工会議所、常葉大学東京大学が中心となり、日の出地区倉庫群や清水港線跡自歩道でのツアーやアートイベントを盛り込んだ、「清水みなと散歩」を2013年10月20日に開催した(同日にミナトブンカサイも開催)。このイベントの1つのコンテンツとして、みなとふじ準備室による地元の市民団体を招いた「みなトーク！」を開催した。この時に集まった参加者、パネリストを中心に今後清水の活性化のために連携して何かできれば、という構想が立ち上がった。

三保の松原の世界文化遺産認定も地域で話題となっていることから、2月23日(富士山の日)に、このつながりを活かした取り組みを行いたいと構想し、常葉大学、東京大学、横浜国立大学、茨城大学から静岡市観光プロモーション課に協力を求めた。また、フェイスブックなどSNSを利用し、「みなトーク！」の参加者にイベントの立ち上げミーティングへの参加を呼びかけ、**第一回ミーティング(12月10日)**を行った。ミーティングでは活発に意見交換が行われ、イベントの理念として、「清水の魅力をもっと地元の人に知ってもらうことで清水を好きになってもらう」という点が参加者の間で共有された。富士山が美しく見える清水港周辺地域で行われる、ツアー企画、カフェ、ワークショップなど各団体のイベントを連携して紹介する「清水みなと散歩デラックス」の構想がたちあがった。



「みなトーク！」於フェルケール博物館



第一回ミーティングで出された意見

**第二回ミーティング(1月11日)**では、各団体のイベント案の報告などより具体的な話合いが行われ、当日のイベントガイド用のマップ作り(常葉大学造形学部4年生鈴木の協力)、ホームページの作成(Open Data 東海の協力)の計画についても進められた。1月末日にプレスリリースを開始し、観光プロモーション課の協力のもと、JR清水駅や静岡鉄道新清水駅をはじめとした各所にマップを配布した。



清水みなと散歩デラックスのマップ

清水みなと散歩デラックスのホームページ

この間もフェイスブックのグループページやメーリングリストを使用し、互いに、情報交換、イベント実施、事前準備に関する相談を活発におこなった。また、今回のイベントのキーアイテムとなった「シーザブ」（シートざぶとん）の準備にあたっては、清水駅前銀座まちかどギャラリーにて、茨城大学、常葉大学、静岡市まちづくり公社、清水駅前銀座商店街の方々の協力のもと、製作を行った。



まちかどギャラリーでのシーザブ準備風景

前日準備（2月22日）、フェルケール博物館の協力のもとスタッフ証「シーザブブローチ」の製作。



シーザブブローチ

フェルケール博物館での製作風景

## II 当日の様子

### 1. 水上バス（ちやり三保号）

みなとエリアと三保エリアを結ぶ交通手段として、ちやり三保号などの水上バスが活用された。ちやり三保号及び日の出、塚間、三保海水浴場の船着場はシーザブによって飾り付けされ、イベントの目印となった。静岡市シティプロモーション課と連携し遊覧船特別便が増便された。



ちやり三保号の船内



シーザブの飾り付け



増便された遊覧船特別便

### 2. 石蔵マップカフェ 主催：マップカフェシズオカ、しみず蔵倶楽部

石野源七商店の石蔵を静岡市内の様々なマップが置かれたカフェとして活用。昼のランチトークや夕方以降は石蔵の外のスペースで常葉大学造形学部生らによるアコースティック・ライブが行われた。



マップカフェシズオカ



アコースティック・ライブ

### 3. みなとのシートざぶとん“シーザブ”を作ろう！ 主催：みなとふじ

今回のイベントのアイコンとなっているシーザブを実際に作るワークショップ。港に纏わる話や船員が行うロープワークの講習も行われた。フェルケール博物館、石蔵、三保ハーバルキャンプ場の3ヶ所を実施。



「みなとのシートざぶとん“シーザブ”を作ろう！」ワークショップ風景

#### 4. マチナカ・ピクニック in 次郎長通り商店街 主催：Shizuoka.20z

新清水駅から石蔵までを歩きながらピクニックするためのグッズを商店街などで購入し、最後は石蔵でピクニックが行われた。マチナカで休憩できるようにシーザブを携帯している。



マチナカ・ピクニック風景

#### 5. ママチャリライド 主催：しみずママチャリライド実行委員会

みなとエリアと三保エリアをめぐる自転車ツアー。チャリ三保号も活用され、昼食は石蔵でランチトーク、石蔵所有者の石野さんのお話を聞いた。後半はしみず蔵倶楽部による解説で蔵めぐりが行われた。



江尻棧橋からチャリ三保号に乗る



石蔵前でのランチトーク

#### 6. 「帆船オーシャンプリンセス号」クルージングと赤富士井のタベ 主催：(株)しずおか体験企画

オーシャンプリンセス号から夕暮れの清水港と富士山、三保松原を望むクルーズ。夕食は赤富士井。



停泊するオーシャンプリンセス号



### 7. やっぱり三保が好き！！ 主催：三保松原フューチャーセンター

三保を一周するガイド付きの散歩ツアー「みほしる散歩」では、三保ボランティアガイドの方にも協力を頂いた。三保ハーバルキャンプ場では、松原保全の活動「まつペレ」の紹介、地元の方による新鮮市や自転車試乗会など多くの企画が行われた。



「みほしる散歩」の様子



三保ハーバルキャンプ場での新鮮市

### 8. 三保松原世界遺産（構成資産）登録記念マッピング・パーティ 主催：オープンストリートマップ東海

いくつかのグループでWEB地図を描くハッカソン形式のパーティが2/22,23の2日間に渡って行われた。会場は清水以外にも設置され、東海エリア全体で盛り上がりを見せた。



マッピング・パーティの様子

### 9. オトナのお絵かき大会 主催：しずおか大人の文化祭

三保から見える富士山や三保の風景を大人がお絵かきし、小学生に審査してもらう企画。参加者には三保のトマト飴がプレゼントされた。トマト飴は購入も可能。ヒロメ調理の実演も行われた。



プレゼントされたトマト飴

### Ⅲ 清水みなと散歩 DX 報告会概要

2014年2月24日(月) 19:45-21:00 於:常葉大学水落校舎 403

司会:志村 真紀(事務局/横浜国立大学・みなとふじ)

黒瀬 武史(事務局/東京大学)

補助:遠藤 友里恵(事務局/東京大学)

登壇:一ノ瀬 彩(みなとふじ・事務局/茨城大学)

黒田 淳将(Shizuoka.20z・マップカフェ静岡)

下村 大和(マップカフェ静岡・Shizuoka.20z)

杉山 智之(しみず蔵倶楽部)

前島 國治(三保松原フューチャーセンター)

村井 裕(しみずママチャリライド)

(登壇者 50 音順)

2.23 で企画を行った各団体の代表者から当日の様子を報告を頂いた後、1. 今回の企画で感じた可能性  
2. 反省点 3.今後の継続・日常化に必要なことを挙げて頂いた。

#### 1. 今回の企画で感じた可能性

- ・他団体とコラボできたことで、自団体だけでは出来ない新しいものが出来た
- ・自分たちにここまで出来るという自信になった
- ・これまでのお客さんとは違う客層の方が来てくださった
- ・コラボすることによって、自分たちの団体の担える役割を考える機会になった

#### 2. 反省点

- ・リスクマネジメント、コラボする際のリスク分担
- ・自団体の企画で手一杯となり、他団体の企画を見に行けなかった
- ・地元の方々や商店街への PR が出来なかった

#### 3. 今後の継続・日常化に必要なこと

- ・良かった点、反省点の整理などを行う
- ・今回できた横のつながり、FB 上の繋がりを利用して、今後も投げかけを行う
- ・イベントが地域に与える影響、地域がどのようにイベントを支えるかを考えること

#### 4. 総括

会場からは来年に向けて、清水で活動している 200 を越える他団体との交流を図ることや事前準備の期間を長く取ることで行政の支援も受けやすくなること、地元企業との連携などについて示唆深いコメントを頂いた。

今回の企画に参加した団体が、今後とも連携することで各団体の活動がよりデラックスになるよう活動を続けていくことが望まれる。

常葉大学・東京大学・横浜国立大学・茨城大学  
平成25年度 大学ネットワーク静岡 共同公開講座

地域活性化

商学連携による大学とまちのつながりの創出

全3回開催

12/7  
(土)

1/22  
(水)

2/24  
(月)

県内外4大学で商学連携を研究・実践している教員・学生による講演、パネルディスカッションを行います。地域活性化について大学や学生がどのように関わるか、皆様と共に考える楽しい講座です。講座を通じて地域の皆様へ日頃の活動の成果をお伝えしたく存じます。ご参加をぜひお待ちしております。

主催 静岡県・大学ネットワーク静岡

共催 常葉大学 地域法政策研究・実践センター

運営協力 静岡市まちづくり公社



第1回：まちの価値を高めよう！

12月7日(土) 14:00~17:00

(場所：常葉大学水落校舎 203 定員 100名)

■アクセス

★常葉大学水落校舎

★ミライエ呉服町

静岡市葵区水落町 1-30

静岡市葵区呉服町一丁目 6-5



公共交通機関にてお越しください。

第2回：まちをアート・デザインで彩ろう！

1月22日(水) 17:00~20:30

(場所：ミライエ 定員 80名)

第3回：まちのおいしさを伝えよう！

2月24日(月) 17:00~19:20

(場所：常葉大学水落校舎 403 定員 200名)

■関連イベント

まちを歩こう！「清水みなと散歩 デラックス」

2月23日(日) 10:00~16:00

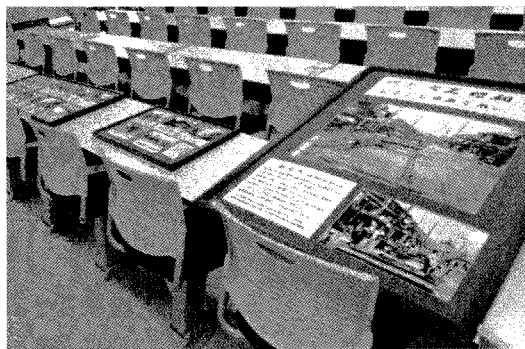
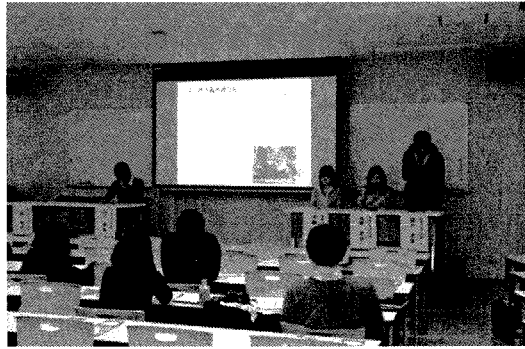
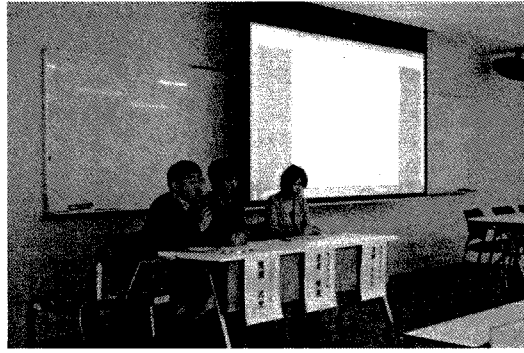
★詳細は後日、ホームページにて

大学ネットワーク静岡：http://www.daigakunet-shizuoka.jp

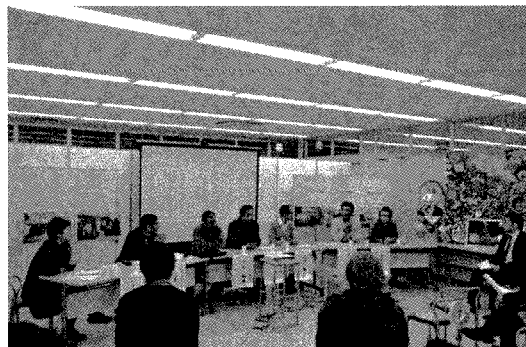
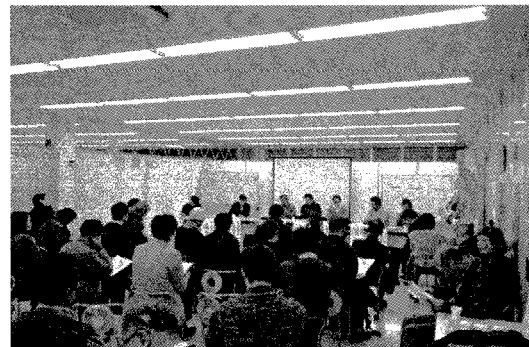
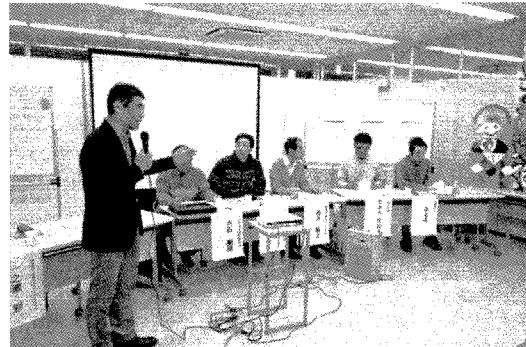
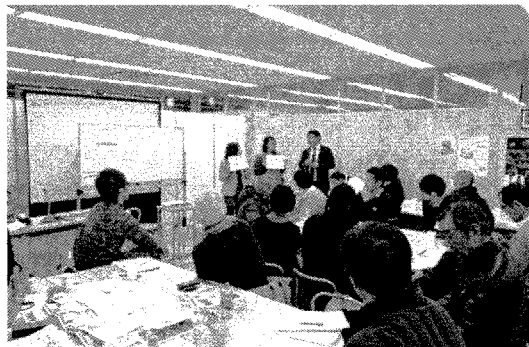
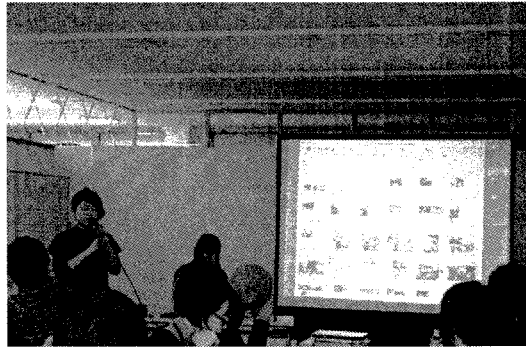
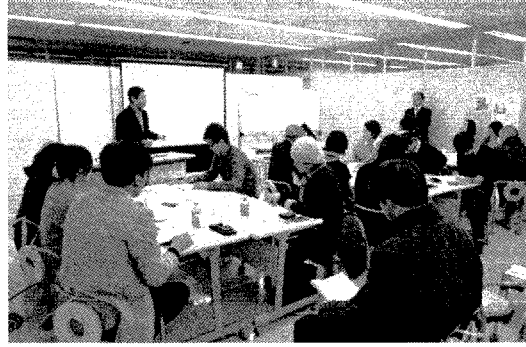
事前申し込み不要

入場無料

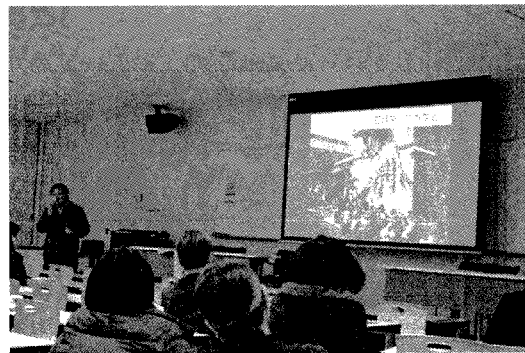
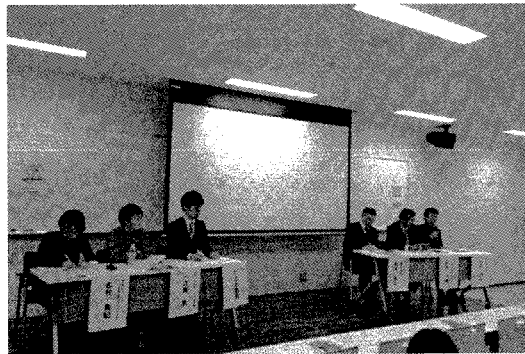
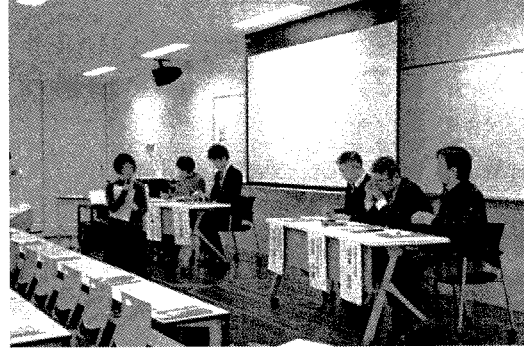
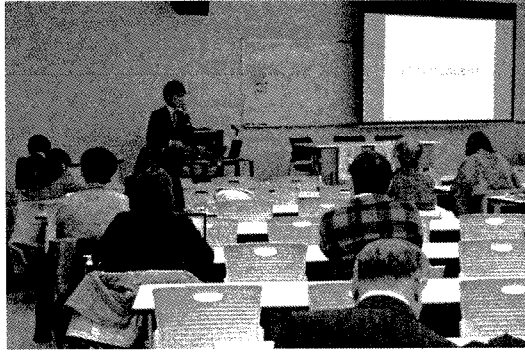
講座写真「第一回：地域活性化-商学連携による大学とまちのつながりの創出」



講座写真「第二回:地域活性化-商学連携による大学とまちのつながりの創出」



講座写真「第三回:地域活性化-商学連携による大学とまちのつながりの創出」



# 静岡県における農の6次産業化と 地域活性化

## 実施事業の概要

- 1 共同公開講座の名称：  
大学ネットワーク静岡共同公開講座  
「静岡県における農の6次産業化と地域活性化」
- 2 開催日時：平成26年3月8日（土）13：00～16：30
- 3 開催場所：静岡文化芸術大学 大講義室（南176）  
（浜松市中区中央2-1-1）

### 4 事業の概要と成果：

#### （1）概要

わが国の食料自給率は先進国で最も低い。世界人口が急増して食料需要が高まる中において、わが国の自給率も高めておくことが重要である。政府は、国の成長戦略の一つとして農業を挙げている。しかしながら、農業は収益性が低いため、従事者の減少と高齢化が進んでいる。この解決策として注目されるのが6次産業化であり、本講座で市民に向けて情報発信を行った。

#### （2）参加者

農業関係者、行政関係者、学生、一般県民：定員80名

#### （3）プログラム

趣旨説明：米屋武文（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）

講演：

- 1 和食のユネスコ無形文化遺産登録について 13:00～13:20  
熊倉功夫（静岡文化芸術大学学長）
- 2 農の6次産業化について制度説明 13:20～13:40  
川崎潔（農林水産省関東農政局浜松地域センター総括管理官）
- 3 6次産業化による浜松市の中山間地活性化への試み 13:40～14:10  
船戸修一（静岡文化芸術大学文化政策学部講師）
- 4 文化財的価値としての農業・農村と6次産業化 14:10～14:40  
四方田雅史（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授）  
－休憩－
- 5 6次産業化におけるジビエ料理の開発 15:00～15:30  
川上栄子（常葉大学健康プロデュース学部講師）
- 6 「6次産業化」の消費者理解に向けて－広報・広告的視点から－15:30～16:00  
加藤裕治（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授）
- 7 農の6次産業化の取組み事例と今後の展望 16:00～16:30  
鈴木芳雄（NPO法人浜松百姓のチカラ理事長・有限会社三和畜産社長）

【共催：静岡文化芸術大学】



## ○本講座の目的

米屋武文（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）

わが国の食料自給率は先進国で最も低い。世界人口が急増して食料需要が高まる中であって、わが国の自給率も高めておくことが重要である。政府は、国の成長戦略の一つとして農業を挙げている。しかしながら、農業は収益性が低いため、従事者の減少と高齢化が進んでいる。この解決策として注目されるのが6次産業化であり、本講座で市民に向けて情報発信したい。

## ○講演要旨

### 1 和食のユネスコ無形文化遺産登録について

熊倉功夫（静岡文化芸術大学学長）

2013年12月4日、ユネスコ（国際連盟教育科学文化機構）の無形文化遺産の委員会で、和食の登録が承認された。大変喜ばしいことではあるが、その登録内容が一般に十分理解されているとはいいがたい。登録に向けて提案した「和食－日本人の伝統的な食文化－」とは何か、さらに登録の意義と今後の展望について述べる。

### 2 農の6次産業化について制度説明

川崎潔（農林水産省関東農政局浜松地域センター総括管理官）

「6次産業化」という言葉は、今村奈良臣氏（初代「食料・農業・農村政策審議会」会長）が提唱。1996年11月の資料に掲載されていることから、かなり古くからその言葉はあった。当時は「1 + 2 + 3 = 6」としていたが、最近では、相乗効果という意を込め「×」で表すこととしている。

農林水産省の施策としては、民主党の「2009年衆議院選挙マニフェスト」を受け、新たな（第3回目）「食料・農業・農村基本計画（平成22年3月30日閣議決定）」に導入された（民主党政権への政権交代を反映）。

なお、国が定義する農山漁村の6次産業化とは、「農山漁村には、有形無形の豊富な様々な資源「地域資源」（農林水産物、バイオマス、自然エネルギー、風景・伝統文化など）に溢れています。6次産業化とは、それら「地域資源」を有効に活用し、農林漁業者（1次産業従事者）がこれまでの原材料供給者としてだけでなく、自ら連携して加工（2次産業）・流通や販売（3次産業）に取り組む経営の多角化を進めることで、農山漁村の雇用確保や所得の向上を目指すことです。こうした経営の多角化（6次産業化）の取組は、地域の活性化に繋がることが期待されています。」（農林水産省のホームページ）としている。

併せて、「六次産業化・地産地消費」に基づく総合化事業計画の法認定についても簡単に紹介（静岡県内の法認定状況：25件（平成25年11月））。

### 3 6次産業化による浜松市の中山間地活性化への試み

船戸修一（静岡文化芸術大学文化政策学部講師）

昨今、農業所得の向上が期待できるとして農業の6次産業化が注目されている。とりわけ一次産業に恵まれた平場が少ない中山間地域では、この取り組みへの期待は大きい。しかし、農業の6次産業化による経済的効果が強調されるあまり、その取り組みがもたらす集落維持や地域の人間関係構築への効果について考察されていない。そこで今回の報告では、浜松市の中山間地域における取り組みをあげながら、農業の6次産業化が人口減少に悩む農山村集落の再生のためにどのような可能性をもつのかを考えたい。

### 4 文化財的価値としての農業・農村と6次産業化

四方田雅史（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授）

近年、農業や農村に文化財としての価値が認識されるようになった。その例としては日本では文化財保護法における文化的景観が、国際的枠組では世界遺産における文化的景観、国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産（GIAHS）が挙げられる。これらの動きに共通するのは、農業・農村を支える農法や共同体的慣行等も含め、システムとして保全すべきことである。この持続的保全のためには、保全にかかわる当事者が利益を得られる仕組が重要であり、その施策の1つが6次産業化と考えられる。たとえば棚田等で行われている個別の試み、ワインやチーズなどで伝統的農法・製法を条件とする原産地呼称保護制度、および日本でも生まれつつある認証制度を紹介しながら、農業・農村保全と6次産業化とを結びつけさせる可能性を検討する。

### 5 6次産業化におけるジビエ料理の開発

川上栄子（常葉大学健康プロデュース学部講師）

近年静岡県内でも、鹿や猪などによる農作物被害が問題視されているが、これらの獣肉は、ジビエ料理に欠かせない材料としてヨーロッパでは広く知られている。鹿による害獣を食糧自給率向上への資産にできないかと考え、真空低温調理法によるレシピを考案した。

シカ肉は、「硬くて匂いがきつい」、「肉の赤色が血液を連想させる」などの理由で一般に普及していない。パネル63名の官能検査の結果、真空低温調理法や調味の工夫次第で、シカ肉も牛肉と同様に受け入れられる可能性があることが分かった。しかし、シカ肉は入手方法や価格の点で課題も多い。

### 6 「6次産業化」の消費者理解に向けて

### 加藤裕治（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授）

6次産業化は新事業創出を中心とした生産者側の取り組みを指し、消費者側の視点はあまり考慮されていない現状がある。しかし生産、加工、流通そして販売の一体化の促進は、生産した作物や商品を、自らの手で直接、消費者に届けることが可能となる反面、一方で消費者との接点における様々な課題を引き受けることにつながる。特に近年の消費者は安全・安心志向に加え、食知識・情報への関心を高めており、商品に対する納得や理解を形成した上で購入する傾向がある。そのため、こうした消費者に対応するためには、6次産業化の担い手も十分な情報提供や表現形成が必要になる。今回の報告では、こうした消費者の食に対する高度知識・情報志向をどのように扱えばよいのかについて具体例を交えながら考える。

## 7 農の6次産業化の取組事例と今後の展望

鈴木芳雄（NPO 法人浜松百姓のチカラ理事長・有限会社三和畜産社長）

畜産農家である生産者の立場、また6次産業に取り組むNPOの立場から、これまでの取組事例や今後の展望を発表する。

NPO 法人浜松百姓のチカラとは？

静岡県浜松地域の農業者が主体的に参画し、6次産業化に取り組み、農業の付加価値増加を図る。そして地域の農業者、食産業関係者および一般消費者に対して、農業を基本とした地域振興および活性化に質する事業を行い、持続可能な農業経営に係る問題の改善や解決を図り、農産物の地位向上と発展を通して公益に寄与することを目的とする。

## 農の6次産業化について制度説明（未定稿）

～ 静岡県における農の6次産業化と地域活性化 ～

農林水産省関東農政局浜松地域センター  
総括管理官（農政推進）川崎 潔

### 1 はじめに（農山漁村の6次産業化とは）

「6次産業化」という言葉は、今村奈良臣氏（初代「食料・農業・農村政策審議会」会長）が提唱。1996年11月の資料に掲載されていることから、かなり古くからその言葉はあった。当時は「1+2+3=6」としていたが、最近では、相乗効果という意を込め「1×2×3=6」で表すこととしている。

農林水産省の施策としては、民主党の「2009年衆議院選挙マニフェスト」を受け、新たな（第3回目）「食料・農業・農村基本計画（平成22年3月30日 閣議決定）」に導入された（民主党政権への政権交代を反映）。

なお、国が定義する農山漁村の6次産業化とは、「農山漁村には、有形無形の豊富な様々な資源「地域資源」（農林水産物、バイオマス、自然エネルギー、風景・伝統文化など）に溢れています。6次産業化とは、それら「地域資源」を有効に活用し、農林漁業者（1次産業従事者）がこれまでの原材料供給者としてだけでなく、自ら連携して加工（2次産業）・流通や販売（3次産業）に取り組む経営の多角化を進めることで、農山漁村の雇用確保や所得の向上を目指すことです。こうした経営の多角化（6次産業化）の取組は、地域の活性化に繋がることが期待されています。」（農林水産省のホームページ）としている。

### 2 農林水産省の施策の推移と決定

#### （1）新たな「食料・農業・農村基本計画（平成22年3月）」以前

前「食料・農業・農村基本計画（平成17年3月）」では、「消費者の視点に立った政策推進を基本に、農業者を一律に支援するこれまでの政策を見直し、やる気と能力のある経営を後押しすることにより構造改革を進めていくことや、高付加価値型の農業生産、高品質で安全な農産物の輸出、バイオマスの利活用など各地で芽生えている創意工夫に満ちた「攻め」の取組を積極的に支援していくことなどを打ち出しています。

また、新たな食料・農業・農村基本計画においては、食料自給率の向上に向け、強力な取組を推進していくこととしています。食料自給率の向上を図るためには、需要に応じた生産を推進するといった農業生産面での努力はもとより、食料消費面においても、消費者が自らの食生活の見直しに主体的に取り組んでいくことが不可欠です。政府としても、実践的な「食

育」の推進など自給率向上に向けた国民的な運動を巻き起こしていく考えであります。

私としましては、今後、この基本計画に基づき、食の安全の確保などに万全を期すとともに、担い手の経営に着目した経営安定対策をはじめとする新たな施策を具体化してまいります。」（平成17年3月25日農林水産大臣談話（抜粋））としていた。

#### 食料・農業・農村基本法（平成11年7月16日法律第106号）とは、

旧農業基本法は、昭和36年、その当時の社会経済の動向や見通しを踏まえて、我が国農業の向かうべき道すじを明らかにするものとして制定。

しかし、我が国経済社会が急速な経済成長、国際化の著しい進展等により大きな変化を遂げる中で、我が国食料・農業・農村をめぐる状況は大きく変化し、国民に不安を与ええる事態も発生。

こうした農業・農村に対する期待に応じて、農政全般の総合的な見直しを行うとともに全国各地でみられる新しい芽生えに未来をくみ取り、早急に食料・農業・農村政策に関する基本理念を明確にし、政策の再構築を行う必要。

このため、21世紀を展望した新たな政策体系を確立し、国民は安全と安心を農業者は自信と誇りを得ることができ、生産者と消費者、都市と農村の共生を可能とする食料・農業・農村基本法を制定。

#### 食料・農業・農村基本計画とは、

食料・農業・農村基本計画は、食料・農業・農村基本法に基づき、食料・農業・農村に關し、政府が中長期的に取り組むべき方針を定めたものであり、情勢変化等を踏まえ、概ね5年ごとに変更。

現在の基本計画は、平成21年1月27日から食料・農業・農村政策審議会及びその下に設けられた企画部会（鈴木宣弘部会長）において基本計画の見直しの検討を行い、平成22年3月29日の同審議会での新たな食料・農業・農村基本計画が答申され、平成22年3月30日に閣議決定（第12回企画部会（平成21年8月3日）→第45回衆議院議員総選挙（同年8月30日）→第13回企画部会（同年10月21日））。

#### （2）2009年衆議院選挙の民主党のマニフェスト

上記1のとおり、「6次産業化」という言葉は1990年代からある言葉であるが、本格的に政策用語となったのは、民主党の2009年衆議院選挙マニフェストから、「農山漁村を6次産業化（生産・加工・流通までを一体的に担う）し、活性化する（政策各論「31 戸別所得補償制度で農山漁村を再生する」）」としている。

(3) 新たな「食料・農業・農村基本計画（平成22年3月）」

【食料・農業・農村基本計画（平成22年3月30日 閣議決定）】（抜粋）

(2) 農業・農村の6次産業化等による所得の増大  
農林水産業・農山漁村の再生のための改革に当たっては、農山漁村において、その地域の特性を活かした農林水産物を生産し、それらを素材として加工することにより付加価値を創出し、それを流通・販売するなど、地域の第1次産業としての農林水産業とこれに関連する第2次・第3次産業に係る事業を融合させることにより、総合的かつ一体的な産業化を進めていくことが必要である。これを通じ、農業者の所得の増大を図るものとする。

このため、食生活の変化や地域の実情、品目ごとの特性を踏まえ、農産物の品質向上、加工や直接販売等による付加価値の向上やブランド化の推進等による販売価格の向上を図る。さらに、増加しつつある加工・業務用需要への供給増や輸出等による販売量の拡大や、作業規模の拡大、基盤整備の推進、資材価格・使用量の低減等によるコストの削減を体系的に実施する取組を重点的に推進する。

これを通じ、農業を起点として新たな付加価値や人材を地域内に創出し、雇用と所得を確保し、若者や子どもも農山漁村に定住できる地域社会を実現することを旨とする。

(4) 「6次産業化・地産地消法」の施行

平成22年12月の「6次産業化・地産地消法」施行までの間は、各地方農政局が独自に地域の学識経験者や有識者の協力を受けながら、「農業・農村の6次産業化協議会」、「農業・農村の6次産業化倶楽部」、「農業・農村の6次産業化商談会」などを実施し、草の根の推進を裏施してきたところ。

「地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律」（6次産業化・地産地消法（平成22年12月3日公布））とは、地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等に関する施策及び地域の農林水産物の利用の促進に関する施策を総合的に推進することにより、農林漁業等の振興等を図るとともに、食料自給率の向上等に寄与することを目的。

- (1) 農林漁業者による加工・販売への進出等の6次産業化に関する施策
  - (2) 地域の農林水産物の利用を促進する地産地消等に関する施策
- を総合的に推進することにより、農林漁業の振興等を図ることを旨とする。

(5) 「6次産業化・地産地消法」に基づく総合化事業計画の法認定について

「6次産業化・地産地消法」に基づく総合化事業計画の法認定とは、農林漁業者等による農林水産物及びその副産物（バイオオマース等）の生産及びその加工又は販売を一体的に行う事業計画を認定し、各種資金等により支援することを通じて、6次産業化を促進することを目的とする。

【総合化事業計画の法認定要件】

認定を受けるには、次の要件を全て満たすことが必要

① 事業主体

農林漁業者等が行うものであること（農林漁業者（個人・法人）、農林漁業者の組織する団体（農協、集落営農組織等））

② 事業内容

次のいずれかを行うこと

(ア) 自らの生産等に係る農林水産物等をその不可欠な原材料として用いて行う新商品の開発、生産又は需要の開拓（認定を受けようとする農林漁業者等がこれまでに行なったことのない新商品の開発・生産）

(イ) 自らの生産等に係る農林水産物等について行う新たな販売の方式の導入又は販売の方式の改善（認定を受けようとする農林漁業者等がこれまでに用いたことのない新たな販売方式の導入）

③ 経営の改善

次の2つの指標の全てが満たされること

(ア) 対象商品の指標

農林水産物等及び新商品の売上高が5年間で5%以上増加すること

(イ) 事業主体の指標

農林漁業及び関連事業の所得が、事業開始時から終了時まで向上し、終了年度は黒字となること

④ 計画期間

5年以内

(6) 静岡県内の法認定状況

静岡県下の「6次産業化・地産地消法」に基づく総合化事業計画の法認定状況は、25件（平成25年11月現在）。（別紙1参照）。

(7) 平成26年度農山漁村の6次産業化関連予算について

平成26年度予算については、「6次産業化の推進」は引き続き重点事項として取り組まれるものの、農山漁村の所得や雇用の増大を図るため、農林漁業成長産業化ファンドを本格展開

関東農政局(これまでの累計の概要)

(1) 地域別の認定件数

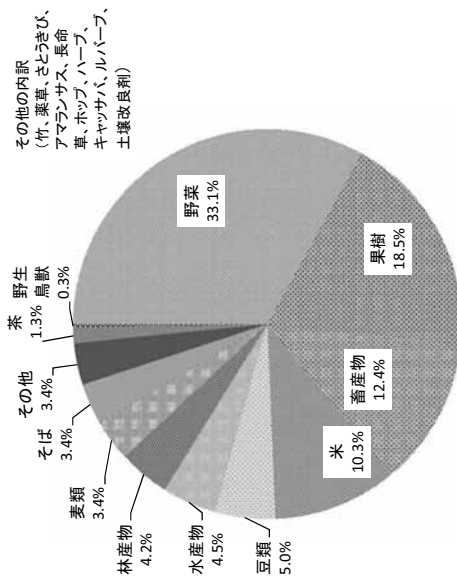
地域	総合化事業計画の認定件数			研究開発・成果 利用事業計画 の認定件数
	うち農畜産物関係	うち林産物関係	うち水産物関係	
茨城県	42	37	3	2
栃木県	20	20		1
群馬県	27	25	2	
埼玉県	16	15	1	
千葉県	25	24	1	1
東京都	7	5	2	7
神奈川県	24	18	1	5
山梨県	18	15	2	1
長野県	71	67	3	3
静岡県	25	20	1	4
合計	275	246	13	13

※東京都、千葉県については、それぞれフレアンド認定1件を含む。

(2) 総合化事業計画の事業内容の割合

	(%)
加工	2.6
直売	1.5
輸出	0.7
レストラン	-
加工・直売	87.2
加工・直売・レストラン	7.7
加工・直売・輸出	0.4

(3) 総合化事業計画の対象農林水産物の割合



※複数の農林水産物を対象としている総合化事業計画については全てをカウントした。  
※フレアンドの関係で、内訳の合計が100%と異なる。

するとともに、医福食農連携など多様な異業種との連携強化による更なる6次産業化の推進を支援する。

政策目標 (6次産業化の市場規模)

約1兆円(平成22年度) → 3兆円(平成27年度) → 10兆円(平成32年度)

主な内容

- 6次産業化等による農林水産物・食品の高付加価値化等の推進
- 6次産業化
  - ・農林漁業成長産業化フレアンドの本格展開(財投資金) 150億円(350億円) 27億円(36億円)(25補正: 20億円)
  - ・6次産業化支援対策
- 多様な異業種との連携強化
  - ・医福食農連携の推進【新規】 4億円(ー)

(参考) 平成23年の農業・食料関連産業の経済計算(速報値)

平成23年度における農業・食料関連産業の国内生産額は、94兆750億円。これは、全経済活動の10.5%を占めている。部門別にみると、農業では9兆4,526億円、関連製造業では36兆3,569億円、関連流通業では24兆3,102億円、飲食店では20兆3,259億円。

3 照会先

もっと深く、農山漁村の6次産業化について知りたい方、「6次産業化・地産地消法」に基づく総合化事業計画の法認定を受けることを検討されている方は、下記までご照会ください。

【照会先】

関東農政局浜松地域センター 食品産業子一ム  
〒430-0929 浜松市中区中央1-12-4 (平成26年3月末まで)  
TEL: 053-456-4620 FAX: 053-456-4615  
〒432-8047 浜松市中区神田町字中北川525 (平成26年4月以降)  
TEL: 053-441-0137 FAX: 053-441-0139

(以上)

別紙1 関東農政局(これまでの累計の概要)

別紙2 「6次産業化・地産地消法」の概要

別紙3 「6次産業化・地産地消法」に基づく総合化事業計画の法認定証

地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律(六次産業化法)

1 前文、目的(第1章)

地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等に関する施策及び地域の農林水産物の利用の促進に関する施策を総合的に推進することにより、農林漁業等の振興等を図るとともに、食料自給率の向上等に寄与することを目的とする。

2 地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等(第2章)[6次産業化関係]

(1) 総合化事業計画(農林水産大臣が認定)

○ 農林漁業者等が、農林水産物及び副産物(バイオマス等)の生産及びその加工又は販売を一体的に行う事業活動に関する計画

○ 農林漁業者等の取組に協力する民間事業者(促進事業者)も支援対象(支援措置)

- ・ 農業改良資金融通法等の特例(償還期限及び据置期間の延長等)
- ・ 野菜生産出荷安定法の特例(指定野菜のリレー出荷による契約販売に等対する交付金の交付)

(2) 研究開発・成果利用事業計画(農林水産大臣及び事業所管大臣が認定)

○ 民間事業者等が、上記の事業活動に資する研究開発及びその成果の利用を行う事業活動に関する計画(支援措置)

- ・ 種苗法の特例(出願料・登録料の減免)
- ・ 農地法の特例(農地転用許可に係る手続の簡素化) 等

3 地域の農林水産物の利用の促進(第3章)[地産地消関係]

(1) 基本理念

①生産者と消費者との結びつきの強化、②地域の農林漁業及び関連事業の振興による地域の活性化、③消費者の豊かな食生活の実現、④食育との一体的な推進、⑤都市と農山漁村の共生・対流との一体的な推進、⑥食料自給率の向上への寄与、⑦環境への負荷の低減への寄与、⑧社会的気運の醸成及び地域における主体的な取組を促進すること。

(2) 国による基本方針の策定、都道府県及び市町村による地域の農林水産物の利用についての促進計画の策定

(3) 国及び地方公共団体による必要な支援の実施

4 施行日

[第1章(目的)、第3章(地産地消関係)] 公布の日(平成22年12月3日)

[第2章(6次産業化関係)] 公布の日から6か月以内(平成23年3月1日)

# 認定証

有限会社 ○○○ 殿

地域資源を活用した農林漁業  
者等による新事業の創出等及  
び地域の農林水産物の利用促  
進に関する法律に基づき貴殿  
の総合化事業計画について認  
定をしたことを証する

平成26年2月28日

農林水産大臣 林 芳正

## 6次産業化による浜松市の中山間地活性化への試み —天竜区熊地区と春野地域の事例から—

文化政策学部・文化政策学科講師  
船戸修一  
s-funa@suac.ac.jp

## はじめに

- 2011年4月から本学に赴任
- 専門＝地域社会学、農村社会学、環境社会学など  
→現在の主な研究は・・・農山村(中山間地域)についての社会的学的研究
- なぜ、今、農山村(中山間地域)なのか?  
→少子高齢化による人口減少  
→農山村集落における「過疎」…そして「限界集落」  
→①農林業が衰退すると耕作放棄地の増加＝農村景観の破壊、  
②棚田や山林の手入れ不足＝土砂崩壊や地崩れの原因  
→農山村問題は都市住民にとっても無関係ではない  
→どうすれば農山村の集落(ムラ)が維持できるのか?

## 浜松市と中山間地域

- 浜松市の合併(2005年)  
→「過疎法」で過疎自治体と指定されていた、春野町、龍山村、水窪町、佐久間町が新浜松市へ  
→過疎地域を抱える政令指定都市へ(2007年)
- 過疎地域の合併理念  
→クラスター型(ブドウの房型)合併＝地域の自主性や個性を尊重  
→しかし、実際は「ブドウのジュース」?  
「房ごと切り捨て」?  
→合併後の中山間地域の集落の現状の必要性

## ゼミ活動としての「春野地域」の調査

- 2013年度の船戸ゼミの活動  
→具体的には…浜松市の中山間地域の中から「春野地域(旧・春野町)」を選び、①その集落(自治会)への聞き取り調査を行う(41集落のうち20集落で聞き取り)  
→②春野に移住してきた方々、地域で活動している女性グループ、春野に戻ってきた農業後継者、地元で食品店を営む商店主などへの聞き取り調査(約20名への聞き取り)  
→③41集落の自治会長宛へのアンケート調査  
→その調査報告会を先月28日(19時～21時30分)、浜松市春野協働センターで開催し、私を含め学生4人による5報告(生活支援、移住者、空き家などの報告)、参加者は約90名  
→現在、調査報告書を作成中  
→4月以降は、新4年生が卒論のために春野調査を継続、新3年生は天竜区龍山地域(旧・龍山村)の調査  
→来年2月には、春野と龍山で調査報告会を開催する予定

## 春野調査報告会(静岡新聞より)



静岡文化芸術大学は天竜区春野町の学生が、地産地消推進の観点から、中山間地活性化に向けて農産物産出促進を目的としたアンケート調査を実施した。アンケート調査は、春野町内の41集落を対象とし、自治会長の意向を伺った。アンケート調査の結果、春野町内の中山間地活性化に向けた取り組みや課題が明らかになった。アンケート調査の結果、春野町内の中山間地活性化に向けた取り組みや課題が明らかになった。アンケート調査の結果、春野町内の中山間地活性化に向けた取り組みや課題が明らかになった。

## 浜松市の中山間地域の人口推移

『浜松市中山間地域振興計画』より

## 浜松市の中山間地域の集落

中山間地域の集落の状況

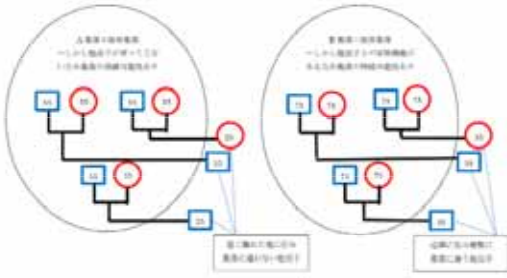
集落名	人口	世帯数	高齢者人口	高齢者世帯数	高齢者割合	高齢者世帯割合
天竜区 熊地区	1,200	150	800	100	66.7%	66.7%
天竜区 春野地区	2,500	300	1,500	200	60.0%	66.7%
天竜区 龍山地区	3,000	400	1,800	250	60.0%	62.5%

## 「限界集落」を考える

- 「限界集落」という言葉の登場  
→農村社会学者の大野晃先生が1980年代後半に高知県の中山間地域の調査を踏まえて作った用語  
→限界集落＝集落の人口の半分以上が65歳以上  
→2006年に総務省は「過疎地域等の6万2271集落のうち、10年以内に消滅する可能性のある集落が422(0.7%)、10年以降に消滅する可能性のある集落が2219(3.6%)」と発表  
→「限界集落＝消滅集落」というイメージ  
→しかし…もっぱら消滅したのは、①開拓集落、②営林署があった集落、③鉱山があった集落＝戦後の短期間に近代資本が集中した結果、人口が集中した集落  
→長い歴史をかけて人間関係を築き上げてきた集落(ムラ)は消滅しにくい?



## 「限界集落」の誤解



9

## 集落維持のための「ソーシャル・キャピタル」

- 調査報告会での発表
  - 多くの春野の他出子は「親の様子を見」に集落に通っている＝「家族機能」が残っている
  - それならば…自分の親だけではなく、隣近所の親の様子を見たり、買い物支援までできないか？
  - ついでに…集落の共同作業（消防団活動や道普請など）もできないか？
  - 他出子に親以外に視野を広げさせることができれば「家族機能→集落維持」まで拡大可能
  - 人口縮小時代こそ、密な人間関係を結ぶしかない→社会的な視点

- 「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」への注目
  - 社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念
  - アメリカの政治学者であるロバート・帕特ナムは「ソーシャルキャピタルが蓄積された社会では、相互の信頼や協力が得られるため、他人への警戒が少なく、治安・経済・健康・幸福感などに良い影響があり、社会の効率性が高まる」と指摘
  - 「農業の6次産業化」によって集落の人間関係（ソーシャル・キャピタル）を構築できないか？

11

## 中山間地域の集落と「農業の6次産業化」②

- 農業所得の向上が過疎問題の解決になるのか？
  - 国（農林水産省）は「6次産業化により、我が国の農業・食料関連産業全体の規模を拡大し、…（中略）…農林漁業者の所得の向上や農山漁村地域の活性化を実現」（農林水産省のHPより）
  - 「6次産業化は中山間地域の活性化につながる」とされる
  - 大分県の「一村一品運動」（大山町はウメやクリの加工販売で成功）
  - しかし…大分県全体の過疎化は進行、人口減少や後継者問題は深刻化
  - 農業所得の向上しても農村の集落維持につながるとは限らない（GTも同様の傾向にある）
  - 「農業の6次産業化」は「農業政策」ではあるが「農村政策」ではない
  - これを「農村政策」として考え直す作業が必要

13

## 天竜区熊地区の取り組み①

- 熊地区の地域づくり
  - 1950年代から女性による地域活動（生活改善運動）が始まる
  - 1970年代の味噌作りグループが始まる
  - 1987年に農産加工施設「くんま水車の里」が完成し、味噌を販売
  - 同時に、食事処「母さんの店」も開設し、ソバの加工販売も始まる
- 農家民宿「あそびや」
  - 熊の地域づくりにかかわってきた大平展子さんが2012年2月から開業
  - 地場産の料理や農業・田舎体験を提供

15

## 調査結果の紹介：集落を出て行った子どもたち

- 集落の存続は「他出子（就学や就労で集落を出て行った子どもたち）」がキー
  - つまり…他出子が集落にどのような目的で、どれくらいの頻度で通うのか？ がポイント
- 「他出子」はどこにいる？（春野の自治会役員への聞き取り調査より）
  - 69人中48人の「他出子」が静岡県内に居住
  - 「他出子」の多くは車で数時間で行き来が可能
- 「他出子」が帰省する目的は？（春野の自治会役員への聞き取り調査より）
  - 親の様子を見に…26人
  - お祭りへの参加…2人
  - 共同作業への参加…1人

10

## 中山間地域の集落と「農業の6次産業化」①

- 6次産業が登場した背景
  - 1990年代後半に今村奈良臣先生が提唱
  - …「農業を農産物原料の生産のみに閉じ込めて、付加価値を農業外の分野にさらわれるにゆだねておいてよいのであろうか。農業がその主体性をもちながら、二次産業、三次産業に吸い込まれていく付加価値を、せめて幾分なりとも確保しつつ、総合産業としての体質に変わらなければならないのではないか」（今村1996）
  - 農業が「付加価値」を付けることで農業所得の向上
  - 国（農林水産省）の政策としての「強い農業」の実現
  - 農産物貿易のグローバル化（TPP）を背景に加速

12

## 「農業の6次産業化」の意味

- 「生産」だけでなく「加工」や「流通・販売」も含める
  - 戦後の基本法農政＝農業の近代化＝専業化（専業農家重視）・専作化（1961年の農業基本法では「選択的拡大」）
  - 近代化＝専門化＝生産と加工・流通販売の切り離し・・・農家＝生産者（生産するだけの専門家）
  - しかし・・・もともと農家は「百姓＝兼業農家」（家や農機具などを作る、農業用水路も開削など色々な能力を持っていたはず）
  - 農家同士がつながることで、それぞれの農家の個性が活かされる可能性

14

## 熊地区の取り組み②

- 農家民宿「たべや」
  - 大平さんの家の下には愛知県からの移住してきた水野さん一家が住む
  - 2011年から農家レストランを開業
  - 2011年3月に農家民宿「たべや」を開業
  - 現在は、大平さんと水野さんで「兄弟民宿」という位置づけ（地元住民と移住者の協働）
- 農業の6次産業化と農家民宿
  - 食事提供を通じて農産物の加工販売できる（客との「線」の展開）
  - しかし…農家民宿は他人を自宅に泊めるため、家族の理解や協力が必要
  - 熊地区で農家民宿は広がらない
  - そこで…家族の協力が得られないならば集落で協力できる体制を模索中（食事準備が負担ならば、他の農家が担当する＝1軒で自己完結するのではなく、数軒による地域で受け入れる体制づくり）
  - 農家民宿によって、それとかがわる人々を増やし、集落の人間関係を深めることができるのでは？（「面」の展開可能性）

16

## 春野地域の取り組み①

- 女性による地域活動  
→現在、4つの生活改善運動グループが存在  
→しかし…加工所を持っているのは、生活改善グループ「やしお」のみ  
→地域の若い世代の人たちが入ってこない＝後継者不足
- 地元農家や移住者による地域活動  
→①「茶空民」：砂川集落に移住してきた山本奈々絵さんによる砂川のお茶の加工品（抹茶ラテなど）の移動販売  
→②「よもやま実りプロジェクト」：移住してきた女性（中林裕子さんや森下亜希子さん）が地元の高齢者（農村女性）に梅の加工技術を学び、商品化につなげようという取り組み

17

## 春野地域の取り組み②

- 「加工」や「流通・販売」における移住者の発想  
→移住者は「よそ者」であるがゆえに  
…①集落に新しい価値観を持ち込める  
…②地元住民が気づかない価値を気づかせる  
→一方…現在の取り組みは始まったばかりであり、儲けは期待できない  
→しかし…こうした移住者による「農業の6次産業化」によって、移住者と地元住民の協働が生まれてくる可能性がある  
→6次産業化によって「攻め（＝儲け）」ではなく、「守り＝集落の人間関係の構築」が期待できる

18

## おわりに

- 「農業の6次産業化」論の可能性  
→往々にして「勝つ農業」論（攻め）に傾きがち  
→才能やスキルが異なった多種多様な人間同士がつながることによって発揮される効果  
→移住者、農村女性、高齢者も参加できる  
→大きな儲けは期待できないかもしれないが、住民同士が支え合っていく関係性の構築につながる（守り）＝「負けない農業」「負けない農山村」へ

19

## 参考文献

- 今村奈良臣 1996『第六次産業の創造を』『月刊地域づくり』89.  
小田切徳美 2009『農山村再生：「限界集落」問題を越えて』岩波書店。  
徳野貞雄 2007『農村（ムラ）の幸せ、都会（マチ）の幸せ：家族・食・暮らし』NHK出版。  
——— 2008『農山村振興における都市農村交流、グリーン・ツーリズムの限界と可能性：政策と実態の狭間で』『年報 村落社会研究』43：43-93。  
山下祐介 2012『限界集落の真実：過疎の村は消えるか？』筑摩書房。

ご清聴ありがとうございました。

20

## 文化財的価値としての農業・農村と 6次産業化

四方田雅史  
(静岡文化芸術大学)



### 世界農業遺産(GIAHS)の分布

中国	10	「アオハンの乾燥地農業」「ハニ族の棚田」「トン族の稲作、養魚、養鴨」「ブーアルの伝統的農茶農業」等
インド	9	「カシミールのサフラン栽培」「コラプットの伝統農業」「クッタナドの海拔以下の農業システム」など
日本	5	「能登の里海・里山」「トキと共生する佐渡の里山」「国東半島と宇佐の農林水産循環システム」など
イラン	3	「カナート灌漑システム」など
韓国	2	「済州島の黒壁フェンス農業」など
スリランカ	2	「ウェウェ灌漑システム」など
ロシア	2	「北極地帯の伝統的トナカイ飼育」など
タンザニア	2	「マサイの放牧」など

※ほかにアルジェリア、ケニア、モロッコ、チュニジア、ギニア、マダガスカル、マリ、南アフリカ、スロバキア等、イタリア、オランダ、ルーマニア、チリ、ペルー、フィリピン、ヴァヌアツに各1つ

### 農業・農村の文化財(ヘリテージ)化①

\* 文化財概念の拡大

①世界遺産における文化的景観カテゴリー

“the combined works of nature and man”

(例1)パリの文化的景観:トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスパック・システム(インドネシア)

(例2) アルト・ドウロ(Alto Douro)のブドウ畑(ポルトガル)

### 農業・農村の文化財(ヘリテージ)化②

②文化財保護法における文化的景観の登場

棚田・里山・漁村など

(例) 文化的景観:「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地...」(文化財保護法第二条第1項第五号)

### 農業・農村の文化財(ヘリテージ)化③

③FAOの世界農業遺産(Globally Important Agricultural Heritage Systems GIAHS)

(例)「トキと共生する佐渡の里山」「静岡の茶草場農法」「阿蘇の草原の維持と持続的農業」



## 日本と海外の動きの共通性

- \* 文化財・遺産を“点”から“面”へと拡張
- \* 農業ヘリテージは使いながら保存する必要  
(例)「第2の危機(自然に対する働きかけの縮小による危機)」(『生物多様性国家戦略2012-2020』)
- \* システム的思考  
(例)世界農業遺産=GIAHS  
=システムの構成要素(なりわい、経済、価値観、地域文化、地域社会など)がシステムの的に働くことが文化財を維持・保全させる。

## 持続可能な農業・農村の保全①

- \* システムを意識しつつ、持続的に保全していく方法  
⇒ 農業・農村を保全するほど価値を生みだすように



[出典] 金武創・阪本崇『文化経済論』ミネルヴァ書房、2005年、141頁より抜粋。

## 持続可能な農業・農村の保全②



## 農業・農村ヘリテージを支える 6次産業化—日本

さまざまな試みの例

- \* 「奥飛鳥の文化的景観(明日香町)と古代米
  - \* 「石部の棚田(松崎町)と黒米焼酎
  - \* 「西三川の文化的景観(佐渡市)と金山米
- 農業・農村ヘリテージの保全と商品化の結合  
⇒ 保全すれば利益を生みだす仕組みの構築



## 農業・農村ヘリテージを支える 6次産業化の枠組①—欧州の事例

- \* 景観をはじめ、農法・コミュニティの慣行等も保全していく必要性⇒ 欧州の事例: 原産地呼称保護制度

世界文化遺産に登録された欧州の文化的景観	国名	農産加工品と原産地呼称管理制度
サン＝テリオン地域	フランス	ワイン PDO
コースとセヴェンス、地中海性農牧業の文化的景観	フランス	ロックフォール・チーズ PDO
アルトドワロ・ワイン生産地域	ポルトガル	ポルトワイン PDO
ピコ島のドウツ文化の景観	ポルトガル	ワイン PGI
ラヴォーのドウツ々々畑	スイス	ワイン PDO
ヴァッハウ渓谷の文化的景観	オーストリア	ワイン PGI
チンクエ・チッレ	イタリア	ワイン PDO
オルチネ渓谷	イタリア	ワイン PDO、オリーブ・オイル DOP
トカイのワイン産地の歴史的・文化的景観	ハンガリー	ワイン PDO
ペームスター	オランダ	チーズ 組合の商標

表 世界文化遺産に登録された農業関連文化的景観と原産地呼称保護制度との相互関係  
〔注〕PDOは原産地呼称保護制度(英語のProtected Designation of Originの略)、PGIは地理的呼称保護制度(英語のProtected Geographical Indicationの略)、各に該当する基準である。PDOは各国でAOC、AOP(フランス)、DOP、DOP(イタリアなど)という風に名称が異なるため、基本的にこの注の名称に統一した。

## 農業・農村ヘリテージを支える 6次産業化の枠組②—欧州の事例

- \* 伝統的・在来的製法を保全することで、それに支えられる農村・景観を保全していく。

ロックフォール・チーズ(PDO)	サンテリオン・ワイン(PDO)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・原料乳は羊のみ。羊の品種はラコース種、マネッシュ種、バスコ・ペルネズ種に限る。</li> <li>・羊の飼料は主に草とする。配合飼料は補助程度。</li> <li>・アオカビは、コンバルー山の洞窟で採取する。</li> <li>・カードを得るための酵解は、搾乳後48時間以内。</li> <li>・コンバルー山の自然洞窟(カーク)で熟成させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・所定の地域で栽培されたブドウのみを使用する。</li> <li>・メルロー種(60%以上)、カベルネ・フラン種(約30%)、カベルネ・ソービニオン種(約10%)で醸造しなければならない。</li> <li>・1haあたりブドウ5,500本以下の密植度とする。</li> </ul>

## 農業・農村ヘリテージを支える 6次産業化の枠組—日本

- \* 原産地呼称管理制度に近い(?) 団体商標
- \* 日本でも認証制度が広がつつある。  
(例) 佐渡の「朱鷺と暮らす郷」米  
茶草場の茶  
あか牛認証制度  
⇒ 農法・飼育法も条件



## (例) 茶草場の茶認定制度

(前略)

### 第4 認定基準

農法実践者の認定基準は、次のとおりとする。

- (1) 農業者等(集落や荒茶共同工場等の単位において茶草場農法への取り組みに対する協定を結んでいる場合はその単位。以下同じ。)のその営みによって、生物多様性が守られるなど環境の保全に貢献していること。
- (2) 農業者等が維持している管理茶草場面積の茶園経営面積に対する比率(以下「基本指標」という。)が5%以上あること。

### 第5 認定の区分

農法実践者の認定の区分は、認定対象者の基本指標に応じて、次の区分とする。

- (1) 5%以上25%未満 一葉
- (2) 25%以上50%未満 二葉
- (3) 50%以上50%未満 三葉

出典: 静岡県島田市のHP、世界農業遺産「静岡の茶草場農法」実践者認定制度要綱より抜粋。

## まとめ

- \* 農業・農村のヘリテージ化: 伝統的な農業・農村を保全するためには、農法・土地利用・共同体・それを支える思想などを体系的に保全することが望ましい。
- \* 文化的景観・世界農業遺産などを保全すれば利益になるような仕組みとしての6次産業化: ブランド化、地域団体商標、原産地呼称保護(管理)制度、認証制度
- \* 「伝統」を商品化する知恵・・・

# 6次産業化における ジビエ料理の開発

常葉大学 健康プロデュース学部  
健康栄養学科

川上 栄子

## 現状

シカやイノシシなどの野生鳥獣による農産物被害が全国の農山村で深刻

## 問題点

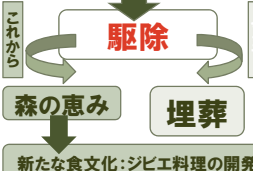
・シカ肉の認知の低さ  
・シカ肉の特有のにおい  
・肉質が固い

## 目的

新しい食べ方を提案し興味を持ってもらう  
・においを軽減させる味付けの工夫をする  
・低温加熱の利用により、軟らかい仕上がりする

## 発展

シカ肉の普及により貢献するために流通を可能とする商品の研究・開発に努める。



- ・里山の美しい景観や生態系を守る
- ・食料自給率の向上
- ・山間部の町起こし



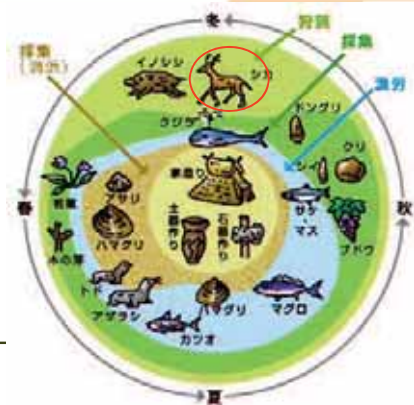
## 『ジビエ』(gibier)って？



フランス語で、野生動物や鳥の狩猟肉のこと  
ヨーロッパでは貴族の伝統料理として発展してきた食文化  
フランスでは高級食材として重宝され愛されて続けている

「くさい」「くせがある」肉  
丁寧に加工・料理された新鮮なイノシシやシカの肉は、他にない味わいや香り

高たんぱく・低脂肪・ビタミン(イノシシ)・鉄分(シカ)を豊富に含み栄養的にも注目



縄文  
カレンダー

## 背景

環境問題としてのシカ肉の有効活用

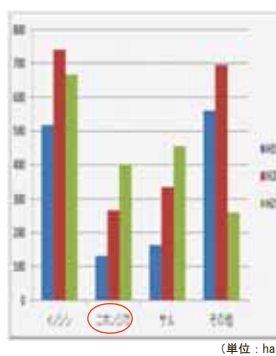


図1 静岡県年度別被害面積の推移



図2 静岡県年度別被害金額の推移

## シカ肉の栄養価特性



シカ肉: 寺島健彦氏 分析「浜松大学紀要」より

牛肉: 「日本食品標準成分表2010」より

- ・シカ肉は高たんぱく質、低脂質
- ・和牛と比較しシカ肉は低エネルギー
- ・シカ肉は鉄の含有量が牛肉の約5倍



## 『真空低温調理』



材料を真空包装し低温(中心温度58~95℃)にて加熱調理後、急速に3℃以下に冷却または冷凍し、運搬・保管し、提供時に再加熱(中心温度75℃で1分以上)する。

従来調理法と比較して

- ①調味料がよく浸透し味が均一につく
- ②材料の組織が収縮しすぎず、軟らかくジューシーに仕上がる
- ③風味や栄養素の損失も少ない

## シカ肉のコンフィ

フランス料理の手法。  
たっぷりの油の中で、低温の油で時間をかけて煮ること。皮がパリッと、中がジューシーに仕上がります。



## シカ肉のマーマレード煮



## シカ肉の味噌煮



## シカ肉サラダ (焼肉+生野菜)



## シカ肉の焼きそば アジア風



## シカ肉団子のスープ (ひき肉+豆腐)



## シカ肉のピロシキ

ピロシキは、ロシアなどの東欧料理の揚げた総菜パン



## シカ肉の角煮



## シカ肉サモサ

インド料理の軽食のひとつ。ゆでてつぶしたジャガイモなどの具をクミンやターメリックなどの香辛料で味付けし、小麦粉と水で作った薄い皮で三角形に包み、揚げたもの。



## シカ肉の卵とじ丼

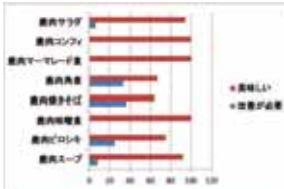


試食会（2011年5月22日）を開き、シカ肉の有効活用について意見交換を行ない、簡単なアンケート（自記式）を実施  
出席者（農林関係者、大学教職員、マスコミ関係者、食品販売者）

### シカ肉のイメージとレシピに関するアンケート

シカ肉のイメージ 臭い9名 硬い3名 ヘルシー2名 高たんぱく質2名

#### 料理の評価



試食会の様子

静岡新聞掲載記事→  
この他、中日新聞、  
日本農業新聞に掲載

出席者50名中17名の有効回答があった  
全ての料理において、美味しいという評価が60%以上であった  
特に真空低温調理法による「コンフィ」、「マーメレード煮」、「味噌煮」は100%と高評価であった

### レシピ紹介

#### シカ肉のマーメレード煮



シカ肉（もも） 200g  
オリーブ油 小さじ1/2（2g）  
甘夏マーメレード 50g  
赤ワイン 大さじ2（25ml）  
しょうゆ 大さじ2（30ml）  
みりん 大さじ1/2（8ml）  
こしょう 少々  
水 大さじ1（15ml）

#### シカ肉のコンフィ



シカ肉（肩ロース） 200g  
オリーブ油 小さじ1/2（2g）  
ラード 大さじ3強（40g）  
塩 大さじ2/3（10g）  
こしょう 少々  
卸しんにく 大さじ2（10g）  
タイム 2本  
ローリエ 2枚  
ローズマリー 2本

## 官能評価

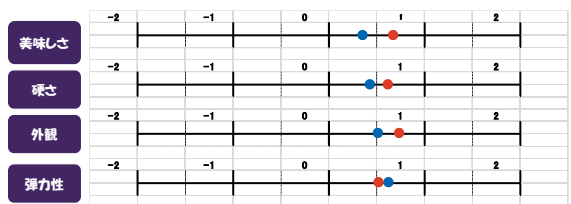


- 評価方法として、マーメレード煮とコンフィ共にシカ肉と牛肉とで同じ条件で調理したものを用意し、パネルには肉の種類は伏せて試食してもらって無記名式比較法で行う。
- シカ肉と牛肉を食べ比べてもらい、シカ肉が食肉として受け入れられるかどうか調べることを目的とした。

## 官能評価 1

評価法：無記名式比較法  
パネル：63名（浜大健康栄養学科2年生）  
実施日：2011年7月22日

### マーメレード煮

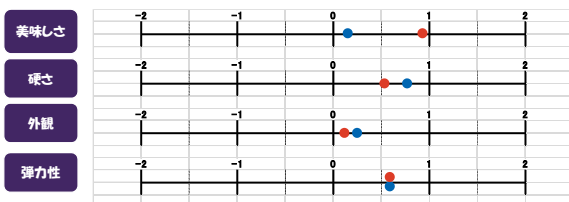


●：シカ肉 ●：牛肉

## 官能評価 2

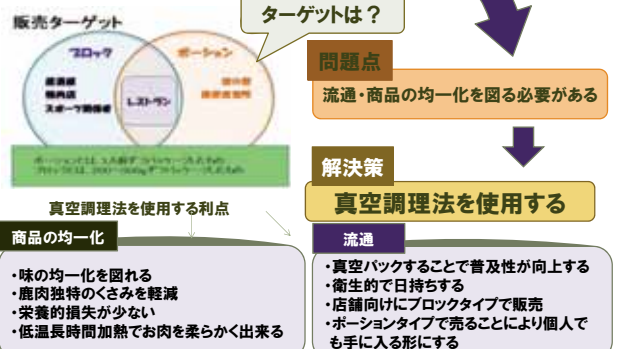
評価法：無記名式比較法  
パネル：63名（浜大健康栄養学科2年生）  
実施日：2011年7月22日

### コンフィ



● シカ肉 ● 牛肉

## 商品化に向けて





## 部位検討

	価格(1人前)	食感	特徴
マーメレード煮 (もも肉)	248円	軟らかい	味がしみ込みやすい
コンフィ (肩ロース)	368円	弾力性がある	鹿肉特有の味を生かしている

使用部位

マーメレード煮

もも肉

柑橘系の酵素と糖の保水性により軟らかく仕上がる

コンフィ

肩ロース

鹿肉特有の味を残した料理法として「コンフィ」という料理手法を用いた

## 完成品(パッケージ化)



売り方

- ・ポーションタイプ(1人前ずつパッケージ)
  - ・ブロックタイプ(200~300gずつパッケージ)
- 道の駅や焼き肉店スポーツ関係者等に販売!!!

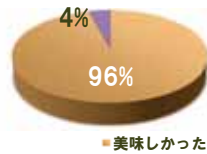
## 市場動向調査

1. シカ肉を食べたことがありますか?

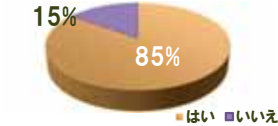


シカ肉を試食して回答いただきました。  
はい or いいえ

2. シカ肉の試食はいかがでしたか?



3. シカ肉を今後購入してみたいと思うか?



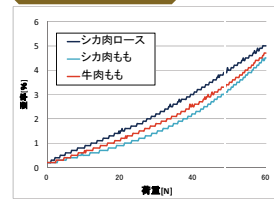
## クリープ試験

試料は5cm、横2cm、高さ1.5cmに切り揃えた。

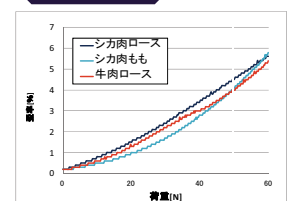
気温: 25℃  
試料温度: 27.5~29.5℃  
使用プランジャー: No.21  
測定速度: 1.000mm/sec



## マーメレード煮



## コンフィ



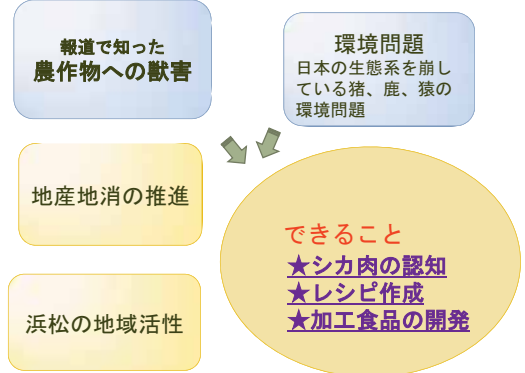
マーメレード煮、コンフィともに調理方法による差はなかった。  
シカ肉ももはシカ肉ロースと比べ、牛肉により近い物性であった。

## まとめ

問題点: 肉の価格の高さ  
調理の工夫不足  
流通の問題

官能評価の結果  
シカ肉と牛肉の差があまり見られない  
味付けの工夫次第では受け入れられる

## 6次産業化におけるジビエ料理の開発



## 参考文献一覧

- ・川上栄子他: 真空低温調理法を用いたシカ肉の食資源としての可能性. 平成25年度日本調理科学会要旨集. 2013
- ・吉村美紀他: 兵庫県丹波地域におけるニホンジカ肉の栄養特性. 日本栄養・食糧学誌. 66-2 95-99. 2013
- ・久木野穂子: 鹿肉の利用に関する研究. 平成20年度日本調理科学会要旨集. 222. 2008
- ・吉村美紀他: 天然シカ肉加工品の物性および嗜好性に及ぼす多殺菌天下の影響. 日本食品科学会誌. 58-11 517-524. 2011
- ・西念幸江他: 鶏肉の真空調理に関する研究(第1報). 日本家政学誌. 54-7 591-600. 2003
- ・西念幸江他: 鶏肉の真空調理に関する研究(第2報). 日本家政学誌. 54-10 867-878. 2003
- ・石塚 謙他: 野生ホシシウジカ筋肉における一般成分、無機物含量と色調. 日本畜産学報. 72-10 551-556. 2001
- ・全日本鹿協会: 日本鹿研究. 創刊号. 2010
- ・寺島健彦: 静岡県(伊豆市)に生息するシカ肉の成分分析. 浜松大学健康プロデュース雑誌. 5-1 93-97. 2011
- ・川村欣也他: 静岡県西部地区で発生したシカ生肉またはイノシシ生肝摂取後のE型肝炎肝炎3例. 肝臓. 51-8 418-424. 2010
- ・新調理技術協議会: わかりやすい真空調理レシピ. 柴田書店
- ・長田鉄司、長田勇久: 真空調理で日本料理. 柴田書店. 2002
- ・大越ひろ、神宮秀夫: 食の官能評価入門. 光星館. 2009
- ・肉食研究会: うまい肉の科学. ソフトバンククリエイティブ. 2012
- ・永瀬正人: ジビエ料理大全. 旭屋出版. 2007
- ・C・W・ニコル: Venison うまいシカ肉が日本を救う!! かんぼう. 2013
- ・松井賢一他: うまいぞ! シカ肉 -捕獲、解体、調理、販売まで-. 農文協. 2012

ご静聴ありがとうございました

2014. 3. 8

## 「6次産業化」の消費者理解に向けて

加藤裕治(静岡文化芸術大学)

## ■本日の主な報告内容(ポイント)

- 現在の食(農)は「頭」で食べるもの
- 東京・青山のファーマーズマーケットの事例から
- 「表現」が「消費者(参加者)」への切り口を創る

2

## ■これでは少し残念・・・



楽天 ぎふモノSHOP <http://item.rakuten.co.jp/gifumono/c/0000000102/>

3

## ■広告・広報の領域と「表現」とは何か？

### ▼生産者の領域

⇒生産/加工・流通/販売の仕組み+  
生産物・商品(マーケティング領域)

### ▼広報・広告の領域

⇒生産者のこと・商品を消費者に広く伝える+  
理解の「表現」を創ること(“翻訳”)

説得の説明のほかに  
イメージ化、比喩などを利用。

### ▼消費者

⇒広報・広告領域とは消費者が受け入れ理解する「表現」をつくること

4

## ■6次産業化による消費者との接点形成

- 「生産/流通・加工/販売」の一体化により
  - 自らの「口」でメリットを伝えられる
  - 消費者への「説明資源」の増加(リアリティの増大)
  - 「場」やメディア(チラシなど含め)で自らの表現で作物や商品を伝えることが可能
- ⇒消費者との接点を、どう考えるか？

5

## ■消費者にとって食(農)とは？①

- 昨年話題になった食品偽装表示問題
  - 表示が「正しくない」という問題だけではない
  - 高級感、名産地、ご当地、鮮度、手作り・・・といったキーワードへの反応
- ⇒消費者が食(農)をどのようにとらえているか、の象徴的な事例

6

## ■消費者にとって食(農)とは？②

- 人は食(農)を「頭」で食べている
  - 味、見た目、におい、おいしさという感覚的なもの(食材・商品の良さ)に加え・・・
  - 文化、知識、イメージという「情報」を食べている(コミュニケーション手段にもなる)
- ⇒だから食(農)は消費者に「どう伝えるか=(彼らが興味を引く)表現」が重要になる

7

## ■青山ファーマーズマーケットの事例①



- ・2009年より開催。
- ・UNU(国連大学)の協力(会場など)
- ・運営メンバーは20代が中心

●青山ファーマーズマーケット  
毎週土日に開催(10-16時)  
場所:東京青山、国連大学前広場  
主催:NPO法人Farmer's Market Association)  
出店者は60件程度(ほぼ固定だが変更有)



## ■青山ファーマーズマーケットの事例②



9

## ■青山ファーマーズマーケットの事例③



10

## ■青山ファーマーズマーケットの事例④



11

⇒細かなレギュレーションの存在=「舞台」としてのスタイルづくり

## ■マーケットという「舞台」づくりの工夫

- 「青山」という「シチュエーション」とのマッチング
- 細かなレギュレーションによる売り場の「スタイル」づくり
- 互いに話し合える「コミュニケーション」の場づくり(情報取得・交換、楽しみの場)

⇒単にモノを買うだけに終わらせない「舞台づくり」  
=「ファッション／(ライフ)スタイル」を「表現」

## ■多くの人と接点を作る工夫

- 出版連動(出店者紹介)  
⇒デザイン・出版の人々の巻き込み(採算度外視?)



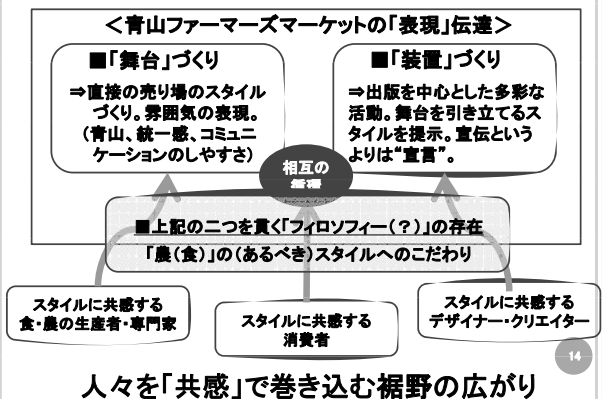
- トークショー(農業写真家、レシピ研究等)、犬の里親支援など



13

⇒農・食に直接関係のない人を巻き込む「装置」

## ■「表現」を通して「共感」が産まれる



14

## ■消費者の変容

速水健朗  
『フード左翼とフード右翼  
食で分断される日本人』  
(朝日新書 2013)

⇒消費者の分裂を指摘  
地域志向・健康志向 対  
安さ志向・グローバル志向  
を指摘



15

## ■本日のまとめ

6次産業化(の良さ)を消費者の理解へとつなげるために...

- 食(農)は「頭」で消費する
- 「表現」への共感が参加者との接点を拡大
- その場にあった固有の「表現」づくり(青山の例は青山でしか通用しない)
- 消費者像の捉え直しの必要性

16

(有)三和畜産とんきい  
地域連携による6次産業化の取り組み



有限会社三和畜産  
代表取締役 鈴木 芳雄



有限会社 三和畜産  
豚屋 とんきい

- ・企業理念  
みんなのしあわせづくり
- ・経営理念  
あたりまえにこだわって、自然と動物を愛し、安心、安全、おいしさ、楽しさを創造しよう。

2

## 会社概要



- ・社名 有限会社 三和畜産
- ・所在地 静岡県浜松市北区細江町三和2059
- ・設立 1979年1月(法人化)
- ・従業員数 社員 8人 常時雇用従業員30人
- TEL053-522-2969 FAX053-522-0086
- ホームページ <http://www.tonkii.com/>

3

### 「とんきい」の取り組み



- ・昭和43年  
サラリーマン1年経験し就農後継者  
育成資金(無利息/設備資金)借入養豚場建設  
3カ年計画母豚30頭の仔豚生産養豚開始
- 昭和47年  
母豚60頭の一貫経営を開始  
七夕豪雨に会い肉豚舎水没、養豚場移設決断  
全国養豚経営者会議に入会6次産業に出会う

4

### 「とんきい」の取り組み



- ・昭和52年  
10人で(有)サンエン、共同自家配合工場建設(1年解散)
- 昭和54年  
有限会社三和畜産設立(法人化)  
現在の場所母豚100頭一貫経営を開始
- 東名畜販協同組合9名で飼料配合工場建設
- 昭和57年  
グローバルピックファーム入会(53名)農場成績と財務成績のオープンによる競争の始まり



5

### 「とんきい」の取り組み



- ・平成元年  
直売のとんきいオープン  
農業を幹に枝葉を着けて花を咲かせる実を着けるとんきいの6次産業の「夢農業の実現」スタート
- 平成5年  
長男利彦養豚場に就農  
銘柄豚の試験肥育開始
- 平成10年  
静岡型銘柄豚認定農場、認定販売店として登録  
ブランド豚「浜名湖そだち」とんきいグループ設立3名



6

### 「とんきい」の取り組み



- ・平成12年  
全国銘柄豚コンテスト、味覚の部全国第1位
- 平成14年  
奥浜名カテキッド共和国、大統領就任  
静岡県ニュービジネス大賞受賞
- 遠州夢倶楽部設立(地元酒屋、商品開発、三方原ポテトチップ)
- ミートレストランとんきい開店



こだわりの味協同組合入会(製造会社40社、販売会社50社)

7

### 「とんきい」の取り組み



- ・平成17年  
農家のレストランとんきい開店
- 平成18年  
次男雅之とんきいとんきい製造販売に入社  
養豚場増設母豚180頭一貫生産  
フジキンカ「ジンフォアフジロック」試験肥育開始
- 平成19年  
細江特別栽培米研究会、細江まいひめ、生き物調査  
ビオトープ米作りスタート、50借地にてオーガニック野菜栽培スタート
- 平成24年  
NPO法人浜松百姓のチカラ設立(57名)



8

## 「とんきい」のこだわり～「あたりまえ」にこだわる

1. 餌にこだわる
2. 水にこだわる
3. 豚舎にこだわる
4. 自ら加工する
5. 無添加にこだわる
6. 自ら販売する
7. 自ら料理する
8. 自ら米を生産する
9. そして6次産業化へ



9

## 6次産業化への取り組み①



1. 今まで 自ら「畜産」+「加工」+「直売」+「飲食店」をやってきた
2. これからは、
  1. 「地域の農業の底上げ」が必要
  2. 「連携」が大事
  3. 「地域ならではの」の商品を武器に農家が動く
3. そして6次産業化へ挑戦
  1. 購入量日本1位ともいわれる「コロッケ」に焦点
  2. 自社生産と新規就農農家の受託生産
  3. 地産地消を進める(株)ゆめ市と販売連携

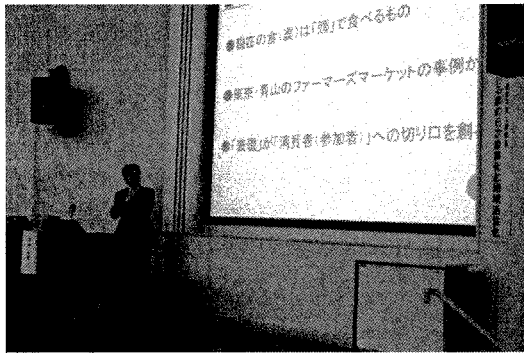
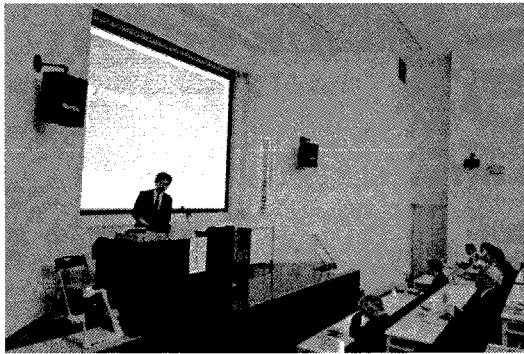
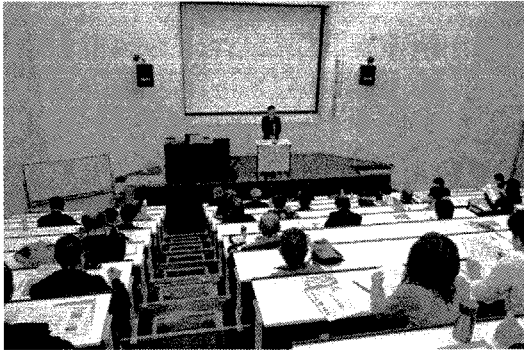
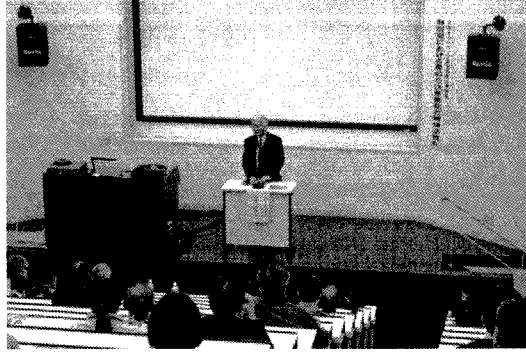


10



11

講座写真「静岡県における農の6次産業化と地域活性化」



大学ネットワーク静岡共同公開講座

# 静岡県における 農の6次産業化と 地域活性化

わが国の食料自給率は先進国で最も低い。世界人口が急増して食料需要が高まる中において、わが国の自給率も高めておくことが重要である。政府は、国の成長戦略の一つとして農業を挙げている。しかしながら、農業は収益性が低い。従事者の減少と高齢化が進んでいる。この解決策として注目されるのが6次産業化であり、本講座で市民に向けて情報発信したい。

## 1 和食のユネスコ無形文化遺産登録について

13:00~13:20 熊倉 功夫 (静岡文化芸術大学学長)

## 2 農の6次産業化について制度説明

13:20~13:40 川崎 潔 (関東農政局浜松地域センター総括管理官 [農政推進])

## 3 6次産業化による浜松市の中山間地活性化への試み

13:40~14:10 船戸 修一 (静岡文化芸術大学文化政策学部講師)

## 4 文化財的価値としての農業・農村と6次産業化

14:10~14:40 四方田 雅史 (静岡文化芸術大学文化政策学部准教授)

< 休憩 >

## 5 6次産業化におけるジビエ料理の開発

15:00~15:30 川上 栄子 (常葉大学健康プロデュース学部講師)

## 6 「6次産業化」の消費者理解に向けて

15:30~16:00 加藤 裕治 (静岡文化芸術大学文化政策学部准教授)

## 7 農の6次産業化の取組み事例と今後の展望

16:00~16:30 鈴木 芳雄 (NPO法人浜松百姓のチカラ理事長・有限会社三和畜産社長)

< 司会進行 > 米屋 武文 (静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

**申込方法** 氏名、所属、連絡先(電話・FAX・E-Mailなど)を明記の上、大学ネットワーク静岡宛にお申込みください。

主 催：静岡県 / 大学ネットワーク静岡 / 静岡文化芸術大学

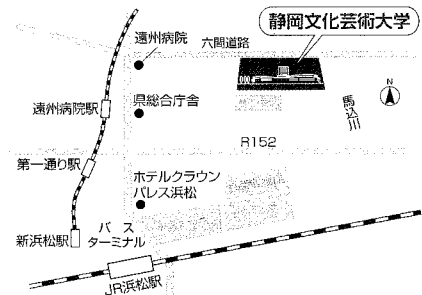
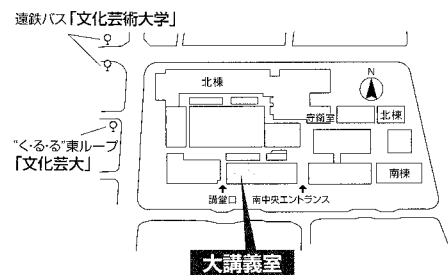
- ◎ 参加無料
- ◎ 事前申込制
- ◎ 先着順

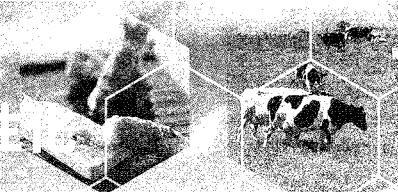
# 2014.3.8 [土]

13:00~16:30 (開場 12:30)

会 場

静岡文化芸術大学 大講義室 (南176)  
浜松市中区中央2-1-1 (JR浜松駅より徒歩15分)





LECTURER



熊倉 功夫

東京教育大学文学部史学科卒、同大学院博士課程修了。日本文化史専攻。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、財団法人林原美術館館長を歴任。現在、静岡文化芸術大学学長、国立民族学博物館名誉教授。喫茶文化や食文化、民芸などの日本の生活文化まで、研究テーマは多岐にわたる。

静岡文化芸術大学学長



船戸 修一

東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程単位取得退学。専門は、農村社会学、環境社会学。日本学術振興会特別研究員、東京大学研究員、法政大学研究員などを経て、2011年から現職。現在、浜松市の中山間地域の集落や農林業についてのフィールドワークを行い、その現状や課題を研究している。

静岡文化芸術大学文化政策学部講師



四方田 雅史

早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学、博士(経済学)。日本学術振興会特別研究員、早稲田大学政治経済学術院助教などを経て現職。専攻は近代以降の日本やアジアの経済史・産業史などで主に日本・アジアの産地制度を研究してきたが、最近では産業遺産などの文化財に関する研究も行う。

静岡文化芸術大学文化政策学部准教授



川上 栄子

共立女子大学卒業、同大学院家政学研究科食科学専攻修了。管理栄養士として実務経験、東海調理製菓専門学校講師を経て、現在、常葉大学健康プロデュース学部健康栄養学科講師。研究テーマは地域作物を使用したレシピ開発、食生活実態調査(食物摂取頻度調査、行事食実態調査)。

常葉大学健康プロデュース学部講師



加藤 裕治

千葉大学文学部行動科学科卒、同大学社会文化科学研究科博士課程修了。博士(学術)。株式会社文化科学研究所研究ディレクターなどを経て、2012年より現職。文化社会学、メディア論が専攻。メディア文化や消費文化が日常の生活文化に与える影響などを研究テーマとしている。

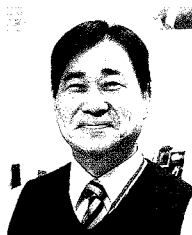
静岡文化芸術大学文化政策学部准教授



鈴木 芳雄

1968年、オーガニック先進国ヨーロッパスタイルの畜産を手本に創業。利益優先の効率経営よりも日本の食卓を支える食の「豚肉マイスター」を目指し、顧客の顔がみえる直売店も経営。現在、ブランド豚肉「浜名湖そだち、フジキンカ」生産、特別栽培米「まいひめ」生産等、農業も拡張。NPO法人浜松百姓のチカラ理事長。

NPO法人浜松百姓のチカラ理事長  
有限会社三和畜産社長



米屋 武文

名古屋大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。静岡県立大学短期大学部助教授、ハワイ大学客員研究員、ケニア共和国ジャモケニヤッタ農工大学客員教授などを経て、2001年から現職。現在は「伝統食文化の発掘と育成」、「米粉食品の開発」などを研究テーマとしている。NPO法人浜松百姓のチカラ顧問。

静岡文化芸術大学文化政策学部教授

お申込み

- 定員は150名で、先着順に受付します。
- 氏名、所属、連絡先を明記の上、大学ネットワーク静岡宛にE-mail・FAXでお申込みください。
- 会場に駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

お名前		
所属(会社・団体・学校名)		
連絡先	TEL	FAX
	E-mail	

[お問い合わせ] 大学ネットワーク静岡 FAX 054-249-1820 E-mail dns@daigakunet-shizuoka.jp



第2回「静岡 2.0」フォーラム 2014  
今私たちができる「地域」づくり

## 実施事業の概要

- 1 共同公開講座の名称：  
大学ネットワーク静岡共同公開講座「第2回「静岡2.0」フォーラム2014」  
「今私たちができる「地域」づくり」
- 2 開催日時：  
1日目：平成26年2月22日(土)13:00～17:00  
2日目：平成26年3月2日(日)13:00～17:00
- 3 開催場所：  
1日目：静岡県産業経済会館 大会議室  
(静岡市葵区追手町44-1)  
2日目：浜松市市民協働センターギャラリー  
(浜松市中区中央1丁目13番3号)

#### 4 事業の概要と成果：

##### (1) 概要

レジリエントな静岡を創るために、阪神淡路大震災や東日本大震災の前後の地域づくりに携わってこられた方々から、「被災を乗り越えた復興力とはなにか」を学ぶとともに、国際連合大学の方と浜松を中心として活動する市民団体の方々から、復興力の基礎となる「レジリエンス」と地域の「持続可能性」について学んだ。

##### (2) 参加者

一般県民、自治体職員、学生など計80名

##### (3) プログラム

###### <1日目>

「被災地から、真の復興力を学ぶ」

- ・静岡2.0 活動報告と今後の展望
- ・基調講演①「阪神淡路大震災を乗り越えてまちをつくる」  
清水光久(神戸市長田区真野地区まちづくり推進会事務局次長)
- ・基調講演②「東日本大震災を受けて、石巻の復興を見つめて」  
高橋 朗(宮城県石巻好文館高等学校教諭)

###### ・ワークショップ

「静岡に、今必要なこと、今できること」

###### <2日目>

「レジリエンスと持続可能性を学ぶ」

- ・静岡2.0 活動報告と今後の展望
- ・基調講演①「レジリエントで、持続可能な地球を創る」  
齋藤 修(国際連合大学サステイナビリティと平和研究所・アカデミック・プログラム・オフィサー)
- ・基調講演②「レジリエントで、持続可能な遠州を創る」  
大村 淳(遠州トランジションタウン代表)

###### ・ワークショップ

「レジリエントで、持続可能な静岡を創る」

【企画・運営：静岡2.0(学生発の地域団体)】

## 今私たちができる「地域」づくり

企画・運営：静岡 2.0

### ◆第1回「被災地から、真の復興力を学ぶ」報告書

担当：宮崎真菜（静岡 2.0 事務局）

#### 【概要】

日時：2014年2月22日(土)13時～17時(12時半受付開始)

場所：静岡県産業経済会館大会議室(静岡市葵区追手町44-1)

目的：・地域のレジリエンス(復興力)および持続可能性は日常の中で育むもので、それは誰でも参画出来るものであり、被災前に復興過程を見据えて行動しておくことが、地域のレジリエンスを高めるということに気づく。

・参加者同士が繋がり、今後続く連携が生まれる。

講師：・清水光久氏(神戸市長田区真野地区まちづくり推進会事務局次長)

・高橋朗氏(宮城県石巻立好文館高等学校教諭)

#### 【内容】

##### 1. 基調講演① 「阪神淡路大震災を乗り越えてまちをつくる」 清水光久氏

阪神淡路大震災において、神戸市内でも大規模な被害を被ったにもかかわらず、迅速かつ適切な復旧と復興が行われた神戸市長田区真野地区から、復興力のポイントについてお話いただいた。真野地区は、1965年より始まった公害追放活動が端を発し、市民主体で、行政、企業も参加するまちづくりが盛んであった。震災時には、日頃の協力関係が功を奏し、各々が力を合わせて消火活動、救命活動、対策本部の立ち上げに携わり被害を最小限に食い止めることができた。地域の活発な動きは震災後も続き、暴力団追放運動や東日本大震災の被災地支援にも取り組んだ。「自分たちのまちは自分たちでつくる」という意識が住民の中にあり、それは、人々が日頃から繋がり自分の地域の課題解決に向けて動いていくことから育まれるものであるということが、清水氏の見解であった。

##### 2. 基調講演② 「東日本大震災を受けて、石巻の復興を見つめて」高橋朗氏

東日本大震災において甚大な被害を受けた石巻市の被災直後と復興過程における地域の様子や変化を、一住民と高校教師という立場からお話いただいた。震災を経て、学校と地域との連携が上手くいかないこともあり、地域とは何かを考えさせられたという。また、被災を通じて高校生にも変化が起こり、「地域のために何かしたい」と考え地域の中で活発に活動する生徒が増えたとの事だった。高橋氏自身はそのような生徒たちに今まで以上に寄り添う気持ちを大切にするようになったという。「学校」という場は地域に対してオーブ

ンであるべきで、日頃から地域と学校とで協力していくこと(例えば、一緒に避難訓練を行う等)が今後必要になってくると高橋氏は述べた。また、津波により学校が浸水する様子を映した動画を会場で視聴し、来場者に強い印象を与えた。

### 3. ワークショップ 「静岡に、今必要なこと、今できること」 静岡 2.0

参加者が「他の人と話してみたいこと」を挙げ、同じテーマ同士でグループを作り、グループ内でそのテーマについて話す対話形式のワークショップ(通称：オープンスペーステクノロジー)を行い、最後にグループごとの話し合いの結果を全体で発表した。「東日本大震災の話をしたい(高橋氏も参加)」「阪神淡路大震災の話をしたい(清水氏も参加)」「地域と学校のつながり」「地域とは?」「どうすれば地域でつながれるか?」「自分の地域で何かやりたい」という6つのグループに分かれ対話した。「細く長くつながることが大事」「まわりみちをしてつながっていききたい」といった声が挙がった。全てのグループに「つながり」という言葉が出てきたことが印象的であった。

#### 【フォーラムに寄せて】

静岡県は、南海トラフ大地震により甚大な規模の被害を受けることはほぼ不可避であるが、「その後」のために今からできることを考え動いておくことは必要不可欠の備えである。今回、被災地から地域の復興力について学び、静岡 2.0 が進める事前復興という視点を参加者と共有できたことは、とても意義のあることのように感じる。会の中で何度も「つながり」という言葉が出てきたことが印象的で、参加者からは「地域の人とつながっていききたい」「まずは近所の人へのあいさつから始めたい」「地域行事に参加したい」といった、次への行動に繋がる言葉も多く見受けられた。地域の復興力を高める機運を盛り上げることができたのではないかと考える。

一方、今後の課題としては、いかに多くの人々を巻き込んでいくかである。普段の生活を過ごしていて静岡 2.0 の情報が届かなかったり、足を運ぶことを躊躇してしまう人々が興味を持てるしかけや、つながるしかけを、あらゆる工夫を凝らして取り組んでいかなければいけない。

#### 【フォーラムの様子】



(上：講演をする清水光久氏)



(上：ワークショップの様子)

(上：講演をする高橋朗氏)



(上：ワークショップのグループで話した話を全体に向け発表)

## 第2回「レジリエンスと持続可能性を学ぶ」

作成者：秋田（静岡 2.0 事務局）

### 【概要】

日時：2014年3月2日(日)13時～17時(12時半受付開始)

場所：浜松市市民協働センター ギャラリー(静岡県浜松市中区中央1丁目13番3号)

目的：・レジリエンスの本質を、研究と実践の両面から探る。

・国連大学で行われているレジリエントで持続可能な地球を創るための研究と、発信の取り組みと、環境倫理の視点から静岡県西部で地域社会作りを行う両者の講演を通し、これから静岡でできることを考える。

講師：・齋藤修氏(国際連合大学サステイナビリティと平和研究所アカデミック・プログラム・オフィサー)

・遠州トランジションタウン代表 大村淳氏

### 【内容】

#### 1. 基調講演① 「レジリエントで、持続可能な地球を創る」

はじめにレジリエンスとサステイナビリティ（持続可能性）や、多様性と冗長性の概念を説明いただいた。その後、生態系サービス、里山・里海の定義と、その回復力（レジリエンス）には生物多様性が不可欠であることを説明いただいた。これらを踏まえ、東日本大震災による里山・里海の生態系サービスへの影響を、具体的なデータを交えてご紹介いただいた。東日本大震災に関連し、全国の原子力発電所がある地域で事故が起こった場合に予想される生態系サービスへの影響を説明いただいた。最後に、生態系サービスに基づいた調査に裏づけされた、持続可能な地域の事例をご紹介いただいた。その例として、石川県能登半島の能登島長崎地区の、食材の調達実態が、自家生産と市場を介さない供給サー

ビスが見られた、ということが挙げられた。

## 2. 基調講演② 「レジリアントで、持続可能な遠州を創る」

自給自立し、持続可能な生活や、場をデザインする手法である「パーマカルチャー」の解説と共に、その手法を多用した持続可能なまちづくりである「トランジションタウン」の活動についての説明をいただいた。持続可能な暮らしの説明では、日常生活は常に化石燃料や電気に依存していることが例として取り上げられ、それらに依存しない生活の実践事例をご紹介いただいた。トランジションタウン活動の説明では、多様な方向性のあるトランジションタウン活動においては、さまざまな人のさまざまな知識が必要であることや、自分がイメージしやすく、リアリティを感じることでできる目標に向かって、楽しくやるのが、活動の持続には大切であると説明いただいた。

## 3. ワークショップ 「レジリアントで、持続可能な静岡を創る」 静岡 2.0

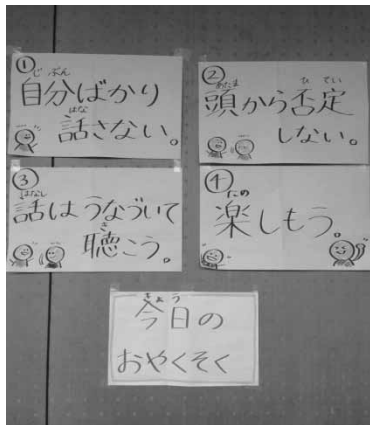
参加者の方々に、ほかの人と話してみたいことをあげ、同じテーマ同士でグループを作り、グループ内でそのテーマについて話す対話形式のワークショップを行った。人と人とのつながりを作るにはどうすればよいか、未来について話し合いたい、浜松市で何ができるかについて考えたい、などのテーマで、全7グループでワークショップを行った。30分間の話し合いの後の、各グループの全体発表では、話し合いの中でのキーワード、話し合いで出た結論、今後に向けての宣言などが発表された。

### 【フォーラムに寄せて】

本フォーラムは、レジリアントと持続可能性について、理論の視点と、具体的な実践の視点からレジリアンスと持続可能性について学び、学んだことをもとに、今自分に何ができるかということを考え、参加者が行動に向けて第一歩を踏み出すきっかけとなることを目的として開催された。2つの基調講演を通し、学びを得たことと共に、ワークショップでの話し合いを通して、参加者の方々に、同じテーマで多くの世代、考え方の人と話し合う経験を与えることができたほか、本フォーラムでの学びを、参加者一人ひとりの友人・知人や、所属している団体に発信・共有しようとする動きが見られた。本フォーラムを通して、地域を客観的な眼で見て、地域にもともとあるものやいる人、その知識を有効に活用にし、大切にしていくことがレジリアンスと持続可能性にとっては大事であることを学んだ。静岡 2.0 としては、本フォーラムで得た知識を今後の活動に生かすと共に、本フォーラムで得たつながりを生かしていきたいと考えている。



(上：ワークショップの様子)



(上：全体を通してのグランドルール)

私たちは、あなたと一緒に「地元」を育てていきたい、と考えています。

育てるといっても、難しいことはありません。

たとえば、地元の人と一緒にご飯を作って食事をしたり、体を動かして汗をかいだり、お話ししたりして、だんだん知り合いが増えていく。

そこに、子供からお年寄りまで元気な人からちょっと元気がない人まで、地域のさまざまな人が集まって、一緒に楽しい時間をすごせたら、素敵だと思いますか？

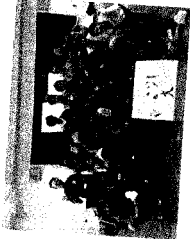
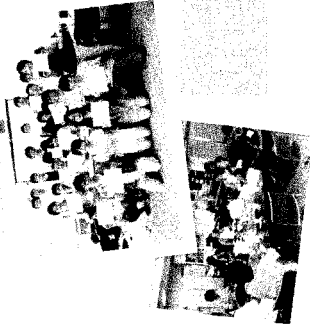
そんな地域なら、地震や津波をはじめ、いろいろな困難が地域にふりかかったとしても、力を合わせて乗り越えて行けるはず。

楽しみながら、自分の地元の力になりませんか？

地震も津波も乗り越えられる、私たちの

# 静岡を育てよう。

▼第1回 静岡ひろば

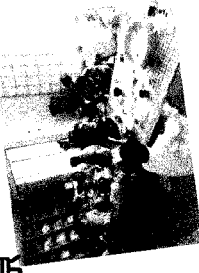


▲第2回 静岡ひろば  
ほっこり！大運動会

## ★富士

▼  
牧之原いっぴみっかやあ  
夏の巻

## ★牧之原



## ★浜松

### 「ひろば」とは？

静岡県の各地域で、そこに住む誰もが参加できる楽しい場をつくる活動です。  
☆の地区で活動しており、★の地区では活動を始める準備を進めています。

### 「ひろば」ってなに？

「ひろば」を運営していく人たちの学びの場であると同時に、「もっと地域を良くしたい！」という地域のこれからの担う人を育てる講座です。月に1回、県内各地で開催しています。



ブログ : <http://ameblo.jp/shizuoka20> →

Twitter : @Shizuoka2\_0

Facebook : <http://www.facebook.com/Shizuoka2.0>

連絡先 : [from.shizuoka2.0@gmail.com](mailto:from.shizuoka2.0@gmail.com)

興味のある方は、お気軽にご連絡ください！



- 私たちをはじめとする若者が地域へ関わっていないことを、寂しいと思っています。

地域との関わる機会が減ることは、居場所や多様性・豊かさの減少であると考えます。

- 東日本大震災の後、「静岡で何か起こったとき、どうなるんだろう?」と危機感を抱きました。

震災が起き、若者が地域に参画することは、地域の存続に関わるということに気がつきました。この先南海トラフ地震が来ると言われている静岡。「今、震災が起きたら……」現状では、地域で助け合えるつながりが少ないので、人口が流出するなど、地域もそこに住む私たちも、疲れてしまうのでは?と考えました。

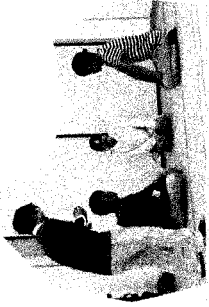
そこで、今、震災が来る前に、「地域で人のつながりをつくろう」と生まれたいのが「静岡2.0」です。

### 静岡2.0の由来

例えば、パソコンでソフトウェアをバージョンアップするときに、一つ数字が大きくなるように、現状の静岡での人のつながり方を1.0として、2.0にバージョンアップする、という願いを込めました。

### めざしている地域の将来像

- ①地域に困難なことが起きても、一緒に手を取り合って生活を再建することができる、つまり幸せな暮らしを自分たちの手でつくることができる地域をめざします。
- ②そのため、困難な状況になる前から、地域に住む多様な人が関わることで、つながりを築ける場や機会をつくりまします。



地域の人と人とのつながりをつくる取組みを紹介します!!

## ほっこり村

地域の異世代・異文化が交流するための即興演劇ワークショップで、誰もが楽しく手軽に参加することができます。みんなできつりあげる、その過程を大事にし、楽しみます。「受け入れる」「伝える」ことを積み重ねて、他者と自分の頭の中のイメージを共有し、その場にいる人と力を合わせて「こころ」と「からだ」で表現します。



▲第1回養成講座  
ほっこり村入門



▲第2回静岡ひろば  
ほっこり!大運動会



▲第2回養成講座



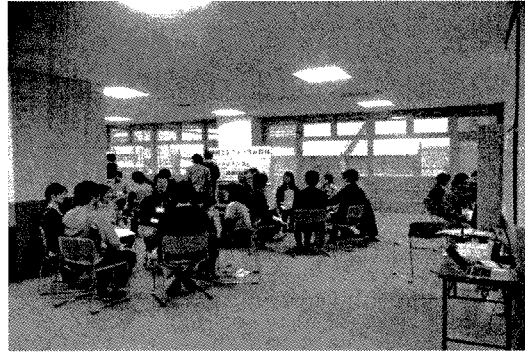
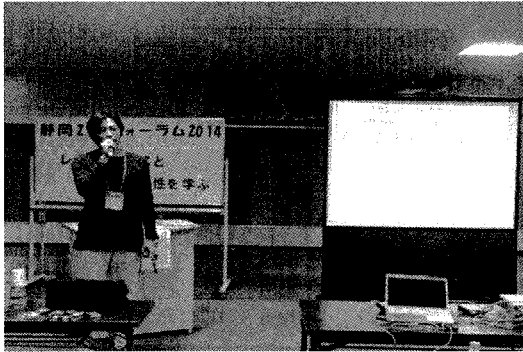
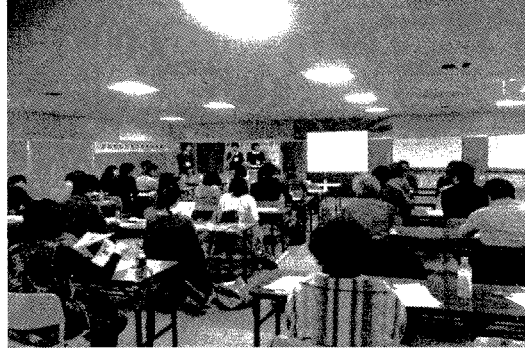
▲第1回静岡ひろば  
アレンジ:ふらっとタイム

若者男女どんな立場の方も対等に気軽に話をし、様々な価値観に触れることができ、相手のこと・自分自身のことをもっと知ることができる、お話がメインのワークショップ。一緒にお話した人と、「もっと話したいな」、「まだこの人と会いたい!」と思い、実際に実現するようつながりを生みます。

講座写真「第2回「静岡2.0」フォーラム2014」(1日目)



講座写真「第2回「静岡2.0」フォーラム2014」(2日目)



参加  
無料

要申込

各日  
定員  
60名

(第2回)

「静岡 2.0」フォーラム 2014

今私たちができる

「地域」づくり

第1回

2014年2月22日(土)

静岡県産業経済会館 大会議室

(静岡市葵区追手町 44-1)

第2回

2014年3月2日(日)

浜松市市民協働センターギャラリー

(浜松市中区中央1丁目13番3号)

\*両日とも 13:00~17:00

(12:30 受付開始)



趣旨

レジリエントな静岡を創るために、阪神淡路大震災や東日本大震災の前後の地域づくりに関わってこられた方々から、「被災を乗り越えた復興力とは何か」を学ぶとともに、国際連合大学の方と浜松を中心として活動する市民団体の方々から、復興力の基礎となる「レジリエンス」と地域の「持続可能性」について学びます。

第1回 2月22日(土) 静岡

「被災地から、真の復興力を学ぶ」

日本を襲った阪神淡路大震災と東日本大震災の2つの大震災に焦点を当てます。

神戸市長田区真野地区と石巻市の事例から真の復興力とは何かを考えます。

テーマ

内容

第2回 3月2日(日) 浜松

「レジリエンスと持続可能性を学ぶ」

レジリエンスの本質を研究と実践の両面から探ります。国連大学で行われているレジリエントで持続可能な地球を創るための研究と発信の取り組みと、環境倫理の視点から静岡県西部で地域社会づくりを行う両者から、これから静岡でできることを考えます。

静岡 2.0 活動報告と今後の展望

「阪神淡路大震災を乗り越えてまちをつくる」

神戸市長田区真野地区まちづくり推進会事務局長

清水光久 氏

「東日本大震災を受けて、石巻の復興を見つめて」

宮城県石巻好文館高等学校教諭 高橋 明 氏

「静岡に、今必要なこと、今できること」

静岡 2.0

ワークショップ

はじめて 静岡 2.0 活動報告と今後の展望

「レジリエントで、持続可能な地球を創る」

国際連合大学サステナビリティと平和研究所

アカデミック・プログラム・オフィサー 齋藤修 氏

「レジリエントで、持続可能な遠州を創る」

遠州トランジションタウン代表 大村 淳 氏

「レジリエントで、持続可能な静岡を創る」

静岡 2.0

\* 両日とも終了後、懇親会も予定しております。ぜひご参加ください。

レジリエンス

(resilience)

「しなやかな」、「弾性のある」という意味です。

強い風にさらされても折れずしなやかに立ち直る竹には、強い地下茎や根があります。私たち人間にとって、それは、日常生活のなかで築いた多様な人との関係性や連帯だと、私たち「静岡 2.0」は考えています。

災害が起きた時に、しなやかに立ち上がり前を向けるように、「レジリエンス」はキーワードであり、希望です。

お申込み

※お名前、参加日、お住まいの市・町、ご連絡先（メールアドレス）をご明記ください

お問い合わせ

from.shizuoka2.0@gmail.com [静岡 2.0 広報担当 長谷川、鈴木]

主催

大学ネットワーク静岡

企画・運営

静岡 2.0 [大学生発祥で地域の人々のつながりづくりをしている団体です]



## 富士山講座とネイチャークラフト

## 実施事業の概要

### 1 共同公開講座の名称：

大学ネットワーク静岡共同公開講座  
「富士山講座とネイチャークラフト」

### 2 開催日時：平成26年2月23日（日）10:00～16:30

### 3 開催場所：プレ葉ウォーク浜北

（浜松市浜北区貴布祢1200）

「静岡県富士山の日 遊びと学びのイベント（西部会場）」内で実施

### 4 事業の概要と成果：

#### （1）概要

富士山の日に因み、県が行うイベントの中で、大学教員と学生により、親子向けに富士山を広く、楽しく知ることができるイベントを実施し、富士山に関心を深める契機とする。

#### （2）参加者

小学生を中心とした子どもと親 約200名  
（ネイチャークラフト作品を作った子ども 49名）

#### （3）プログラム

##### ① 富士山講座（富士山クイズ）14:00～15:00～

富士山クイズと解説による富士山講座

講師：常葉大学 教授 山田辰美

常葉大学自然体験活動研究会学生7名

##### ② ネイチャークラフト教室 13:00～16:00

富士山周辺で収集したどんぐりや、木の実、切り株などで動物などの作品を学生と一緒に親子で作ることにより、富士山や自然を理解する。

講師：常葉大学 教授 山田辰美

常葉大学自然体験活動研究会学生7名

##### ③ 学生のパネル作品展 10:00～16:00

常葉大学自然体験活動研究会の学生により世界文化遺産富士山を解説するパネルを作成し、来場者へ学生が解説を行った。

#### （4）その他

静岡県富士山世界遺産課、環境ふれあい課と協力して実施

【運営協力：常葉大学自然体験活動研究会】

### ① 富士山は世界〇〇遺産？

文化遺産 自然遺産 複合遺産



<http://machibori.com/FEETAEFYS>  
E85415AC122820PFEESBKA4P  
E9187B3197E97581EABE8381EAF  
5E9782C9F



[http://blog.goo.ne.jp/for\\_quarto](http://blog.goo.ne.jp/for_quarto)  
2002/04/15/0001766e0b33c0f464c  
64c7b181d



<http://mavoh.usc.edu.net/article/2202205.html>

### ② 富士山にいない植物はどれ？

フジアザミ



タカネビランジ



フジハタザオ



### ③ この木を食べた動物はどれ？

イノシシ



シカ



リス



### ④ 富士山のシカを食べる動物はどれ？

ライオン



ツキノワグマ



オオカミ



### ⑤ 千円札の裏にある富士山はどこ場所？



西湖(さいこ)



精進湖(しょうじこ)



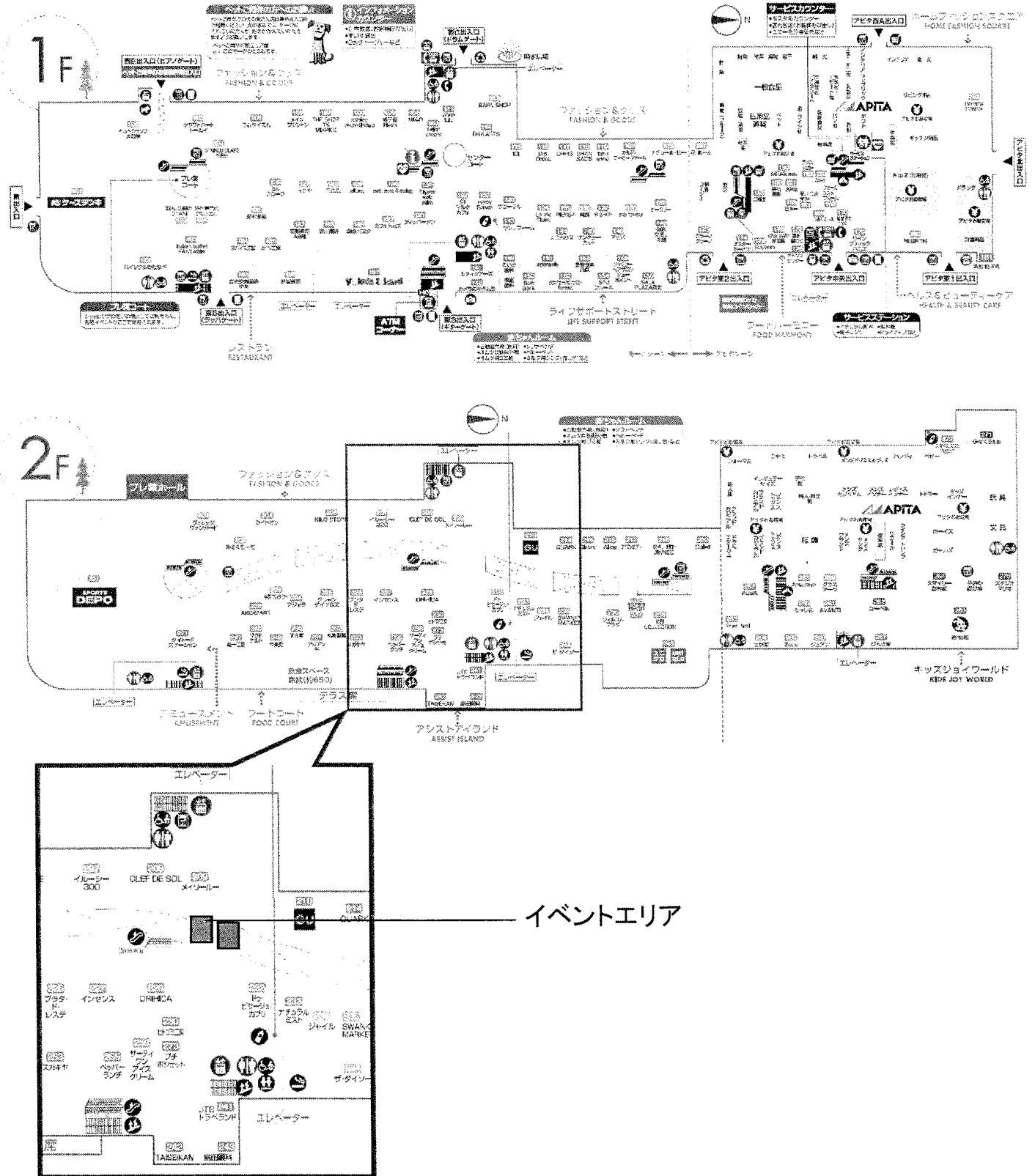
本栖湖(もとすこ)



# 開催エリア

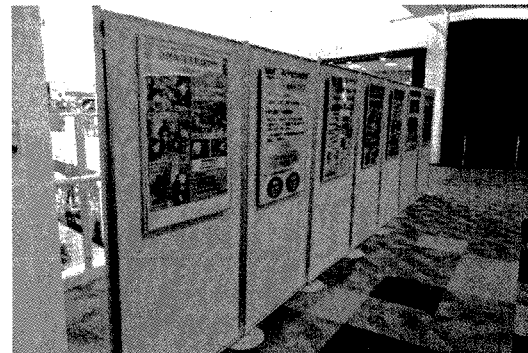
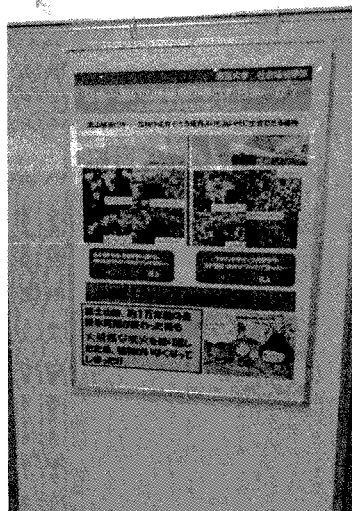
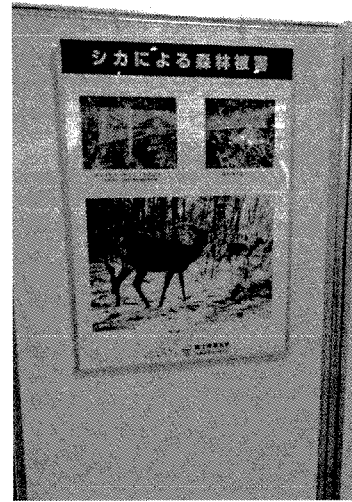
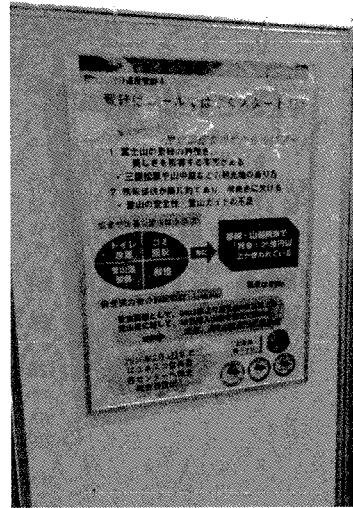
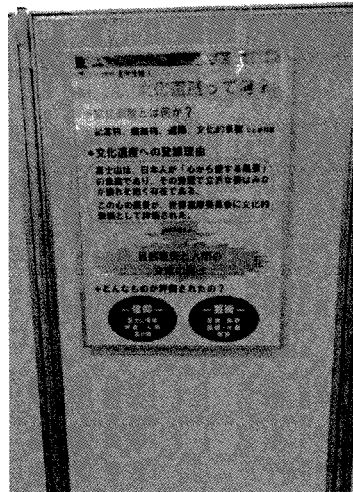
## ■会場図

## プレ葉ウォーク浜北2Fセンターコート付近

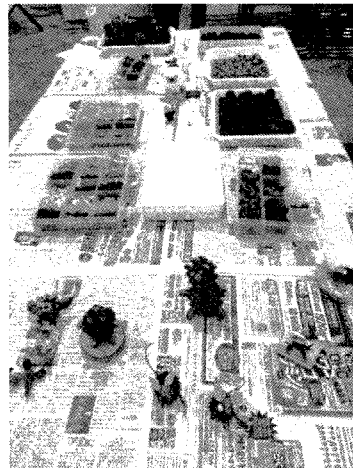
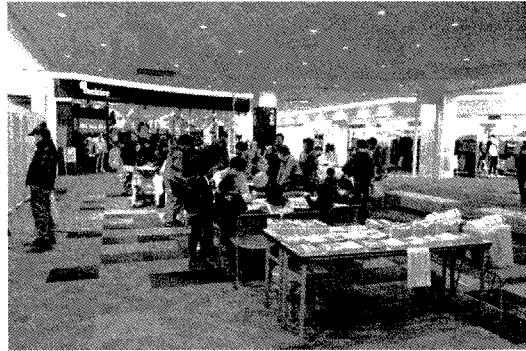
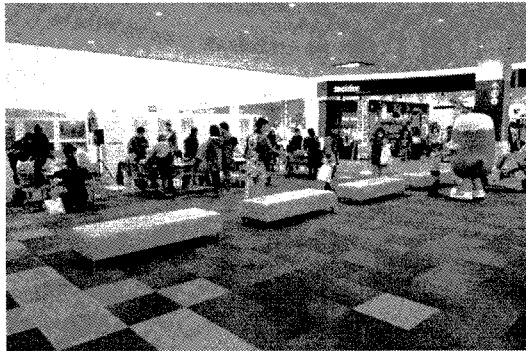




講座写真「静岡県富士山の日イベント 遊びと学びのイベント(西部会場)」



講座写真「静岡県富士山の日イベント 遊びと学びのイベント(西部会場)」



大学ネットワーク静岡

420-0839

静岡市葵区鷹匠 3-6-1 もくせい会館 2階

電話 054-249-1818

